

なんか机にパンツ降ってきたけどどうすればいい？

リンゴ餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校に入学した次の日のホームルーム中にパンツが机に降ってきた主人公。

ちよつと着地点が違っただけで出会いは訪れる。

別に犯罪者扱いされることもなく、けど、普通の女子からは普通に変質者扱いされながらほのぼのと青春するお話。

(注意事項)

筆者はアニメ版しか見てないです。

結構原作と違う点が出てくるかもしれませんが苦手な方はご注意ください。

あと、主人公が結構な変態で外道な思考をすることがありますので、その点もご注意ください。

目次

プロローグ

1

第一話

7

第二話

16

第三話

24

第四話

32

第五話

42

第六話

53

第七話

61

第八話

70

第九話

78

第十話

84

第十一話

95

第十二話

104

第十三話

115

第十四話

127

第十五話

141

第十六話

152

第十七話

162

第十八話

171

第十九話

181

第二十話

191

第二十一話

200

第二十二話

208

第二十三話

219

第二十四話
第二十五話

242 231

プロローグ

春は出会いの季節。

これは言わずと知れた慣用表現で、学生とかの若者に限って言えばまあ確かにそうだろうとは思う。

でもさ、普通この出会いって言うのはさ……

「お、おい……優ゆう。お前、それどうしたんだ？」

目の前に座っている昨日できたばかりの友人が声をかけてくる。

他の生徒を見るとまるで犯罪者を見る目で、いや、正確には性犯罪者を見る目で見られていた。

ここはとある学校の教室で、神聖な学びの場。

そして、俺は昨日入学してきたピツカピカの新入生だ。

今日は高校生活二日目。

希望と期待に満ち溢れた学園生活が始まり――

そして今終わったところだ。

「……とりあえず、佐倉。後で職員室に來い」

担任の教師……初日の時点で「グラサン」というあだ名をつけられた名も知らぬティーチャーがグラサン越しでも分かる威圧の視線を俺に向けている。

教師がホームルームの時間にグラサンを付けてるとかなかなか非常に常識だとは思いますが何かしら事情があるのだろうか。

まあ、それはともかく。

「先生違うんです。これは急に空から降ってきたんです」

「ほう………で？」

「つまり、僕は悪くありません」

俺は最後のあがきと思つて必死に弁解をする。

俺の机には一つの異物が置かれていた。

色はピンク。

ほのかに香る洗剤の匂い。

ふんわりと柔らかそうな生地。

一言で言ったらパンツだった。
パンツ。

しかも女性もの。

それが男の俺の机に置かれている。

誤解をするなどというのが無理というものだ。

周囲を改めて見渡してみると、女子生徒からの懷疑と軽蔑の視線が酷い。

余りにもひどすぎて何かに目覚めてしまいそうだ。

一方で男子からは違った視線を向けられていた。

多分、これは尊敬の視線だ。

目の前にいる友人も思わず「おお……」とか声に出してしまっている。
人前で、しかも学校のホームルームの時間に、臆せず女子のパンツを観察する男。

彼らの中の俺の認識はそうに違いない。

ならば何も問題はない。

もともと俺はどこかさえないタイプで女子からのアプローチとかは全然なかった方だからな。

男子とさえ付き合っていければ全然やっていける。

だが、俺の内心はともかく、不本意なのは確かなのだ。

このパンツは本当に唐突に降ってきた。

グラサンのおっさんが渋い声でこれからの授業予定とか説明してるとき、ボーっとかわいい子いねえかなとか思ってから後ろの席から見たらなんか降ってきたのだ。

マジで意味が分からない。

幸い両隣の席は今日はいなかった。

遅刻だか欠席だか知らないが助かった。

そう思っただけ驚きを隠しながら何事もなかったかのようにパンツを手握った時点でグラサンにばれた。

「それは何だ」、と彼は言った。

その時点でクラスにいる全員の注意がこちらに向いた。
公開裁判の開始である。

俺は、「これは誤解です、先生」と声高に答えた。
あたかも俺はやっていない、何の罪もない、そう主張するように。
ていうか、実際にやっていないし。
次に裁判長はこういった。

「ならば説明しろ」と。

もはや有罪判決は出ているが、最期の言い訳ぐらいは聞いてやるというかのよう。

俺は考えた。

確かに、俺がやっていないという証拠はない。

だが、俺がやったという証拠はある。

この絶望的状况を覆すには。

考えて、考えて、考えた結果。

「これは妹のパンツです。間違って入ってたみたいで、わざとじゃありません」

瞬時に閃いてそのまま口に出た解答。

我ながら渾身のひらめきだと思った。

だが、この答えはある意味で二重に自分の首を絞めた。

「……確か、お前は今年の春からアパートで独り暮らしを始めたと調査票で見た覚えがあるんだが」

俺には実際に妹が居る。

けど、先生が言った通り俺は今年から一人暮らし。

そして妹のパンツを持っていると俺が主張した。

さて、これらのことを結びつけると……？

——シスコンの兄が妹のパンツを一人暮らしであることをいいたとにクンカクンカ。

裁判は終了した。

否、これは裁判ではなく、一方的な尋問だった。

基本的人権？ 推定無罪の原則？

そんなものは無視した公開処刑だ。

このパンツは今、俺が、空から降ってきて、手に入れた。
現行犯に言い訳ができるわけがなかったのだ。

基本的に下界で起こる非現実的な出来事……俗にいう「奇跡」のことですが、これはたいていが天使の仕業です。

もちろん、あまり好き勝手に振舞えるわけではありません。

天使は、自ら助くるものを助くのです。

日々を真面目に生き、他人を愛し、善行を積んでいる人だけが救われる。

本当にそんなことができる人は限られていて、しかもその全員を助けられるとは限らない。

神ではなく、あくまで天使なのですからそれも当たり前。

身の程はわきまえないといけません。

そして、今回の件も恐らく天使が関わっています。

入学して早々自分の人生をぶち壊しにするようなことをする酔狂な人などそういませんし。

パンツを男子の机に置いて、冤罪を着せる。

中々に悪魔的な所業ですが、大方誰か遅刻しそうな天使が神足通でも使って失敗して下着だけ転送されてしまったのでしよう。

実際、天使が失敗をして結果的に悪魔よりも悪魔のような所業をしてしまうというのはよく聞く話です。

というか、下手をすると意図してそのようなことをやっている天使もいますからね。

まったく、頭が痛くなる話です。

それにしても、今回はいったい誰の仕業やら。

といっても見当はついていませんが。

前の席の方から後ろを振り返ると席が二つ空いているのが分かります。

その席というのも、現在進行形でパンツをホームルームに持ってきた変質者として糾弾されている彼の両隣。

窓側の一番後ろの席と、その右の右の席。

窓側の方の座席主は私もよく知っている人物です。

天真ⅡガヴリールⅡホワイト。

天使学校を首席で卒業した今期最大の有望な天使見習いで、私の友

人。

私は次席でしたが、彼女になら首席の座を譲っても心残りはありません。

本当に努力家で、本当に真面目で、本当に思いやりのある子ですからね。

そんな彼女が昨日と今日の二日間をお休みしている。

ただ事ではありません。

しかも先生に聞いたところ、無断欠席。

あの真面目なガヴちゃんが、です。

流星に心配になりました。

だから今日放課後にお見舞いに行くことを決めたのですが……。

あのパンツ。

よく見たら見覚えがある物です。

天界の宿泊学習などで彼女と一緒にお風呂に入ることがありましたが、彼女はあのタイプの下着を良くはいていました。

それに加えて、本当は被害者である彼の発言。

これはあとで謝罪をしたほうがよさそうですね。

私は友人が無事そうなことに安堵を覚え、それから突然女の子のパンツが机に降ってきて内心慌てふためいている佐倉君というクラスメイトの今後の学校生活を心配して真っ青になっているお顔を見て、思わず微笑んでしまいました。

第一話

放課後、帰りのホームルームが終わってから職員室に連れていかれ、グラサンに問い詰められて約三十分。

ようやく俺は解放された。

「次からは気をつけるんだぞ」

次はねえぞ、と脅されてる感覚に陥るのはこの人の見た目ゆえだろうか。

街中で見かけたら絶対にかかわりたくない見た目だし。

結局、正体不明のパンツは俺の妹のものということになった。

そう、俺の妹の。

それゆえに、あのパンツは依然として俺のカバンの中に入っている。

ホームルームをしている間も、終わった後も、俺には様々な目が向けられていた。

軽蔑の視線はそのままに、畏怖するような目線が増えた気がする。

それもそのはず、俺は机に乗っかっていたパンツをそのまま握りしめてカバンの中に突っ込んだのだから。

このパンツは俺のものだと公に宣言したようなものだ。

女子はドン引き、男子は恐れた。

ああ、運命の女神とやらもなかなか楽しませてくれる。

もしも死んでからあの世とかで出会ったらどうにかパンツを盗んで空から落としてくれるわ。

さて、愚痴はほどほどにしておいて。

俺は職員室を出た後、他によるところもないのでカバンを取りに教室に戻った。

こんなことがあった日はさっさと家に帰ってゲームをするに限る。

パンツは持ち主には悪いけどそこら辺のゴミ箱に捨てよう。

落とした(?) 人が悪いのだ。

「……………」

教室のドアの目の前に来たが、なんか開けづらい。まさか、恐れているのか？

この俺が？

いや、そんなわけはない。

周りから変質者の目で見られようと俺は動じない。

じゃあ、何だろう。

この、悪寒にも似た感覚は。

教室の中から…………いや、違う！

バツ！

すぐさま後ろを振り向いた。

「あ…………どうも、こんにちは」

…………お、おおう。

「こ、こんにちは」

いきなり銀髪の可愛い女の子から挨拶された。

同じクラスメイトの子だ。

流石にこんな派手な見た目の子を忘れるわけもない。

名前は確か…………白羽Ⅱラファイエル…………やっぱ忘れた。

多分ハーフかなんかの人だろう。

先ほどの悪寒はこの子からだろうか。

いや、後ろから見つめられていたわけだしそりゃゾクゾクもするか。

てか、胸デカいなこの子。

何カッブだろう。

「な、なんか用ですか？」

「いえ、用、というほどのことでもないのですけれど」

…………十中八九、パンツのことだろうな。

あんなことがあった後に俺に話しかける女子とか、ただのビッチか痴女くらいだろう。

あ、もしかしてこの子、淫乱？

「実は、先ほどの下着の件なんですけど……」

ほら来た。

「俺は何も悪くない」

「ええ、それは知っています。妹さんのものなんですよね？」

「え、あ、ああ。そうそう」

え、この子マジで言ってるの？

もしかして俺の言い訳信じちゃった感じ？

あれ、でも空から降ってきたとか言っちゃわなかったっけ？

いや、それこそ話をそらすための冗談か何かかと思われたのか。

ならば好都合。

「実はさ、何の間違いか妹のパンツが、いや下着が引越し用の段ボールに入ってたんだよ。それで勉強道具とかと一緒に段ボールに入れてさ。そのままカバンに入れて持ってきちゃって」

「へえ……それは大変ですね。でも、なんで机の上に出したんですか。しかもホームルーム中に」

「カバンの中に見慣れないものがあつたからつい気になって机の上で広げちゃったんだよ」

「うふふ……そうですか」

何をそんなにニヤニヤしてるんだこの女。

ハッ!! まさか!!

「もしかして、あんたのパンツか？」

「は？」

「ごめん、やっぱなんでもない」

俺のバカ野郎。

とっさに思いついて言っちゃった。

このすぐ思つたことを口に出す癖何とかしたほうがいいかもしれない。

それにしても、予想が外れた。

俺が言った瞬間に何言ってるんだこいつって顔をされたから違うつぽい。

うーん。

じゃあ結局誰のなんだあれは……。

「それで、下着はどうするおつもりなんですか？」

「そりゃあ当然……」

当然ごみ箱に捨てるつもりだけどどうしようか。

戯れに他のクラスの男子の机とかに忍ばせてみようかしら。

不幸の手紙ならぬ不幸のパンツ。

誰のものかもしらぬそのパンツは手に取った者に社会的な死をもたらす。

結構笑えない都市伝説だ。

「てか、何でそんなこと聞くんだ？」

そもそもなぜ俺は白羽さんにパンツのことを聞かれなければならないのか。

俺だって持て余してんだよあのパンツ。

よかつたらもらってくれないかな。

「いえ……実は」

そうして彼女は笑顔で告げた。

「あれ、私の友人の下着なので、返してくれませんか？」

「……え」

……アイエエエ。

鎌かけてやつですか。

マジでか。

じゃああながち俺の予想外れてないじゃん。

この子のパンツって言っても過言じゃないじゃん。

それ即ち真の意味でパンツ泥棒未遂じゃん。

い、いやそれ以上に驚くべきことがあるだろう。

「……あのパンツ、空から降ってきたんだけど」

「はい！　だって私のお友達、天使ですから」

わお。

いきなり電波発言。

でも信じちやう。

だって本当に空から降ってきたんだもん。

何も無いところからパツと現れてフワツと落ちてきたんだもん。

「それにしても……」

「……う？」

「学年首席の佐倉君が下着泥棒だって全校に広まったら……どうなっちゃうんでしよう♡」

うっわ。

めっちゃいい笑顔で脅迫してきたよ。

何で？

俺男子だよ？

父親サラリーマンで母親が専業主婦の家庭の長男だよ？

お金ないっすよ？

(こいつ、可愛い顔しやがって……なんて恐ろしいことを)

しかも何で俺が首席だって……って当たり前か。

だって入学式の時前に出て演説したし。

おかげさまで知名度抜群！

きつと噂が広がり始めたら明日には俺は性犯罪者のレッテルを貼られていることだろう。

てかすでに手遅れな気がする。

それでも、意図して広めさせられるのと、自然に広がるのでは被害の度合いが大きく異なるはずだ。

つまり、彼女の脅しは非常に効果てきめんなのだ。

くそ、一体何を要求する気なんだ……。

「……何が望みだ？」

「……？ いえ、ですから、下着、返してくれませんか？」

首を傾けておねだりするように彼女は言う。

超かわいい。

じゃなくて。

「え、それだけでいいの？」

「それ以外に何かして欲しいんですか？」

いえ、結構です。

あと、その言い方だと「俺が」何かするんじゃないかと、「君が」何かをすることになるけど。

わざとですか？

「……分かった。教室とかだと人目に付くからカバンごと女子トイレとかに持ってって」

「まあ、もうすでに人目には散々付いちゃいましたけどね」

ホントだよ。

あと、さっきの脅迫っぽい発言はなんだったんだ。

はつきりと要求されない分余計怖い。

人の怖がらせ方を分かってやがる。

俺と白羽さんは教室に入り、俺はカバンを彼女に渡した。

「はい、確かに受け取りました」

「え？」

カバンを渡してすぐに彼女が言った。

え、抜き取ったの目に見えなかったけど。

本当に取引は終わったの？

「お手を煩わせてしまい、申し訳ございません。友人に変わって謝罪させていただきますね」

ペコリと頭を下げられる。

……ごめん。本当にわけわかんないし、怖い。

「では、これで私は失礼しますね！ また明日学校で会いましょう」

「あ、ちよ」

彼女は教室からすぐに出ていき、俺は一人教室に取り残された。

そして周りからかすかに聞こえる、ひそひそとした女子の声。

「……ああ」

死にたい。

帰り道、俺は夕食の献立を考えながら住宅街を歩いていた。ところが、あと少してアパートに着くというところで足が止まった。

「……皆勤賞が……うう……」

俺と同じ学校……舞天高校の制服に身を包んだ女子高生が道端にうずくまっていたのである。

最初見たときは野ションでもしてんのかと思ったがどうもそうではないようだ。

後ろからだから髪の様子しか見えないな。

髪の毛は黒とも何ともつかない……しいて言えば、紫？

この子も然り、ここ最近やたらDQNじみた髪色の女子高生を見るけど、校則に反したりしないだろうか。

それにしても、哀愁漂うその姿は見るに忍びない。

体調が悪いというわけではなさそうだが……。

声をかけるが迷ったが、万が一もあるしな。

俺は下心が10割の声音で彼女に声をかけてみた。

「あの。どうかしたんですか」

一瞬ビクつとなって少女が顔をこちらに向ける。

うげっ！

何この美少女！

さっきの白羽さん並みの美少女だ。

てか、この子も俺と同じクラスだったな。

今日は見かけなかったけど、昨日は居たはずだ。

自己紹介の時に白羽さんみたいなさごい名前をした覚えがある。

そういえばあと二人、なんかすげえ名前の奴がいたような気もするが……。

まあ、それはいいか。

「月乃瀬さんだっけ？ どしたのこんなところまで？」

「あ、ごめんなさい。何でもないので！ ただ、ちよつと闇堕ちしそうになつてただけで……」

そういつて彼女は暗い顔で俯く。

何か俺のクラス色々ヤバイやつ多くない？

入学式を休むやつとか、友達に天使がいるとか言ってる電波少女とか、入学二日目でダークサイドに墮ちるやつとか。

あ、でもそう考えるとホームルーム中にパンツを机に広げてた俺が一番ヤバイやつか。

やばい、俺も闇墮ちしそうだ。

「何があつたのかは知らないけどさ。俺も今日すごいヤなことがあつたんだよ。でも、思うんだ。人間万事塞翁が馬つてさ。悪い経験も案外いつか役に立つ日もくるもんだよ」

むしろそうであつてほしい。

きつと今日の一番の不幸者は俺に違いないのだから。

俺のほとんど自分に向けた激励を聞いて少しは効果があつたのか、月乃瀬さんは天使のような笑顔を俺に見せた。

「そうよね……今日の不幸がいつかの不幸とは限らないわよね。ありがとう……えつと。佐倉君、だよね？」

「あ、俺の名前覚えてくれたんだ」

「そりゃあ入学試験で首席を取った人で、同じクラスだもの。昨日入学式に来てた人ならだれでも覚えるわよ」

こんなかわいい子に名前を覚えてもらえるんだから優等生つて得だよな。

それも今日のオカルトパンツ事件で台無しだけど。

「とにかく、もう大分暗くなつてきたし早く帰ろう。月乃瀬さんは帰り道どつち？」

「えつと、ちよつと寄りたいところがあるんだけど……」

そういつて彼女は俺がさつきまで進行していた方向を向いた。ちよつどいい。

彼女は今日いなかったから俺に対する先入観もないだろうし。

仲良くなるチャンスだ。

「俺もそつちのほうだから途中までついて行つてもいいか？」

「そうなの？ 偶然ね。もちろん、いいわよ」

それにしても可愛いなあ。

多分、本当に天使が居たとしたらこんな容姿をしているのだろう。性格もまともそうだし。

あ、待てよ。

「あのさ、白羽さんって人知ってる?」

「え? あ……えっと。クラスメイトの? 名前は知ってるけど……どうして?」

「いや、ちよつとね……」

ちつ。

この反応だと白羽さんが言ってた友達ってのはこの子のことではないみたいだ。

この子のパンツだったら今日の出来事も全部水に流せるのに。

むしろプラスマイナスで言ったら完全にプラスだ。

大抵の不幸にも耐えられるレベルでプラスだ。

ちくしよう。

そのまま俺と月乃瀬さんは会話を交わしながら帰途についた。

第二話

(とある悪魔視点)

私はここ数日で、この世には自分の力ではどうにもならないこともある、ということを知ってしまった。

きつかけは悪魔見習いとして下界に降りてきた初日の出来事。

新しく住むことになるアパートを探していたのだが、完全に道に迷ってしまった。

そんな時、透き通るような優しい声で声をかけてきたのが彼女だった。

サラサラとしたロングの金髪は絹織物のように陽光を反射して。

整った顔はお人形さんのような、と表現するのがふさわしいほど美しく可愛らしい。

正直、同じ女の子だというのに見惚れてしまった。

容姿がいいからというだけではない。

その内面からあふれ出る善性に、私は一目ぼれをしてしまった。

……まあ、悪魔としてそれはどうなんだという思いも浮かんでこなかったわけではなかったけど。

そんな葛藤はともかく、彼女は予想通り、というか予想以上に人が出来ていた。

親切にも道案内をしてくれて、私は自分のアパートにたどり着くことができた。

その際、少しの緊張を覚えながらも彼女と話をした。

どうやら彼女も今年から私と同じ高校に通うらしく、それを聞いて私は歓喜した。

同じクラスになったら、きつと一緒に楽しい学校生活が送れるに違いない。

そうでなくても知り合いの少ない今の状態で少しでも頼れる知己が増えるのは喜ばしいことだった。

だが、わたしの期待は、すぐに打ち砕かれた。
数日後彼女と再会したとき、彼女は死んでいた。

比喩でも何でもなく、死んでいた。

私が一目惚れをした天真ⅡガヴリールⅡホワイトは見る影もなく、そこにいたのはただのクズだった。

『はあ？ 新入生の課題？ 何それ、食えんの？ 私昨日から何も食べてないからお腹減ってるんだよねえ……あ、そうだ、ヴィーネ、私のためになんか作ってよ。いやあー、楽しみだなあ、ヴィーネの手料理』

連絡がこないのを心配して部屋に訪れた私に対して、腐りきった目で彼女はそう言った。

そして、私は絶望したのだ。

私にはコイツをどうにかすることはできそうもない、と。

汚れに汚れた異臭に満ちた部屋で、私の中の何かが崩れ去る音がした。

目を改めて、ガヴの部屋に訪れた。

彼女は前日の入学式をまさかのボイコット。

ほんとにこの天使はもうダメみたい…。

ちなみに、彼女が天使だということは成り行きで知った。

結局今日も彼女は改心することはなく、暖簾に腕押し状態だった。

天界に強制送還されないように、とだけ言い残して私は呆れ、彼女の部屋を後にした。

そしてまた道に迷った。

今日は確か新入生テストと新入生歓迎会があったはずだ。

遅刻するわけにはいかない。

涙目になりながらも必死で駆け回ってたら通りすがりの女性に声を掛けられた。

「私の息子を見ませんでしたか？」

私はさらに走った。

ペットのチャッピーと散歩をする時以上のスピードで。女性の心当たりがある場所を駆け巡った。

子供は無事に見つかった。

しかし、始業時間はすでに過ぎていた。

「ああ……どうしよう」

ミイラ取りがミイラになるとはまさにこのこと。

ガヴに構っていたせいで……いや、彼女は何も悪くない。

彼女の様子を見るに、彼女の墮落は起こるべくして起こったようなものだ。

私が中途半端にどうにかしようとしたのが悪い。

「うう……皆勤賞が……ぐす」

結局、夕方になるまでに学校にたどり着くことはできなかった。

何か尋常ならざる者の妨害をうけているのかと疑うレベルでたどり着けなかった。

友達が駄天した。

皆勤賞を逃した。

新生テストを受けられなかった。

新歓に参加できなかった。

先生にもきつと怒られる。

私のライフはもうゼロだった。

その余りのシヨックに道端でうずくまっていたところだった。

「あの。どうかしたんですか」

振り向くと、私と同じ高校の制服を着ている男子が声をかけてきた。

見覚えはある。

今年の入学試験でトップの成績を取った同じクラスの佐倉優君……だったはず。

一応、悪魔学校を卒業する前に私もこの高校の試験を受けた。

そして、それはあのガヴも同じはず。

試験を受けた時点ではまだ駄天していなかったガヴを抑えての一位、ということだ。

「それでね、ガヴったらこう言ったの。『いままでの私は偽りの姿だった。これからは自分に正直にグータラなダメ人間として生きていく！』って」

俺と月乃瀬さん……彼女にはヴィーネでいいって言われたからヴィーネさんでいいか。

改めて考えるとすごい名前だ。

俺とヴィーネさんは並びながら夕焼けに染まる道を歩いていた。

はたから見れば俺たち恋人同士に見えんじゃね？とかちよつと浮かれたけど、彼女の話を書くにつれてそんな考えは消し飛んだ。

というのも、彼女。

同情するくらいに苦労人のようだ。

話を聞くと良く分かる。

この子あれだ。

悪い男に引つかかったら一生を棒に振っちゃうタイプだ。

どんなに旦那がダメ人間でも、この人にはこれでもいいところがあるの、とか言ってそのまま泥沼に引きずり込まれるタイプの女性だ。

こういう子漫画とかでよく見るもの。

しかも極度のお人よし。

迷子の子供を探しに一時間以上走り回るって。

どんだけだよ。

もしかして交番とか知らないのか？

それと、いくらなんでもこの時間になるまで学校にたどり着けな
いって有り得ないよ？

実はなんかの怪異に巻き込まれてたりしない？

お兄さん、相談に乗るよ？

「それで、その……天真さん？ は結局学校に来なかったみたいだけ
ど」

「……はあ。やっぱり」

彼女の苦労話は、彼女に最近できた一人の友人に起因していた。

曰く、その友人はかつては心優しい女神のような人物だった。

曰く、その友人は女である自分が見惚れるほどの容姿の持ち主だった。

……曰く、その女神は地に落ちた。

ここまで聞くとなんかの神話かおとぎ話かと思われるだろうが、何のことはない。

昔は優等生だったが今は違うっていうのはよく聞く話だ。

その原因は様々だが、大方今までの堅苦しい生活に疲れたからだとか、そんなところだろう。

そして、その友人とやらが俺の同級生で昨日入学式をブツチしたやつらしい。

彼女の話から体調がどうのこうなので休んだわけではないのは明白だ。

昨日に続き、今日も欠席。

しかも無断で。

ヴィーネさんの必死の説得も真に受けず。

ヴィーネさんは本当に厄介なお荷物を持ってしまったようだ。

この後寄るところもその友人の家らしい。

「大変だな。お互い」

俺も見えた目は可愛らしいが厄介なものを手にしてしまったからな。

異性のパンツとか、比較的ノーマルな俺の手には余るもの。

幸い白羽さんが引き取ってくれたからよかったが。

「ふふ……でも、佐倉君が話を聞いてくれたおかげでちよつとは気が楽になったわ。ありがとね」

「いや、それほどでも」

「ところで、佐倉君は何があったの?」

さて、これは予想していた質問だ。

彼女が俺の質問に答えてくれた手前、答えないわけにはいかない。かといって、せっかく芽生えかけた関係をパンツでぶち壊してしまいうわけにもいかない。

さあ、どうするか。

「……………」

いやでもマジでどうしよう。

俺勉強はできるけど、それ以外からつきしだからさ。

こういう時の頭の回転遅いんだよね。

「あ、ごめん……思い出したくないわよね。今のは忘れて」
中々答えない俺の様子に何か察したかのように彼女は手をぶんぶん振ってそう言ってくれた。

うわあ。

何だろうこの罪悪感。

でもうまい具合に逃れさせてもらった。

ごめん、ヴィーネさん。

あとでお詫びに新品のパンツを贈らせていただきます。
それでどうか勘弁してください。

それからしばらく無言で歩き続ける。

夕焼けに染まった空が本当に美しい。

心は煩惱にまみれている俺だが、自然の情景を愛でるくらいの情趣を解する心はある。

でも、もつと言えばその夕日でほんのりと赤く染まるヴィーネさんを愛でたい気持ちの方が今は強かった。

何かの間違いでパンツ見せたりしてくれないかなこの子。
代わりに俺もパンツ見せるから。

「そういえばさ……」

「……ん？」

ふと思いついたようにヴィーネさんが声を上げた。

「佐倉君の家ってどこにあるの？」

「ああ……もう少しで着くよ。ほら、あそこのアパート」
別に知られて困るものでもない。

というか、ヴィーネさんにだったらむしろ知られてほしい。
というわけで俺はすでに目前にある一軒のアパートを指さした。

「外装は地味だけど中々過ごしやすい部屋なんだよ」

「……え」

「どうしたの、ヴィーネさん?」

俺の指し示した方を見てヴィーネさんが呆然とした表情を見せる。
え、何?

もしかして同じアパートってやつ?

だったら狂喜乱舞するよ俺。

夜通し運命の女神さまに感謝の証としてパンツを捧げちゃうよ俺。

「いえ、その……例のグータラ人間になった友人のアパートもあそこ
なのよ」

「……………」

あぶない。

舌打ちしそうになってしまった。

そっちかー。

グータラ人間の方かー。

同居人は天使のヴィーネたんじゃないのか。

いやでも、その友人の方も見た目は悪くないらしいし。

改心させることができればワンチャンあるか?」

「……ひとまず、その友人とやらの会いに行こうか」

「そうね……あらかじめ言っておくけれど……覚悟して」

……この天使にここまで言わせる人物っていったい。

俺はとりあえずヴィーネさんに頷いて、友人の部屋の玄関前まで案内してもらった。

第三話

「じゃあ、行くわよ。準備はいい？」

「お、おう」

ドアノブに右手をかけ、体をドアにくっつけてヴィーネさんが言う。

そんな警戒するんだったらインターホン押すだけでいいじゃん。

何をそんなに警戒してるのか分からないけどこのドアの先に危険な化け物でもいるの？

君の友人、実は人間じゃなかったとか？

それで俺はそんな奴と同じアパートで暮らしてると。

しかもお隣さんだったし。

引越しの段ボールまだ開けきつてなかったし、早いうちに引越す事も考えたほうがいいかもしれん。

あと、その空いた左手。

わざわざ持ってたカバンを俺に預けてまで空けさせた左手。

その左手の構えなに？

今にも「武装展開！」とか言つて武器が出現しそうなんだけど。

槍とか剣がいきなり出現したくらいじゃもう驚かないよ俺。

「いっせーの……」

ガチャ。

「あら……佐倉君に……ヴィネットさん、でしたか？ お二人もガウちゃんのお見舞いに？」

ヴィーネさんがドアを開けようとしたその時、扉が開かれた。

外開きのドアのためヴィーネさんは押される形になって体勢を崩している。

出てきたのは天使のような悪魔だった。

「え、えっと、白羽さん……？　どうしたのこんなところで？」
正直、油断していた。

普通に考えて彼女がここにいる理由は一つしかない。
ヴィーネさんの友達の友達が白羽さんだったとしても何もおかしくはない。

そして、それすなわち。

「あら……私は友人にお届け物をしに来ただけですよ」

ヴィーネさんの友人イコール白羽さんの友人だったのだ。

「おい……ラファイエル。人んちの玄関で何をガヤガヤと……」

そいつは、白羽さんの後ろからゆつくりとこちらに歩いてきた。
欠伸をして、髪をぼりぼりとかきながら、ポケットに手をつ突っ込んで。

彼女は俺の目の前に現れた。

「あれ……ヴィーネ、何してんの？　それに……あんた誰」
ボサボサの金髪。

濁りに濁った瞳。

そしてほのかに香る女子の匂い。

「つてちよつとガヴ！　なんて恰好してんの！」

「はあ……？　つてー！」

彼女は下半身が無防備だった。

彼女は上だけジャージを着て、下は何もはいてなかった。

いや、違う。パンツははいてた。

ジャージに隠れてちらりとしか見えなかったけどあれはパンツだ。

恐らく普段からそんな恰好でいるせいで玄関にもそのままの恰好で出てきてしまったのだろう。

まあ経緯はどうでもいい。

問題はそのパンツだ。

ピンクの可愛らしいパンツ。

今日俺の心を散々乱したパンツと同じ種類のものだった。

持ち主が分かるだけでこうも違うのか。

俺がそれをどうにかしてもう一度見ようとする前に、彼女は短い悲鳴を上げてすぐに部屋に引きこもってしまった。

やさぐれた見た目に反してなかなかシャイなところがあるらしい。

「もう……本当にだらしないんだから。ごめんなさいね、佐倉君」

「いや……」

むしろお礼を言わせてください。

思った以上に可愛かった。

本当に同じ人間とは思えないくらいには可愛かった。

まあ、確かに身だしなみとかは色々酷いよ？

女の子にあるまじき恰好だった。

それは認めよう。

でも、あのパンツである。

パンツは人の本性を映し出すと、どこかで耳に挟んだことがある。

つまり、そういうことだよ。

大事なのは外面じゃない。

中身だ。

どっかの誰かさんはそう言ったけど断言できる。

大事なのは外面。

それに加えてパンツだ。

その二つが良ければ大抵のことは許せる。

髪の毛がボサボサ？

顔が良くてパンツがサラサラなんだからいいだろ。

肌がガサガサ？

顔が良くてパンツがすべすべなんだからいいだろ。

なんか汗臭い？

むしろ喜べよ。

俺の中の変態性が自問自答を繰り返している間に、話が進んでいった。

「それで、たまたま落ちてきたのが佐倉君の机の上だったんですよ」

「それは……なんというか、災難ね」

気づけばヴィーネさんが憐れむような目でこちらを見ていた。

「何? どうしたの?」

「いえ……ホント、うちのガヴが迷惑かけたみたいでごめんなさい」
なんだか良く分からないが謝られた。

じゃあ俺はお礼を言えばいいのか?

そのガヴちゃんとやらに。

あわよくばパンツを下さいと。

……と、いかんいかん。

流石に鼻の下を伸ばし過ぎてしまった。

そろそろ自重しないといけない頃だ。

それに、なんだかんだ言って人間愛嬌も大事だ。

というか、本当にいざというときは内面を選ぶ。

当たり前のことだ。

その点ヴィーネさんは素晴らしい。

見た目も可愛く、心も優しい。

きつとパンツも良いものに違いない。

あれ、おかしい。結局パンツの話に戻った。何でだ。

バカなことを考えているとやがて、件の少女が再び姿を見せた。

今度はちゃんと下にスカートをはいていた。

ジャージにスカートつてすごい斬新だと思う。

「つたく、何で男子を連れてくるんだよ……あ、もしかしてヴィーネの
彼氏?」

ぐれた子供みたいな声で彼女は抗議する。

ついでに嬉しいことをサラつと。

え、お似合いですか、僕たち?

「違うにきまってるでしょ!! あんたと同じアパートの人よ」

「はあ……そうなの?」

心底どうでもよさそうに返事をして天真さんがこちらに顔をむけた。

あと、ヴィーネさん、そんな全力で否定しなくてもよくない?

「どうも。お隣に住んでる佐倉と申します」

「…………ふん」

自己紹介は人間関係を構築するときの基本。
だが、俺からの挨拶は華麗にスルーされた。

「それで、ヴィーネは何しに来たの？」

「あんたの様子を見に来たのよ。どうやらあのまま学校に行かなかつたみたいね」

「…う、いや。行こうとしたんだけどさあ」

「うふふ……パンツだけ出席しちゃったんですよね、ガヴちゃん」

「ぐっ…………!!」

あら、お顔が真っ赤。

そりゃあ自分の下着が公衆の面前で晒されたんだから恥ずかしいだろうな。

こんななりと性格でも羞恥心はある。

ギャップ萌えってやつですね。

「そ、そんなことどうでもいいだろ!! 大体、何でコイツがここにいるんだよ!」

そして再び矛先を向けられた。

パンツの話題から逃れるためだろう。

でも残念。

俺に話題を向けてしまったら逃げたことにならない。

なぜなら、

「あら、ガヴちゃんの下着を私に届けてくれたのは佐倉君ですよ」

ほらね。

言うと思ったよ。

白羽さんならご丁寧に説明してくれるよね。

俺が被害者だって。

「じゃ、俺はこれで」

会話の流れを完全に無視して俺は宣言した。

幸い俺の部屋はすぐ目の前にある。

預けられていたヴィーネさんのカバンを返し、俺は女々しい輪を抜け出して――

「……おい」

遅かった。

「お前か……私のパンツを見た挙句、触ったヤツは」

そのまま聞こえなかった振りをして俺は足を……あれ、なんか体が動かないんだけど。

もしかしてス○ンドですか？

時を止めているんですか？

一応首だけ動いたのでそのまま振り向くと。

「とりあえず、死んで悔い改めろ」

なんか禍々しいラツパをもってる天真さんが俺を睨みつけていた。

……俺氏、終了のお知らせ。

………

(サデイスト視点)

ああ、神よ……感謝します。

私は、「世界の終わりを告げるラツパ」を今にも吹こうとしているガヴちゃんを見て、そう思わずには居られませんでした。

放課後、佐倉君から無事にガヴちゃんの下着を返してもらった後、私は本人に届けにガヴちゃんのおうちまで足を運びました。

何だかんだ久しぶりに会ったガヴちゃんですが……相変わらず可愛らしいです！

ちよつとやさぐれてしまったようですが、もともとの素地が良いせいか全然これもありだと思えます。

腐っても鯛、というより、腐っても天使、ということですね。

かといって、下界であまり素行不良が過ぎると天界に連れ戻されてしまいます。

私はせめて学校には来た方がいいと説得しようと思いました。

昨日と今日の二日を休んでる時点でもう大分グレーゾーンっぽいですが、ガヴちゃん曰く今日は登校するつもりだったとのこと。

神通を使おうとしてパンツだけ高校デビューしたから見せる顔がない。

その話だけでも十分に面白いですが、現場はもつと面白いことになっていたことを彼女は知りません。

ガヴちゃんには感謝しなければなりませんね。

あのパンツのおかげで佐倉君という格好のおも……しろい友人ができたのですから。

まあ、それでも最初はあんな風に脅すような真似はするつもりはなかったのですが……実際に彼と話してみても色々気になる点があったんですよね。

そのことに関してはもう少し裏を取るつもりですし、大したことはないのですが。

さてさて、そんな彼ですが。

なんと、ガヴちゃんのお隣さんだったのです！

これはもう、どこからどう見ても運命のなせる業としか思えませんが。

たまたまガヴちゃんのパンツを受け取って、たまたまガヴちゃんのお隣さん。

そして、たまたまここでガヴちゃんと顔を合わせた。

まさに、「奇跡」。

とはいえ、本人にとっては「災厄」以外の何物ではないでしょうが……ぷぷ。

でも、流石に今の状況はかわいそうかもしれないですね。

今日の前ではまさに修羅場というべき光景が展開されています。

「離せヴィーネ!! 私は今すぐこいつを抹殺しなきゃならないんだ!!」

「待ちなさいガヴ!! それ吹いたら佐倉君だけじゃなくて全人類が滅んじゃうから!!」

「それも致し方なし!!」

小柄な体を全力で暴れさせてガヴちゃんがヴィーネさんを振りほどこうとしています。

その傍らで、何が起こっているのか分からない、という表情をしている佐倉君。

彼は流石首席なだけあって寛容な心の持ち主なのか、朝パンツが急に空中に出現したことも「まあそういうこともあるだろう」というスタンスで受け止めたみたいですし、今の状況も私たちにとって都合のいいように解釈してくれることでしょう。

最悪、もう一度おどし……お話すればいいですし。

それからしばらくして、ガヴちゃんは暴れ疲れたのかひとまずラッパをしまってくださいました。

「覚えてろよ……人間」

ドスの利いた声でそんなことを言うガヴちゃん……素敵です！

第四話

獣のような唸り声をあげている天真さんの威嚇をいまだに受けている。

一時はマジで死ぬかと思うくらいの恐怖が身を襲い震えが止まらなくなっていたが、天真さんがラツパをしまうとその震えも収まった。

何だったんだ今の。

なんかヴィーネさんがすごい物騒なこと言ってた気がするんだけど。

「全人類が滅びる」とか言ってたよね？

やっぱ俺の隣人超危ないやつじゃん。

パンツ見られたくらいで人類滅ぼすとかイカレテやがる。

見た目は可愛くても中身は全然可愛くねえ。

さっきの俺の内心のつぶやきは一部撤回させてもらおう。

女の子は中身が一番大事。

今日の教訓だ。

天真さんがブチ切れ、今もなお気が静まっていない彼女のせいで場の空気が酷い。

さて、ここで問題です。

この場には俺と天真さんのほかに二人の人物がいます。

その二人は今どんな顔をしているでしょう。

俺は目だけで二人を見る。

まず、白羽さん。

彼女は笑いながら顔をひくつかせている。

次にヴィーネさん。

本当に申し訳なさそうに俺の方を心配するような目で見ている。

結論。

ヴィーネさんは天使だった。

今までとんなら変化のない俺の中のヴィーネさん像。

もはや聖人の領域だな。

一方で白羽さんはなんなの？

何その器用な顔。

笑いながら笑うのを我慢するとか。

悪魔ですか？

……はあ。

まあ、ヴィーネさんのためにもこの空気は俺がどうにかしてやろうじゃないか。

ひとまず、怒っている相手と相対するときには大事なのはこちらが冷静でいることだ。

相手が何故怒っているのか？

どうしたら怒りを鎮めてくれるのか？

相手の要求するところを正確に把握するためにはまず冷静でいることが大事。

そんなことをどつかで聞いた気がする。

といっても一番大事なのは謝罪の気持ちだろう。

今回に限っては俺は何も悪くないし、余り心の底から謝ることはできないけど。

いや、待てよ？

むしろお礼を言ったほうがいいのか？

感謝の気持ちなら心に満ち溢れている。

パンツを見せてくれた上に、触らせてくれてありがとう。

これからもよろしくお願いします、丸。

ダメだな。

間違いなくさっきのラツパをもつかい取り出される。

あのラツパがどんな代物なのかは推測の域をでないが、ヴィーネさんの言葉を信じるならば「全人類を滅亡させるラツパ」なのだろう。

つまり、あのラツパを吹くと電波か何かを発信して、核施設のよう

な場所で受信。

結果、世界中で核汚染が引き起こされ、人類が滅亡する。

そんな感じの結末を迎えるのだろう。

なにそれコワイ。

やっぱ大人しく謝ろう。

「あの、天真さん」

「あゝあゝ？」

どっから出してんのその声？

「その、俺のせいで嫌な思いをさせてごめんなさい」

「え、ちよ、ちよつと。佐倉君は何も悪くないわよ？ ガヴがズルをし

ようとしたのがいけないんだから。それに佐倉君は今日散々ガヴの

せいで困らされたんでしょ？ 職員室に連れていかれたり……」

俺の綺麗なお辞儀を見てヴィーネさんが慌てて言う。

ああ、君がそう言うってくれるだけで僕は何でもできる気がするよ

……。

あと、ズルをしたから彼女のパンツは俺の机に降ってきたの？

どうということ？

いくら何でも俺もその論理の飛躍を説明することはできないよ？

風が吹いたら桶屋が儲かる前に隕石が降ってきた並みの意味不明

さだよ？

「……………」

「ちよつと、ガヴ！ こんなことで謝ってくれる佐倉君にそんな態度

をとっていいの？」

「…………ツチ。仕方ないなあ。ヴィーネに免じて許してやるよ」

「ガゝヴゝ？」

「うわ、分かった、分かったって。ゴメンってば！ ちゃんと謝るから

！」

ヴィーネさんに散々悟らされてやっと天真さんは物騒な物腰をす

るのをやめた。

「…………その、今回は私も悪かったよ」

「私も、じゃないでしょ」

ヴィーネさんが天真さんの謝りかたに納得しなかったのか声を荒げる。

でもこんな感じの謝り方も良いと思うんだよね。自分に非があるのは分かっている。

だけど恥ずかしくて素直に謝れない。

つい口について出てくるのはツンツンした言葉。それでもきつと心の中ではこう言っているのだ。

——私のせいで、ごめんなさい。

そんな心情を想像するだけで男という生き物は簡単にヒートアップしてしまうのだよ。

「いや、ヴィーネさん。ガヴさんもわざとやったわけじゃなさそうだし、あんまり責めないであげて」

「でも……はあ、分かったわ。ガヴ。佐倉君の優しさに感謝なさい」
「……ケツ」

……あつぶね。

よかった二人とも気付かなかった。

今さりげなくガヴさんって言っちゃったよ。

あんまりヴィーネさんと白羽さんがガヴガヴ言ってたから。

つい俺も慣れ慣れしく愛称で呼んじまった。

もし気付かれてたら再び彼女の怒りが再燃するところだったぜ。

てか、彼女の本名って何だっけ？

さつきヴィーネさんから話を聞いた時も本名が出なかったんだよね。

天真Ⅱガヴ……ガヴ？

ガヴガヴさん？

なんかどっかの原住民族みたいな名前だ。

でももつと長い名前だったよな……。

あとで確認しておくか。

「本当にごめんなさいね、佐倉君。今日のお詫びは必ず近いうちにさ

せてもらおうわ」

「いいってば。じゃあ、俺そろそろ夕飯の買い出し行かないといけな
いから。また明日」

問題も解決したことだし、俺はお暇することを決めた。

久しぶりに女子とたくさん話したせいかわれてしまった。

まさか一切れのパンツでここまで事態が二転三転するとは。

結局何故いきなり空中にパンツが現れたのか謎に包まれたままだ
が、終わりよければすべてよし。

最初は今後一切の女子との縁が全部消えてしまったかと思っただ
、三人も女子と知り合えたのだからいいだろう。

若干一名は知り合いになりたくなかったけど。

これも天真さんのパンツのおかげだな。

「そう……あの、佐倉君」

俺がその場を後にしようとするヴィーネさんが俺の目を真つす
ぐ見つめて言った。

「今日はありがとう。これからも……その、よろしくね」

「……!! ああ、こちらこそ」

どうやら運命の女神様も捨てたもんじゃないっぽいな。

俺はさすがにいい気持ちですぐ隣にある自分の部屋に入り、三人と
別れた。

その夜。

夕食を済ませた後。

さて何をしようかと考えをめぐらす。

「あ、そういえば」

パンツのことで職員室に連れていかれたとき。

グラサンに一つの頼み事をされたのを思い出した。

「やばいやばい……すっかり忘れてたぜ」

多分天真さんに殺されかけた時点で忘れてたと思う。

こういう普段の習慣に含まれていないことって意識してないって

いつい忘れちゃうんだよね。

『これをお前のアパートの同居人に渡しておいてくれ。部屋番号は中に入ってるメモ用紙に書いてある』

グラサンから渡されたのは一封の封筒。

教室に戻ってから誰宛の物が確認しようとしたのだがその前に白羽さんに呼び止められ、そのままパンツの話になってしまったから結局確認しないでカバンに突っ込んだきりだった。

思い出したが吉日。

また忘れないうちに部屋のベッドの脇に置かれたカバンの中をさぐる。

いつの間にかパンツが入っていた、ということは当然なく、目当てのものを取り出した。

「一、二、三……ちゃんと全部あるな。それから……っげ」

中に入ってたのは予想通り今日渡されたプリントの類。

そして、悪い予感によく当たるといいうが、まさにその通りだ。

アパートの同居人という関係だけでは天真さん宛とは限らない。

もしかしたら他のクラスで休んでたやつがいて偶々俺と同じアパートのやつだったって可能性もあるからな。

だが、封筒の中のメモ用紙に記されてあった部屋番号はちょうど俺のもの一つ違い。

あんなことがあった手前、少し気が引けるが仕方がない。

お隣さん同士仲良くやっていくためには避けられないことだろう。

幸いかろうじて話は通じるようだし。

なるべく早いほうがいい。

できればさつき玄関前でゴタゴタやってるときに済ませられたら一番よかつたんだが。

忘れてたものはしょうがない。

そうだな。

差し入れでも渡せば少しは懐柔できるだろ。

今度は台所にある冷蔵庫の中をさぐる。

「……ホントは俺が食うつもりだったんだが」

一個三百円程度のシュークリーム。

今日は一応テストもあつたし打ち上げがてら奮発して買ったんだが……。

背に腹は代えられん。

俺はシュークリームを手に取り、そのまま玄関から外に出た。

そしてそのまま右に曲がってお隣の部屋……アパートの二階の突き当りの部屋のインターホンを押した。

ピンポーン。

まずは一回押す。

返事はない。

ピンポーン。

もう一度押す。

またしても返事はない。

ピ。ピ。ピ。ピンポーン。

四回続けて押す。

部屋の中から凄い音が聞こえてきた。

本能的にこれ以上はヤバイと感じたのでその直感に従う。

ついでに後ろに三步ほど下がった。

その行動は正しかったようで、直後にすさまじい音を立ててドアがぶち開けられた。

ものにあたるのはよくありませんよ？

「……誰かと思ったらお前か。あまり舐めた真似してるとぶち殺すぞ」

地の底に響く声を出して彼女は殺害予告をしてくる。

いい声してますねお嬢さん。
プロレスとかやってみたらどうですか？

本音はいつ殴ってくるかとビクビクしながら俺は視線を下の方に
向ける。

あ、残念。今度はちゃんと履いてる。
もちろんスカートをね。

「何しに来たんだ？ わざわざサシで殺されに来てくれたのか？」
アカンアカン。

どんだん話が物騒な方向に行ってる。
ヴィーネさんという緩衝材がないせいで遠慮というものがフェイ
ドアウトしていつてる。

やっぱりヴィーネさんがいないとこの子は俺の手に負えないわ。
え、白羽さん？

あの人むしろガソリンぶちまけてきたじゃん。

俺に逃げる暇を与えないように直接ダイナマイトに火着けてきた
じゃん。

今俺が天真さんにこんな態度取られてるのほとんど白羽さんのせ
いだからね言っとくけど。

頼むから勘弁してほしい。
なんでわざわざ俺が天真さんのパンツを受け取ったって言っちゃ
うんだよ。

しかも満面の笑みで傍観してたし。
完全に確信犯じゃん。

……おっと、さっさと渡すものを渡さないと本当に殺されてしま
う。

「これ、今日配られたプリント。ついでに、お詫びの気持ちを含めた
シユークリーム。マイフェアリットだから乞うご期待」

「…………え」

意外そうな顔でプリントとシユークリームを受け取る天真さん。
そうそう。

そういう風に可愛らしい顔でいたほうが絶対いいよ。
しかし、そんな俺の希望とは反対にコンマ数秒でさつきまでの剣呑とした表情を再びする。

「モノで釣るとか……マジキモい」

そして、DMが喜びそうな毒を吐かれた。

でもね、俺は見逃さなかったよ。

俺の視力は2.0だ。

それに加えて中学のころは卓球をやってたから動体視力もそこそこある。

そんな俺の千里眼は彼女の一瞬を見逃さなかった。

本当に一瞬。

天真さんは俺と目を合わせてこう言いたげにしていた。

——こんな酷い態度を取ってるのに、優しいんだね……。

まあ、これは俺の妄想の中での天真さんの言葉だから本当は良く分からないけど。

でも多分無理やり彼女の表情からその気持ちを推測するんだったらこんな感じになるだろう。

というか、そうでも思い込まないとこの先やっていけないから。具体的に言うとな俺の心が持たないから。

「じゃ、また明日」

用が済んだら機嫌を損ねないうちにさつきと別れる。

なんでクラスメイトにこんな気を遣わなければならぬのか。俺は自分の部屋に戻ろうとする。

その時、ふと視界に彼女の部屋の中の様子が見えた。

「……………う」

「あ？ 何？」

「い、いや何でもない。お休みなさい」

「……？」

何だあの部屋。

控えめに言つて人の住む部屋じゃねえよアレ。

思わず呻き声を出しちやっただよ。

廊下に積み重なるゴミ袋の数は軽く十を超えていた。

俺の無駄に良い目も一瞬カサカサと動いた黒い生き物をとらえてしまった。

俺こんな部屋の隣に住んでるの？

マジでもう引越していいですか母上？

いつか彼女の部屋側の壁から変な汁が滲みでてくるかもしれない。

そのときはもうためらわないようにしよう。

怪訝にこちらを見ている天真さんを置いて、俺は自分の部屋に戻った。

そのときにかすかに聞こえた「お休み」という言葉は、気のせいではなかったと信じたい。

第五話

朝、誰かの声で目が覚めた。

「……………」

その声は、とても優しく、とても悲しそうだった。誰も自分に気付いてくれない。

私は何でこんなところにいるんだろう。

何も思い出せない。

そんな感情の波が脳に打ち寄せる。

雑多と言えば雑多な思い。

その思いは、何度も聞こえる一つの言葉に集約されていた。

——誰か、助けて。

高校を入学して三日目。

心の中にわだかまりを残しつつも、今日は始まる。

……その声が、夢か現かも知らぬまま。

… … …

いやあ、いい天気だ。

こんな日はぜひ家に引きこもってゲームをしていたいよね。

もしくはアダルトなムービーの鑑賞。

男子高校生たるもの大人になるための勉強をしなければいかんからね。

そういった冗談は置いといて。

俺はどっかの不良女子高生とは違ってどんなにだるくても学校を休むつもりはない。

しかし今日はいつにもまして頭が重い。

昨日テストで脳味噌を使いすぎたせいでまだ疲労が取れていないのだろう。

そのせいか夢見も悪かった。

ただ、夢見についての異常は今日に限った話ではない。

何か知らないけどこの部屋に引っ越してから変な夢を見るんだよねえ……。

ま、環境の変化になじめていない証拠だろう。

軟弱な体が恨めしい。

時刻を見ると朝の七時前。

学校の始業時間は八時過ぎだから全然余裕はある。

ひとまずは顔でも洗おうか。

そう思い、俺はベッドから起きて洗面所まで移動する。

それにしても昨日ちらつと見えた天真さんの部屋は酷かったな。

あんな部屋じゃ移動もままならないだろうに。

……掃除、手伝ってやろうかな。

プリント届けてシュークリームあげただけで隙を見せるような子だから、好感度という概念はちやんと通用するはずだ。

無償で彼女の部屋の掃除を手伝い、颯爽と去る。

なかなか悪くない行動だろう。

つつても、天真さん自身に掃除をする気がないのならどうしようもないけどね。

様子を見るに、結構長い期間あの腐海で生活してるみたいだし。

無理やり押し入ってまで掃除をするのもお節介だろう。

それに何より、俺自身あの部屋に入りたくない。

改めて考えるとおぞましすぎる。

というわけで、天真さんお掃除計画はお蔵入りだな。

「タオルタオル……あつた」

柔軟剤の匂いが香るふんわりとした手触りのタオル。

昨日何度か触った天真さんのパンツ並みの柔らかさだ。

「……そうだ、俺は天真さんのパンツを……この手で」
改めて意識するとなんか興奮してきた。

あの美少女のパンツを俺はほんの少しの時間だけだが自由にできる状態だったのだ。

桃色の、かすかに温かい、ふわふわパンツ。

けど、脳裏に昨日最後に見た天真さんのゴミ部屋が浮かんで興奮が冷めた。

……やっぱり人間内面が一番大事かもしれない。

俺はこれまでの自分の人間観を揺り動かされて複雑な気持ちになりながら顔を洗った。

いい時間になったので部屋を出る。

天真さんはもう登校したのだろうか。

もしくは、今日も登校しないつもりなのだろうか。

流石にそれはないだろうとは思うが、一応確認してみるか？

いやでも流石に凶々しいか。

昨日の今日の関係で朝起こすというのも変な話だ。

気になりながらも俺は天真さんの部屋のドアを一瞥だけして学校に出発した。

登校中、いつもの道を歩いていると誰かが喚く声が聞こえた。

朝っぱらから誘拐かと思いつつ、本当にその類の事件だったら洒落にならないので急いで声のする方に駆け付ける。

そして俺が見たのは、うちの学校の制服を来た少女が、一人でギャーギャーと喚いている光景だった。

「ちよつとお!! いきなり現れて何なのよあんだ!! このサタニキア様の昼食を奪い取ろうとするなんて身の程を知らなさい!!」

訂正。

人類が野良犬と喧嘩をしている光景だった。

どうなってるんの俺の学校。

何でこういうヤバそうなやつしかいないの？

ちゃんと入学試験やった？

裏口入学とか許してない？

犬とマジで喧嘩してるよあの子。

しかも「サタニキア」ってあの子の名前？

もしかしくなくても昨日会ったあの三人と同類の人間じゃん。

賭けてもいい。

あいつは絶対俺のクラスの子だ。

確かにクラスで見た覚えもあるし。

「このお!! だから離しなさいっての!!」

ああ……神よ。

あなたは私をこの場に引き合わせて一体何を望むのか？

もしかして神は生物の普遍的な平等を伝えようとしているのか？

争いは同レベルのものとの間でしか成立しないと。

この赤い髪の少女が犬と争う姿を見て、それを実感しなさいと。

割と心の底から実感したんで俺はもう学校にいきますね。

「ああ……私のメロンパン……ううう」

俺はそこに人類の敗北というのを見出した。

やっぱり争いはよくないね。

学校に着き、昇降口で靴を履き替える。

下駄箱を開ける際、パンツが入ってないか警戒して辺りを見渡してから開けたが杞憂だった。

それプラス、脅迫状とかが入ってなくて安心した。

昨日の一件でクラスの女子から警戒されていることは間違いないだろうし、誰か女子のリーダーとかがあらかじめ問題の起きないよう俺をベようとしてくる可能性も無きにしてもあらずだったからな。

よかったよかった。

……毎日こんな心配しないといけないんだろうか。

そのまま自分の教室に行く。
今の時刻は八時になる少し前。

教室の中は若々しい雰囲気で満ち溢れていた。

朝学校に来た時のこの雰囲気は結構好きだ。

青春って感じがする。

輝かしい未来を担うべき若者の、かけがえのない一瞬。

それを実感できる。

ただし、それも昨日までのことだった。

俺が教室に入った瞬間、静寂が静まる。

あ、間違えた。

喧騒が静まる。

余りにも一瞬の出来事だったから最初から静まっていたのかと錯覚しちまったぜ！

頭痛が痛いみたいなのを言ってしまった。

そして、突き刺さるのは女子の視線。

侮蔑？

軽蔑？

嫌悪？

甘い甘い。

これはそんな甘いものじゃないよ。

言うなれば、これは「差別」に違いない。

相手と同じ人間だと認識していない。

入学三日目でこんな目を向けられる俺の気持ち。

分かってくれるだろうか。

一方、男子からは相変わらず畏敬の念を込めた目で見られている。

全然嬉しくなんかないんだからね！

俺はため息を吐いて自分の席に向かう。

「あ……」

「……………」

あらヴィーネさんおはようございます。

でも俺に話しかけないでくださいね。

友達いなくなっちゃいますよ。

何か言いたげなヴィーネさんの隣を通って自分の席に着く。

そうは言ってもお隣さんだから少し気まずい。

顔の右側にすごい視線を感じる。

あと何だか知らないけど左からも。

「……………」

ちらりと見ると天真さんがポカンとした顔をしていた。

鳩が豆鉄砲を食らった顔と言ってもいい。

今日は学校休まなかつたようでも何よりだ。

そして大丈夫。

君は何も悪くない。

悪いのは君のパンツだ。

今もなお昨日パンツが俺の机に降ってきた因果関係が見えてない

ので誰に責任があるのか断定できないけどきつと君のせいじゃない。

だからそんな急に申し訳なさそうな顔しなくてもいいんだぜ。

「……………」

はあ。

これが毎日続くのか。

男子は声をかけてくれるかと思っただが…………。

ま、ボツチで生きることが死ぬことと同義じゃない。

どうにか工夫して生きていこう。

俺はこの時絶望という感情を初めて知った。

……………

(とある天使視点)

「はあ…………マジで眠い」

朝、教室に入った瞬間目に入った長い金髪。

思わずホツとしてしまったのは仕方ないだろう。

「おはようガヴ。今日はちゃんと学校にきたのね」

「ヴィーネとラファイが来い来いうるさいから来てやったんだぞ。あり

「がたく思え」

「あんたのために言っちゃったのよ。別にガヴが学校行かなくて私が困ることなんて何も無いんだからね」

「薄情だなあ……」

「今日もこの駄天使は絶好調ね。」

「まるで改心する気がないわ。」

「それでも、いい加減慣れてきた。」

「最初はかなりシヨックを受けたけど、余り深刻に受け止める必要もなさそうだし。」

「苦笑いしながら私は自分の席に座った。」

「佐倉君はまだ来てないみたいね」

「ガヴとは一つ席を挟んだ席だ。」

「その挟んでいる席が佐倉君の席だった。」

「……佐倉って誰だっけ？」

「もう……昨日私たちと一緒にいた男子！ 同じアパートでしかもお隣さんの人よ」

「ああ……そういえばそんなのもいた気がするな」

「……この駄天使はホントにもう。」

「佐倉君にすごい迷惑をかけたくせに、よくもこんなおんきな顔をしていたらね。」

「ガヴの下着が佐倉君の机に落ちてきたという話は昨日ラファイから聞いた。」

「なんでも、ホームルーム中に突然降ってきて、教室中の女子から疑惑の目を向けられるやら、職員室に連れていかれるやら、結構な騒ぎになったらしい。」

「本当に佐倉君には頭を下げるしかない。」

「ちなみに、ラファイとはその話を通じて親交を深めた。」

「今では愛称で呼び合う仲だ。」

「利用する形になって申し訳ないけど、佐倉君なら許してくれると信じてる。」

「ふああ……ねむう」

ガヴはさつきから同じことを何度も言っている。

こつちまで眠くなってくるからやめてくれないかしら。

ふと、教室の出入り口の方から音がした。

きつと誰かが教室に入ってきたのだろう。

それはいい。

けど、それと同時に今まで談笑の声で賑わっていた教室の空気が、シン、と静まり返った。

異様な空気を察して何事かとそちらを向く。

そこにはさつきまで話題にしていた佐倉君が立っていた。

「え……？」

いまだに何が起こっているのか理解できないまましていると、向けられたおびただしい視線をもともせず、佐倉君がこちらに歩いてきた。

「あ……」

私のすぐそばを通る際、一瞬目があつたがすぐにそらされ、そのまま私の隣の席に彼は座る。

余りに唐突な出来事でどうしたらいいのか分からない。

ガヴの方を見ると彼女も同じような表情をしていた。

「……………」

……これはもしかして。

彼がクラスメイトにこんな対応をされるなんて一つしか心当たりがない。

ガヴのパンツだ。

なんてことだろう。

そうだ。

人間は、公な場面での性的なモラルについて非常に敏感だと聞く。テレビとか新聞を見るとそれはすぐ分かる。

そして、それは良くも悪くもの話。

今回は完全に悪いパターンだ。

しかも、想像していた以上に。

もし、見知らぬクラスメイトが女子のパンツを持っていたらどう思うか？

彼に対する配慮が全然足りていなかった。

昨日の佐倉君の顔が浮かんだ。

落ち込んでいる私を慰めようとしてくれたときの顔。

私の、結局愚痴になってしまった苦労話を聞いてくれていた時の顔。

自分には非がないのに、ガヴに謝ってくれた時の顔。

どんな時も、彼はすごく温かい顔をしてくれていた。

そんな彼に対して、この仕打ちはない。

「あ、あのー」

そう思ったときにはすでに声を上げてしまっていた。

みんなの前で喋るのは緊張するけど、自分の身内が招いたことだし、それに何より、誤解とはいえ佐倉君が不当な評価を受けることに比べたら何でもない。

「佐倉君は、悪い人じゃありません。彼は昨日私の悩みを真剣に聞いて、とても真摯に向き合ってくれました。昨日の事は私も聞きました。が、すべて誤解です。彼は何も悪くありません！」

私一人の意見じゃどうにもならないかもしれない。

それは考えた。

けど、それは何もせず彼を見捨てる理由には全くならない。

私の精一杯の主張を聞いて、クラスメイトの顔が少し変わる。

緊張しているせいで具体的にどう変化したのかは分からないけど。

でも、神はどうやら私に味方をしてくれたみたいだ。

……いや、違う。

私は彼の人徳を甘く見ていたのだ。

「私もそう思うわ」

始めは一つの声だった。

私ではない、一人の女子生徒の声。

「佐倉君。入学試験の時のことを覚えてる？」

「ふえ？」

「数学の時間のときに消しゴムを落として手を上げたけど、試験官の先生が気づいてくれなくて私は一人真っ青になってた。始まって結構な時間が経ってたし、一秒でも時間が惜しいのに……そんなときに隣に座ってた佐倉君が消しゴムをくれたの。しかも、佐倉君も一個しか持ってなかったにもかかわらず」

それはすごい。

流石首席だ。

消しゴムなしで数学の試験を終えるなど、凡人の所業ではない。

話を聞いてた周りからも「すごい……」「天才だ……」という声が上がっていた。

そして、彼に関するエピソードはまだ続いた。

「私も……愛犬と散歩をしてたら愛犬とはぐれちゃって……たまたま出会った佐倉君が探すのを最後まで手伝ってくれたわ」

「私、登校してるときに、通りすがりの、歩くのも辛そうだったお婆あちゃんが持ってた荷物を彼がもってあげようとしていたところを見たわ」

約半数。

女子の約半数が最初の一人をきっかけに佐倉君がこれまで積んできた善行を一斉に語った。

さつきまでの静けさとは打って変わって、教室中に「私も！」「私も！」という声が響き渡る。

大騒ぎと言っても過言ではないくらいにそれぞれが佐倉君の無罪を主張した。

やがて、最初に声をあげた女子生徒が言った。

「佐倉君。昨日と、それに今回の件について、少しでもあなたを疑ったことを謝るわ。昨日のことは何かの間違い。みんな、それでいいわよね？」

誰もがそれに頷く。

もちろん私もその一人だ。

「それじゃあ、改めて……佐倉君、ごめんなさい」
教室中の誰もが彼に謝った。

席を立ち、まるで授業が始まる際の礼のときのごとく。

晴れて、「佐倉君パンツ冤罪事件」が解決した瞬間だった。

その日以来、彼の人徳がみんなに伝わったのか、尊敬の念を込めて、
一部のクラスメイトの間で彼はこう呼ばれるようになった。

——「GゴODド」、すなわち、神、と。

第六話

——どうしてこうなった。

教室中のクラスメイトが自分に向かって頭を下げているのを見て俺はそう思わずにはいられなかった。

毎回教師はこんなすごいことをされて平気でいられるのか。

マジリスペクトだわ。

男子に至っては何か敬礼してるし。

お前ら実は俺のことバカにしてない？

きつかけはただ一枚のパンツが降ってきただけの話。

だというのに、こんな大ごとになってしまった。

見れば、あの白羽さんも頭を下げている。

その表情は昨日と違って本当に反省している様子だった。

彼、彼女らは一向にお辞儀と敬礼を止める気配はない。

これは多分、俺が何か言うまでこの光景が変わることはないだろう。

もう少しで始業のチャイムも鳴るし、早く何とかしなくては。

「ああつと、みんな、頭を上げてほしい」

俺がそう言うのと全員顔を上げる。

うおお……すげえ。

俺の一言でクラス全員の体が動く。

これもしかして女子に。パンツくれてって言ったら脱いでくれるんじゃない？

まあ本当にそんなこと言ったら今度こそ命はないだろう。

そうだよ。

本当だったら俺の学校生活はここで終わってた。

けど、ヴィーネさんに助けられた。

俺は忘れない。

全員が俺に冷たい目線を浴びせる中、凜として俺の弁護をしてくれ

た彼女の姿を。

俺は忘れない。

彼女の、すべてを照らす温かき瞳を。

俺は、決して忘れない。

彼女の純粹で清らかなる優しさを。

だからこそ、俺は一番最初にこの気持ちを伝えなければならぬ。

「ヴィーネさん……ありがとう」

彼女の瞳を真つすぐ見つめて言う。

ああ、美しい。

昨日に増して、彼女の顔が眩しく見える。

率直に言つて結婚したい。

「いいえ……私は何もしてないわ。佐倉君の日ごろの行いの成果よ」

首を振りながらヴィーネさんはそんなことを言う。

違うんだ。

違うんだよヴィーネさん。

よくよく考えてみてほしい。

何で女子からしか俺の善行エピソードが語られなかったか。

そりゃあそうだよ。

だって俺女子だけにしかそう思われるような行動してないもの。

もちろん野郎のためになるようなことをしたこともあると思うけど。

どき。

異常だと思わない？

女子はほとんど全員声を上げたのに男子は誰も何も言わないんだ

よっ。

こういうの何て言うか知ってる？

勘違いって言うんだよ。

ここまで罪悪感覚えたのは久しぶりだな……。

とはいえ、そもそも俺は悪くないし丸く事が収まりそうなんだから

このまま便乗させてもらいますか。

「俺のせいで騒ぎを大きくさせちゃったみたいでゴメン。でも、俺はこれから三年間みんなと仲良くやっていきたい。昨日の件について

はもしかするとまだ納得してない人もいると思う。それでも、今後このクラスに貢献することで俺は自分の無実を完全に証明して見せる。だから、みんなも一緒に頑張ろう！」

「うおおおお！」

俺がガッツポーズをしながら締めくくると、教室に大歓声が巻き起こった。

このクラスの人たち、ノリ良すぎでしょ……。

一人だけ座ってる天真さんも途中から変な表情になってるし。

多分まだ事態を飲み込めていないのだろう。

よかった。

俺と同じだね天真さん。

俺も自分が何言ってるかさっぱりだもの。

このままだと俺このクラスに何らかの形で貢献しないといけなくなっちゃう。

どうしましょう。

こうして天真さんのパンツに始まる事件はめでたく幕を閉じましたとき、丸。

昼休み、チャイムが鳴った後、教室の空気は完全にいつも通りとなっていた。

ある者は和やかに友人と談笑しながら昼食をとり、またある者は黙々と一人で勉強をしている。

非常に平和な教室だ。

俺に対する視線は完全にやわらぎ、なんだか生暖かい目を向けられるようになった。

恐らく、昨日の一件については本当になかったことにしてもらえらるのだろう。

どれもこれもヴィーネさんのおかげ。

ありがたやありがたや。

さてと、居心地が良くなったところで俺も昼飯をいただくのでしょうか。

今日の昼ご飯は普通の自作の弁当に、デザートとしてブレインエンジェルというスイーツ専門店が作ったシュークリームを添えたもの。ブレインエンジェル……直訳すると「脳みそ天使」となり、とてもスイーツを売ってる店につけるような名前ではないと思うが、世間の評価は意外に高い。

名前の由来は目玉商品のシュークリームのしわが脳みそに似てたことらしいのだが、それにしても酷いネーミングだと思う。

ちなみに、ブレインという単語には動詞として「くの頭を打ち砕く」という意味があるらしい。

だから人によつては「天使の頭を打ち砕くほどおいしい」というのが由来だ、と主張する人もいた。

ぶっちゃけどうでもいいけどね。

天真さんにあげたシュークリームも同じ店で買ったものだ。

昨日食えなかつた分今日食おうと思っていたのだ。

まあ、まずは普通の弁当を片付けよう。

男子の誰かと食おうかと思つたが前の席の奴は授業が終わつてすぐ出てつたし、他の男子もそういうやつが多かつた。

おそらく学食を利用するつもりなのだろう。

弁当を作ってくる、あるいは作ってもらつているという人は少数とまではいかないにしろ、それほど多いとも言えないからな。

女子だつたら自分で作ってくるという人もいるだろうが、男子はそうでもない。

少なくとも俺の席の近くの男子は学食のようだ。

わざわざ席を移動してまで誰かと食うつもりはないのでとりあえず今日はポツチ飯だな。

そう思つて俺が弁当の蓋を開けてそのまま飯をかきこもうとしたとき、隣から声がかかった。

「ねえ、佐倉君。よかつたら私たちと一緒に食べない？」

当然声の主はヴィーネさんだ。

ヴィーネさんには今日だけで多分十回はお礼を言ったと思う。何せ彼女と目が合うたびに俺はお礼を言ったのだから。

最初は笑顔で返され、しだいに苦笑いに、最後は「ごめん、しつこい」と遠回しに言われて流石にやめた。

でもこれで俺の彼女に対する感謝の気持ちは伝わっただろう。

感謝されて嬉しくない人なんていないのだから。

早く贈り物用の新品のパンツを用意しなければならぬ。

「いいのか？」

「当然よ。私、佐倉君のこともつと知りたいし」
うほつ。

女子から言われた言葉ランキングの上位キタコレ。

ヴィーネさんに言われるとか今日は何て良い日なんだろう。

パンツ事件？

そんなものはなかったのさ。

実際、ヴィーネさんの御言葉に比べればどうでもいいことだったよ。

「天真さんは？」

「私たち」と言ってたからには他にも一緒に食べるメンツがいる。

順当に考えれば多分天真さんだろう。

「ガヴもいいわよね？ 佐倉君をあれだけ大変な目に合わせたんだから」

「……勝手にすれば」

そつぽを向きながらそう言う天真さん、マジでキューティクル！

席位置的に今のままだと三人が一直線にならんで一緒に食いつらいことこの上ないので、ヴィーネさんが天真さんの前の空いてる席に座った。

「佐倉君は自分でお弁当作ってきたの？」

「ああ……冷食を適当に詰め込んだ手抜き弁当だけだね」

「あ、分かる。冷凍食品ってお手軽な割に美味しいものが多いからありがたいのよね！」

「……それって高校生が昼休みにする会話？」

ヴィーネさんの言う通り冷凍食品という存在に助けられている高校生は多いだろう。

だから別に指摘されるほどおかしい会話ではない。

それにしてもこういう他愛のない話を女子とできるってホントに幸せだよな。

「そういえば白羽さんは？」

「私がどうかしましたか？」

「ヒエツ」

いつの間にか後ろに居やがった。

「……びっくりするからやめてくれない？」

「はて？ 何のことでしょう」

あまりそういうことすると、驚いた拍子にそのおつきなお胸をさわっちやうぞ。

それでいいならむしろどんどん驚かしてほしいけど。

一回でいいから触ってみたい。

ワンタッチ、パイタッチ、ハイタッチ。

イエイ。

「あ、ラファイ。ちょうどよかったわ。ラファイも一緒に食べない？」

「ええ、ぜひ。というわけで佐倉君、机、半分お借りしますね」

そもそも誘われなくてもご一緒する気だったのだろう。

すでに彼女は弁当箱を持っていた。

俺は自分の弁当箱をどかして彼女の使えるスペースを空けた。

「どうぞ」

「はい、ありがとうございます」

俺の前の席の椅子を引っ張ってきて白羽さんが話の輪に加わった。

俺の机の上で彼女は弁当箱を開ける。

彼女の弁当は結構質素な感じの中身だった。

少し意外だ。

白羽さんはなんかいいところのお嬢さんっぽい雰囲気があるからもう少し豪華な食事を持ってきているのかと思ったが。

彼女も苦学生ということなのだろう。

ちよつと言葉の使い方が違うかもしれないけど。

「それにしても、佐倉君ってすごいよね。入学してまだ三日も経ってないのにあんなにクラスメイトの信頼を得ているなんて。私、尊敬するわ」

「……それほどでも」

私はあなたのことを信頼どころか愛していますよ。

「でも、やけに女子からのエピソードが多かった気がしますね……偶然でしょうか？」

とぼけたような顔でそういうこと言わないでくれる？

君、やり方が色々汚いよ？

どうやら白羽さんは俺のこれまでの善行の真意に気付いているようだ。

すなわち、朝女子たちが語った俺の行動はすべてスケベ心からの偽善だということに。

といつてもちよつと考えればわかるはずなんだけどね。

そして幸い白羽さんの眩きは他の二人にスルーされたようだ。

「ホントに佐倉君には迷惑をかけたわ。ごめんなさい」

「私も少し配慮に欠けた振る舞いをしてしまいました。反省しています」

「……………」

朝のことも然り、そう何度も謝られると俺としても罪悪感を覚えざるを得ないんだよなあ。

だつてさ。

普通に考えて俺って結構下衆なことをしてると思うんだよ。

女子からの好意を得るために優等生っぽい振る舞いをする。

勉強に関しては確かに努力をして首席とれるほどにもなったけどさ。

その努力の理由も女子に少しでも好かれる要素を増やそうと思っただけなもの。

だからといってこの場でそんなことを言ったとしても意味がないし、むしろ結果的に俺にとっては都合のいい状況だ。

けど、どうしても心の中でモヤモヤとしたものを感じてしまう。

いまいち何でこんな気持ちになるのかは判然としないけど、あまりいい気持ちではないのは確かだ。

いずれにせよ無難に今まで通り振舞うしかない。

どこかでボロが出たりしないように。

今回も白羽さんには気付かれかけたし。

「……いや、いいんだよ。俺も気を遣わせたみたいでごめん」

確かな意図をもって行動したにもかかわらず、パンツが降ってきた程度のこと得意図しない結果になってしまう。

なかなかうまくいかないもんだね、人生ってやつは。

その後はヴィーネさんが主に話を振って談笑し、和やかな雰囲気のまま昼休みが終わった。

第七話

「また明日ね、佐倉君。今日は色々話せて楽しかったわ」

「私もすごく楽しかったです。沢山お勉強になるお話が聞けました」

「ああ、うん。俺も楽しかったよ。また明日」

放課後、校門の前でヴィーネさんと白羽さんに別れのあいさつをする。

今日一日で割と二人と仲良くなれた。

連絡先も交換したほどである。

高校で初めて手に入れた女子の連絡先だ。

間違つて変な画像を送ったりしないようにしよう。

一方で、天真さんとはそうでもない。

というのも彼女。

なぜか俺と二人が話をしている間中ずっと黙っていたのだ。

実は人見知りするタイプとか、そもそもそんなに喋らない子なのかとも思ったがヴィーネさんが「どうしたのガヴ？ 今日随分と静かね」と心配していたのでそうではないようだ。

身体の調子でも悪いのだろうか。

あんな不衛生極まりない部屋に住んでいたら病気の一つや二つにかかっても全く不思議ではない。

マジで掃除したほうがいいと思う。

何より俺の精神衛生のためにも掃除してほしい。

あるいは、自分のパンツのせいで朝の事件が起こったことについて何か思うところがあつたのか。

ぶっちゃけ気にするほどのことでもないし、だからこそそのことを気にしているのであれば「済んだことは気にするな」と言っただけだ。

ヴィーネさんにも別れる前にこう言われた。

「なんだかガヴの様子がおかしいから、申し訳ないけど佐倉君、ガヴが変なことをしないように見張つててくれないかしら」

変なことってどんなことだと思いつながらとりあえず俺は頷いてお

いた。

さて、そんな天真さんだが帰り道は一緒だ。同じアパートなんだからそれも当然。女子と二人きりの帰り道。

ああ、なんて魅惑的な響きなのだろう。

彼女の方を見ると目が合った。

「……………」

しばらくジーンと見られる。

「えっと、天真さん？ どうしたの？」

「…………いや」

俺が訝しがると彼女は体を反転させて帰り道への足を進めた。

うーむ。

もしかして俺が彼女のパンツを五感で感じてしまったことをまだ根に持っているのだろうか。

あ、五感ではないか。

流石に味わうようなことはしなかった。

聴覚もないだろうって？

パンツだつて音を出すだろ。

こすつたら摩擦音鳴るじゃん。

ともかく、天真さんの後ろについて歩いていく。

本当は昨日のヴィーネさんとみたく横並びで歩きたいけど、天真さん相手だと気が引ける。

いきなり裏拳をかまされたり、ボディブローを打ち込まれたりされそうで怖いし。

失礼なことを考えながら歩いていると、前の方から天真さんが声をかけてきた。

「…………あのさ」

今まで鳴っていた二人分の足音が止む。

天真さんが振り返ってこちらを向いた。

「どうしたの？」

「私のせいで思った以上に迷惑かけたみたいだから…………その、何とい

うか……ごめん」

昨日とは違い、しおらしい態度でそう告げる天真さん。

ああ、やっぱり気にしてたのか。

なんだかんだ言って普通に良い子じゃない。

「気にしないで。最後は無事に解決したし、謝られるほどのことじゃない」

「あと……佐倉ってさ」

……うお。

ちよつとドキツとした。

名字だけど名前で初めて呼ばれてドキツとした。

「何?」

「優等生演じてて疲れない?」

……はい?」

「私もさ……昔は優等生だったから何となくわかるんだよ。毎日誰かのために生きて、みんなを救おうって思いながら生きてきたんだ」

突然始まる自分語りには戸惑いを隠せない。

そういうえば、ヴィーネさんが言ってたな。

天真さんは昔はすごい真面目で、優しくて、困ってる人を見捨てられない人だったって。

それってヴィーネさんのことだと思っただけで異論はあるだろうか。

答えが明白な問を頭の中に浮かべているうちに話は進む。

「けどさ、こっちにきて一人暮らしを始めてから気付いたんだよ。自分を押し殺してまでみんなを救う意味って何だろうって」

「……はあ」

「だってそうでしょ? 佐倉は今みたいなことを続けて楽しい? 確かに私も自分のおかげで助かった人に感謝されるのを笑顔で受け止めていた時期もあったよ。でも、今考えてみるとなんか違うんだよね……こう、楽しいっていうのとはさ」

まあ、確かに俺も根っからの優等生ってわけじゃないし大変なこと

も多いけど。

その分相応の見返りがちゃんと帰ってくるからなあ。

昨日のパンツ事件も優等生らしく振舞っていた結果許してもらえたわけだし。

「……それで？」

「だから、そんな佐倉に見てほしいものがあるんだよ」

「見てほしいもの？」

何だろう。

何となく嫌な予感がする。

このまま彼女の言う通り、「見てほしいもの」とやらを見てしまったら。

取り返しのつかないことが起きる気がする。

しかし、好奇心ゆえか、それとも彼女の好意から出たであろう提案を断ることに気が引けたゆえか。

俺はホイホイついていってしまった。

この時もう少しく考えるべきだったのだ。

彼女は昔は優等生だった。

そして、その過去の自分を今の俺に重ねている節がある。

多少男女という性別の差で行動原理が異なる点はあるにしても、客観的な評価は高いのだから外から見たら優等生だし、共通点を見出してもおかしくはない。

さて、そんな彼女が見てほしいものとは何か。

十代という不安定な時期。

様々な悩みを抱えている時期だ。

人間関係だったり受験のことだったり、まあ色々あるだろう。

その精神的に不安定な若者が手を出しがちなものとは何か。

たとえば。

ある日、クラスメイトにこう言われたとしたらどうだろう。

『なあ……お前最近疲れてそうだな。そんなお前に勧めたいものがあるんだ……大丈夫、俺もやってるから』

普通に考えたら、「ああ、こいつヤツてるな」と察することができ

る。

騙されることなんてそうそうないはずだ。

だが、俺はこのとき天真さんに騙された。

悪魔の誘いに乗ってしまったのだ。

春の温かい軟風。

空をオレンジ色に染める光は、今日も幻想的な風景を作り出す。

どこか哀愁を感じさせる静かな住宅街の中、俺と天真さんはアパートへの帰途に就いた。

それほど時間もかからずにアパートに着いた。

天真さんはさつきからずっと無言だったが、部屋の前に着くと彼女は口を開いた。

「例のモノは部屋の中にある。佐倉には迷惑をかけたし、特別だからな？」

特定の女子からの特別扱い。

普段なら喜んでいただろうが……今回は素直に喜べない。何でだろう。

彼女は鍵を取り出して玄関のドアを開けた。

そして目に入るのは昨日と何ら変わらないゴミ袋の山。というか、むしろ若干増えてる気がする。

「ちよっと散らかってるけど……まあ慣れれば問題ないよ！住めば都ってやつですか。

あなたが言うと言得力パネエつす。

彼女はわずかに笑みを浮かべながらドアを開け、俺の顔を見る。……え、この腐海に足を踏み込めど？

そんな期待するような目をされても困るんだけど。そんな「お先にどうぞ」みたいな目で見られても困るんだけど。

俺の部屋じゃダメなの？
天真さんの部屋じゃないといけない理由って何？

「……………」

「どうした？ 遠慮しなくていいぞ」

俺がしてるのは遠慮じゃなくて躊躇だよ天真さん。

「…………ふう」

俺は覚悟を決めた。

よくよく考えるんだ。

仮にも、一応、女子の部屋だ。

花も恥じらう乙女の部屋だ。

俺が一度も入ったことのない女子の部屋だ。

あ、妹の部屋には入ったことあるから生まれて初めてではないのか？

いやでも妹の部屋はノーカンだろ。

だから、今回が初めてといっても過言ではない。

どちらにしろ、天真さんがせつかく誘ってくれてるんだ。

断るのも気が引ける。

(南無三下)

俺は彼女の部屋に足を踏み入れた。

「……………オエ」

玄関をくぐると同時に鼻につくニオイ。

今まで嗅いだことのないニオイだ。

…………ぐう。

これは予想以上にキツイ。

だが、天真さんの期待と好意を裏切ることができない。

俺は部屋の奥に進む。

ゴミに埋まってほとんど無事なところが無いが、部屋の間取りは俺の部屋と同じみたいだ。

「あ、ちよつと待ってて」

後ろから天真さんが俺を追い越す。

歩ける幅がゴミでふさがっている所以她は俺のすぐそばを通り、華奢な肩が服越しにぶつかった。

ふわりと。

柔らかい匂いが香る。

部屋に染みついて二オイとは違い、優しい匂い。

……おかしくない？

この部屋に何時間も漬かっているのに何で天真さんはこんな匂いがするの？

君の身体の血液つてもしかして香水か何かでできてる？

不可思議な現象に思いをはせながら天真さんの後についていった先は彼女の自室だ。

廊下と同じく、元の様相は見る影もないほどに汚れている。

まあ、ベッドはかろうじて埋まってないし、床も歩けるスペースはあるから何とか生活できるのか。

絶対俺には無理だけど。

そして、先に部屋に居た彼女は床に座って何やらカタカタとやっている。

テーブルの上でやればいいじゃんって思ったけどテーブルの上はやはりゴミゴミとしていて使える状態ではなかった。

……ゴミゴミって副詞初めて使ったな。

「……よし。佐倉、ここに座ってくれ」

天真さんがポンポンと隣を叩く。

言われた通りに彼女の隣に座った。

「それで、見せたいものって？」

「ふふ……まあ、そう焦るなって。とりあえず、これを見てほしいんだ」

「……パソコン？」

パーソナルコンピュータ。

略すとパソコン。

もつと訳すとPC。

彼女が差し出してきたのは現代文明の利器に他ならなかった。

あと、別に焦ってるんじゃない。

一刻も早く用を済ませてこの拷問部屋から抜け出したいだけだ。

「これがどうかしたのか？」

「パソコン自体はどうでもいい。私が本当に見せたいのはこれだよ」

そういつて彼女はマウスを操作し、デスクトップのショートカット

から一つのアイコンをクリックする。

華美な背景に彩られたファンタジーなデザイン。

壮大な音楽とともに浮かんできたのはタイトルと思わしきもの。

フルスクリーンの高画質で映し出されるそれらに思わず見入ってしまう。

「これは……ゲーム？」

「あれ？　もしかしてやったことある？　優等生はてっきりこういうのはやらないものだと思ってんだけど……」

「……いや、ネットゲームは確かにやったことないな」

携帯ゲーム機とかは俺も持ってるし、昨日も少しやっていた。

けど、家ではパソコンが使えるような環境ではなかったし、ネットゲームなどもってのほかだった。

「へえ……普通のゲームはあるの？」

「ああ。最近やってるのはエンジェルボーイとか、後はエンジェルアドバンスとかかな」

「はあ!?　それ何世代も前のやつじゃん!?　お前いつの時代の人間だよ」

「え……そんなに？」

「流石優等生……時代の流れに疎いな……人間界にもこういう奴っているのか」

呆れたような顔をしながら彼女はボソボソとつぶやく。

時代遅れ呼ばわりされるほど俺は遅れているんだろうか。

こんな部屋の住人に言われるとは思わなかったけど。

それから彼女は何かを決心したような表情をする。
なんだ。

今度は一体何を言うつもりだ。

「よし、佐倉。私が本当の娯楽っていうものを教えてやろう。私がお前を救ってやる」

優しい笑顔で告げられたその言葉。

彼女からすれば純粋な好意だったのだろう。

俺はこれから起こる事態の深刻さを理解できないまま彼女の言葉

に頷いてしまった。

第八話

窓を閉め切り、カーテンもかかっているせいで仄暗い部屋の中。
俺と天真さんを照らしているのはパソコンのデジタルな明かりだけだった。

「まずはキャラクターメイキングからだ」

「キャラクターメイキング？」

「最近のゲームはアバターっていつて自分の好きなようにキャラをデザインすることができなんだよ」

へえ。

俺のやってきたゲームは完全に主人公のイラストは固定だったけど最近のゲームはそうでもないのか。

いきなり驚かされたな。

といつても所詮はゲームだし。

もう少しで夕飯の時間だから頃合いを見て買い出しにも行かないといけない。

ある程度やったら適当にお暇させてもらおう。

「二つ分セーブデータに空きがあるから……佐倉、一つ使っていいよ」
「分かった。ありがとう」

「エンプティ」と表示されている欄をクリックする。

その後表示されたのは服を着ていない半裸の人型のキャラ。

画面の左側には「ネーム」、「ヘア」、「ボイス」など多岐にわたる項目欄が並んでいる。

もしかして、これ全部自分で決められるのか？

「アバターは一度作ったらもう変えられないからよく考えて決めて。私も最初に作ったときは一時間以上悩んじゃったからなあ……」

感慨深そうに彼女は言う。

まるで昔を懐かしんでいるようだ。

それほどこのゲームに執着しているということだろう。

まあ、一時間はやりすぎにしても、せつかくだしちよつと作りこん

でみよう。

俺は彼女の助言を聞きながらキャラクターを作成し始めた。

しばらくして。

俺はやつと自分のキャラクターを作成し終えた。

二人して一息を吐く。

「うん……なかなかいいんじゃない？」

「キャラ作成の時点で結構楽しいな……」

「でしょ？ 私も驚いたよ。げか……世の中にはこんなすごいものがあるんだなあって」

正直舐めてたわ。

部屋の時計を見ると夕飯の時刻はとっくに過ぎていた。

「でも、こんなのはまだ序の口。ここからもっと楽しい世界が待ってるぞ」

……キャラ作っただけで終わるっていうのもなんだしな。

天真さんがせっかく付き合ってくれてるんだし。

もう少しやってから買い出しに行こう。

俺はその後も天真さんの言われるままにゲームを進行させていった。

何時間たっただろうか。

もはや時計を見る気さえ起きない。

「ああ、違う違う……そこはバフかけたほうがいいんだって……そうそう。やっぱり私の見込んだ通り、佐倉は呑み込みが早いな」

「あざっす」

「……よし、そろそろレイドボスのクエストに参加してみよう」
「うす」

部屋に居たのは一人の師匠と一人の弟子だった。

天真さんはすごい。

何がすごいって、とにかくすごい。

このゲームはネットゲだけあってオンラインでやるのが醍醐味だ。

PVP形式ではないので、当然プレイヤー同士の連携が必要となってくる。

的確なタイミングで味方を補助し、パーティーに貢献しなければならぬのだ。

もちろん何の準備もなしに仲間との連携ができるわけではない。

敵であるモンスターの弱点やそれを突くための装備。

装備を作るための材料の入手方法。

仲間の装備や戦い方についての知識。

一見シンプルなシステムに見えて、一つ一つの要素にこだわらないと強くなれないようになってきているのだ。

そして、彼女はそれらのことを驚くほど知り尽くしていた。

「師匠……こいつの弱点は？」

「そいつは適当に火属性の魔法を撃つてれば楽に倒せるよ」

「あざっす」

「うむ」

彼女は短い言葉で簡潔に。

されど、何よりも正確に。

彼女はこの世界で生きていく術を教えてくださいなさいのである。

この方を師と呼ばずして一体誰を師と呼ぶのか。

そこでふと、頭の中に一人の人物が浮かんだ。

『ダメよ佐倉君！ 早く目を醒まして!!』

その人物はとても優しい声で呼びかけてくる。

このままだといけないことになる。

帰ってこれなくなってしまう。

そう彼女は頭の片隅で叫んでいた。

「……どうした？ 佐倉？」

「いえ……何か忘れてるような気がする」

「……まあ、忘れてるってことは大して重要なことじゃないだろ」

「……そうっすね」

「そんなことより、早くヒールしないと死んじゃうぞ」

ああ……いかにいかに。

……。

何というか、彼はいつも気を遣っている態度で私たちに接するのよね。

でも、学校生活を続けるうちに自然と気軽に接してくれるようになるだろう。

私は期待に満ちた心持ちで朝食を食べ終えた。

忘れ物がないかを確認してアパートを出る。

外に出ると同時に、穏やかな風が頬を撫でた。

「ガヴはもう起きたかしら……」

昨日は一応出席してきたが、今日も出席してくるとは限らない。

まさかそんなことはないだろうとは思う。

しかし、彼女はそのままかを起こしてしまうから笑えない。

しかも悪びれもせずに。

一回痛い目に合わせなきゃダメかしら。

一昨日までの状況だったら私が様子を見に彼女のアパートまで訪れることになっていただろうが、今は佐倉君という頼りになる友人がいる。

彼に電話してガヴが起きているか確かめてもらおう。

「あ、でも佐倉君はガヴの部屋の鍵持ってないか……」

電話の発信ボタンを押してから気付く。

でも、彼ならなんとかうまく確かめてくれるだろう。

近いうちに彼の分のガヴの部屋の合鍵を作っておこう。

これからも同じようなことが起こるかもしれないし。

「……………出ないわね」

しばらくしても出る気配はない。

一応ガヴの方にもかけたがやはり出なかった。

ガヴはともかく、佐倉君が出ないのは意外だった。

まあ、確かにまだ朝早くだし、二人とも寝ててもおかしくはない。

「……………」

このまま放っておくのも気分が悪いし……。

やっぱりこの目で確かめに行こう。
私はそう思つて二人のアパートに向つた。

アパートに着き、ガヴの部屋の前まで来た。
道中、何回か佐倉君に電話をかけてみたが、一回も出ることはなかつた。

(何だろう……すごく嫌な予感が)

昨日のガヴはどこか変だった。

何もしていながつたわけではない。

彼女はしよつちゆう佐倉君のことを観察するように見ていた。

もしかして彼の優しさに触れて改心する気持ちが出てきたのかしら、とも思つたがどうもそうは思えない。

「……………」

カバンから彼女の部屋の合鍵を取り出し、ドアを開ける。

視界に入ってきたのは相変わらずの地獄絵図。

私はゴクリと唾を飲み込んで、彼女の自室まで足を進めた。

そして。

私は気付いたら自分のカバンを床に落としてしまつていた。

「……………ナニ……………コレ」

部屋自体は別にいつも通りだった。

いつも通りのゴミ部屋だった。

だが、そこに居た人物はいつも通りではなかつた。

「……………うん…詫び石寄せよカス……………」

「……………うぐう……………何だこのクソガチャ……………確率低すぎだろカス」

その現実には直視するには余りにもむごいものだった。

佐倉君が床で殺人事件の犠牲者のような格好で眠り、その上にガヴ……………いや、ゴミがのしかかっている。

「……………あ……………ああ」

思わず膝から崩れ落ちてしまう。

何だこれは。

何があった。

どうしてこうなった。

「……ハッ！」

呆然としている場合じゃない。

私はすぐに立ち上がり、佐倉君の下に駆け寄った。

のしかかっているゴミをどかし、佐倉君の肩を掴んで揺さぶる。

どかしたゴミが変な声を上げた気がしたがどうでもいい。

「佐倉君!! 起きて!! もう朝よ!!」

「……あゝあゝー」

「……佐倉君?」

「あばあゝあゝ……でゆふっ」

「……」

一応彼は目を開けた。

けど、彼の目は何も映していなかった。

その瞳は泥沼のようによどみ、昨日までの優しい輝きは失われていた。

私は愕然とした。

そして、脳内にフラッシュバックするあの光景。

忘れもしないあの日に見た光景。

つまり、一人の天使が駄天してしまった日のことを、私は思い出していた。

私はさっきまで佐倉君に乗っていたモノに目を向ける。

……まさか。

コイツ、まさか。

「ちよつと、ガヴ!!」

「……んう……あれ、ヴィーネ。おはよう」

「おはようじゃないわよあんた!! これはどういうこと!?! あんた佐倉君に一体何をしたの!?!」

「……ふわあ……まあ落ち着けてヴィーネ」

これが落ち着いていられるか!

私の心臓は怒りと混乱と焦燥でバクバクと脈打っていた。

それに比べ目の前にいる人物は欠伸をしながら私をなだめるように手で抑えるジェスチャーをする。

私は反射的にその手をもぎ取ってやろうかと思ってしまった。

「私は佐倉に正しい道を示してやったんだよ」

「……は？」

そういつて彼女が差し出してきたのは彼女がいつも使っているノートパソコンだった。

「いやあ……ゲームは自分でやるに限るって思ってたけど、人がやっているのをそばで眺めるのっていうのも乙なもんですなあ」

「あんた……なにいつてんの？」

そこで初めて彼女は自分のやらかしたことを認識したのか、頬をポリポリとかいて苦笑いをしながらこう言った。

「だって、優等生を演じている佐倉を見てたら、昔の自分を見ているような感じがして気の毒になっちゃってさ。それで少しは気晴らしになるかと思ってネトゲをすすめたら思いのほかハマっちゃったみたいで……」

「……つまり？」

「な、何だかんだ言いつて佐倉も楽しんでくれたみたいだし。一日ぐらい私みたいに一回落ちるところまで落ちてみたらどうかかな……なんて」

コイツ。

ついにやりおった。

「真面目な人間を誘惑して墮落させるって……それ、まさしく悪魔のやることじゃない……」

「……まあ、否定はしない」

「……」

「あ、あれ、ヴィーネ？ どうしたの、そんな怖い顔して……え、ちよ。待ってってば。話せば分かるって！ 大丈夫だよ、私も通った道だから！ 佐倉もきつと……」

私は目の前にいる悪魔を成敗するために、槍を振りかざした。

第九話

ガンガンと痛む頭と目を抑えながら、俺は騒がしい声を耳にして少しだけ意識を取り戻した。

「ああ、いでえ……」

「佐倉君！ 起きたのね！ 大丈夫？」

「うあ……？」

目を醒ました矢先。

ぼやけた視界でとらえたのは殺人事件の現場だった。

「ひい！ 師匠！ 誰がこんなことを……!?!」

「し、師匠？ 佐倉君……何を言ってるの？」

俺は気怠い体を無理やり動かして天真師匠のもとに這いずりながら近寄る。

「……………」

酷い。

酷すぎる。

師匠の頭には槍のようなものが深々と突き刺さっていた。

そして、彼女は死んだように動かない。

「……諸悪の根源は私が始末したわ。今日は自分の部屋でゆっくり休んで？ 私が学校に連絡しておくから」

「でも、師匠が……師匠があ……」

「佐倉君……あなた、疲れてるのよ。大丈夫。今日一日ぐっすり眠ればきっとよくなるわ。だから一回自分の部屋に帰りましょう？ こんな汚い部屋に居たら体を壊しちゃうわ」

視界は朧気で、思考もひどく鈍かった。

しかし、師匠を見捨ててはいけない、ということだけは確かに違くない。

俺は師匠の手を取った。

「……………冷たい」

まるで無機物のような冷たさが手の平に伝わる。

すでにこと切れているとしか思えないほど、温もりが感じられない。

「師匠……私は最後までお供します」

師匠のいない世界で生きていくなどできるわけがない。

俺は彼女とともに息絶えることを決心した。

「……ごめんなさい、佐倉君。ちよつと痛いかもしれないけど、あなたのためなの……えいつ！」

「ぐべっ」

首に衝撃を感じた直後に俺の朦朧としていた意識は、完全に闇に染まった。

………

結局意識を取り戻したのは午前11時ころ。

徹夜した後独特の気分の高揚感がまだ残っていたが、それに勝る後悔の念に俺は苛まれていた。

「……ゲームで徹夜して遅刻とかアホすぎる」

昨日。

俺は天真さんの策略に見事ハマってしまった。

いや、別に彼女はハメるつもりで自分の部屋に招いたのではないだろうが、とにかく俺は彼女の誘いに乗ってしまった。

その結果がこの醜態である。

特に、ヴィーネさんに見られたのが辛い。

わずかに記憶に残っているが、朝の俺は相当惨めで無様な様相を呈していただろう。

絶対見損なつたに違いない。

それに、何だよ師匠って。

いくら徹夜してたせいで変なテンションになってたからって、あんな腐海の女王を師匠って呼ぶとか馬鹿じゃねえの。

どれだけネトゲにはまってたんだよ。

恐ろしいのは今でも心の中で俺の弱い部分が昨日の続きをシたい

と声高に主張していることだ。

何を、と聞かれればナニを、ではなくネトゲを、だ。

いまだかつてあれほど熱中したものは無いといつても過言ではないほど面白かった。

天真さんの時代遅れ発言は決して誇張ではなかったのだ。

かつては真面目だったらしい天真さんが墮落してしまったのも頷けるし、何より俺自身墮落しかけた。

ネトゲ恐るべし、である。

「……はあ。とりあえず腹減ったから何か食うか」

ヴィーネさんに迷惑をかけてしまったのが何よりの失態だ。

学校に遅刻したのはアレだが、彼女の信頼を失うことに比べたら割とどうでもいい。

彼女は意識の失っていた俺を部屋にわざわざ運んでくれた上に、朝食まで用意してくれたのだ。

しかも、俺が学校を欠席することを学校側に連絡してくれたらしい。

何で知っているのかと言われれば、部屋のテーブルに彼女からの手紙が置いてあり、それに書いてあったから。

ちなみに手紙の内容はこんな感じだ。

『佐倉君へ。』

気分はどうですか？

昨日一昨日に引き続き、うちのガヴリールのせいでこんなことになっちゃってごめんなさい。

ガヴには後でしつかりお仕置きをしておくので、とりあえず佐倉君はどうか早く元の佐倉君に戻ってくれるようにお願いします。

学校には、佐倉君は体調不良で休む、と私が連絡しておきます。

朝食に関しては私が一応お粗末ながら用意したのでよかつたら食べてください。

冷蔵庫に入っていますが、勝手に食材を使うようなことはしてないので安心してね。

あと、今後できれば私のいないところでガヴには関わらないように

してください。

では、お大事に。

月乃瀬ⅡヴィネットⅡエイプリル より』
手紙を読み終えて俺は思わず涙ぐんでしまった。

ヴィーネさんは一体何者なのか。

どうしてここまで他人のために自らを捧げることができるのか。
軽く宗教を興せるレベルで彼女は俺の中で神格化されていた。
きつと信者などすぐに集まるに違いない。

「教祖はもちろん俺だ。」

まあ、それは言い過ぎ……ではないけど、あくまで冗談。

そもそも彼女の性格だったら変に祀り上げられる方が迷惑だろう。

この温かい思いは胸にしまっておくことにする。

今後彼女に利益となる行動として還元していききたい。

そして、次に問題となってくるのは天真さんとの関係だ。

今回の事態は自業自得と言えば自業自得だが、ヴィーネさんが手紙の中で言っている通り、そもそも天真さんに関わっていないければ避けられた。

それでも天真さんは、優等生を演じて疲れている俺を少しでも楽に
してやろう、という思いやりからネトゲを俺に勧めたのだ。

完全に非があるとは言にくい。

というか、ほとんど俺の意志の弱さが原因だろう。

とにかく、天真さんはちよつと方向性がおかしいにしろ優しさを俺
に示してくれた。

こんな些細なことでも縁を切るのもアホらしい話。

ヴィーネさんには悪いが、今後も天真さんとは仲良くさせていた
こう。

何より、彼女は可愛いし。

……そう。

そうだ。

そうだよ。

彼女はやっぱり可愛いのである。

昨日不覚にもネトゲに無我夢中になってしまった俺だが、そんな中でも彼女の存在だけは常に意識していた。

助言を聞きながらやっていたからそれも当たり前前と言えは当たり前前なのだが、そうじゃない。

つまり、何というか、彼女は時折見せる女の子らしさがたまらないということが分かってしまったのだ。

彼女は基本がさつだ。

部屋も汚いし言葉遣いも汚いことが多い。

それは認めよう。

しかし、彼女はそれでも女の子なのだ。

一人称はあくまで「私」だし、トイレに行くときはちゃんと「ちよつと手を洗いに行ってくる」とぼかして言っつて顔をほのかに赤く染めし、スカートは見えないようにちゃんと抑えるし、深夜ぐらいになつてから体の匂いを気にするような素振りも見せて「……シャワー浴びてくる」と小さく呟くのである。

笑い方も「ガハハハ」とか魔王みたいな笑い方はしないで、女の子らしく「……ふふ」と慎ましくも、ああ楽しいんだな、と素直に伝わるように笑ってくれる。

表情も豊かで、喜ぶときは満面の笑みを浮かべて喜び、ゲームの中で俺のキャラが死んだときは一緒に悲しみ、俺を慰めるときは優しい顔になる。

そして、そこで思い出すのがあのピンクの可愛らしいパンツである。

これに関してはもう説明するまでもないだろう。

こんな感じに挙げようと思えばいくらでも挙げられるが、とにかく彼女はあくまで「女の子」だった。

もしかすると男の俺がいるからかもしれない。

女子だけの空間だったらもつとずぼらで豪胆な性格なのかもしれない。

それでも、俺は彼女の見える普段とのギャップに興奮した。

ゲームに熱中している最中でも、思わず目が向いてしまった。言ってることがクス同然かもしれないけど、俺は彼女のそんなところをもっと見たい。

以上のことから、俺は天真さんとも仲良くしたいのだ。

至極真つ当な理由だろう。

異論は認めん。

とはいえ、ヴィーネさんの気遣いやらなにやらを無碍にたくはないので、今後このようなことが起きないように尽力するつもりだ。

「……ごちそうさまでした」

ヴィーネさんの作ってくれた朝食を食べ終える。

ちなみに味は美味すぎて悶絶するレベルだった。

もちろんまずかったとしても彼女の作ったものだったら消し炭でも食ってみせよう。

彼女が朝食のつもりで出したものならたとえ洗濯機でもパンツでも俺は食う。

……ごめん、やっぱ洗濯機は無理だわ。

「さてと、この後はどうすっかな」

せつかくの休日だから、と休むつもりにはなれない。

体の状態異常に関してはベッドでちゃんと寝てヴィーネさんの料理を食したら正常に戻った。

このまま部屋でじっとしているのも手持無沙汰だ。

ヴィーネさんは俺が学校を休むと連絡してくれたみたいだが、別に今から登校しても問題あるまい。

というわけで俺は学校に行く準備を始めた。

昼から出席とかあまり意味がないかもしれないけど、今日はヴィーネさんの顔をまともに見ていないし、天真さんにも会いたい。

白羽さんに関しては何となくいやけ会いたくないけど、あのおっぱいは押んでおきたいからな。

午後の授業の分だけの教科書などをカバンに入れ、戸締りをしてから俺は玄関を出た。

第十話

学校に到着し、職員室で遅刻者の手続きをする。

現在は四時限目の授業をやっているぐらいの時間なので、適当に時間をつぶし、チャイムが鳴って昼休みになってから教室に入った。

今日は昨日とは違い、教室に入ったとたん静寂が訪れたということとはなく、何人かがチラ見しただけで普通の対応をされたので安心した。

教室の後ろ側を通過して自分の席に向かう。

途中で天真さんと目が合い、キョトンとした顔をされた。

口も少し開いている。

こういうところが可愛いんですよ。

そしてその前の席を借りて座っているヴィーネさんとも目が合った。

彼女も驚いたような顔をしている。

彼女に関してはいつも通り順当に可愛い。

最後に、こちらに背を向けている白羽さん。

今気づいたけど彼女めっちゃデカイリボン着けてるんだな。

思わずギョツとしちゃったよ。

白羽さんはどうやら俺の席に座っているようだ。

ちよつと椅子がうらやましいのは俺が変態だからではなく俺が健全な男子高校生だからだろう。

「おはよう、みんな」

昨日の意趣返しと思って白羽さんの真後ろに立って挨拶をしたが、彼女は特に動じることもなくこちらに振り向いた。

「おはようございます。昨日はガヴちゃんと一晩過ごしたそうで、何やらお楽しみだったようですね」

顔を赤く染めながらそんなこと言われるとそのおっぱい触りたくなっちゃうからやめてほしい。

「ただ一緒にネトゲしただけだよ」

でも、冷静になって考えるとそれだけでも十分すごいことだよ。会って間もない同級生の女子と一晚を過ごしたわけだし。

天真さんもよく許してくれたものだ。

「佐倉君、もう大丈夫なの？」

「おかげさまでね。ヴィーネさんにはすげえ迷惑かけた。ごめん」

「ううん。ガヴのしでかしたことだし、私の責任でもあるわ」

完全に保護者の発言だな。

天真さんとは高校からの付き合いだと聞いたが、随分と親密なようだ。

世話好きとグータラ女。

相性が良いのは道理だが、端的に言えばただの一方的な寄生だ。

割と笑えない話である。

「それとヴィーネさんが作ってくれた朝食。めっちゃうまかったよ。ありがとね」

「本当？ それはよかったわ」

気持ちのいい笑顔で彼女はそう言ってくれる。

この笑顔を見ただけでも登校してきた甲斐があるな。

もはやお釣りがくるレベルだ。

「ほら、やっぱり平気だったじゃん。ヴィーネは心配性なんだよ」

「自分の友人のせいで人が一人墮落しかけたら普通心配するわよ」

「そんなシチュエーションもガヴちゃんが実現させると笑えちゃうから不思議ですよね」

「全然笑えないって……」

女三人寄れば姦しいとはよく言うが、別に姦しくはない。

女子高生という肩書は伊達じゃないな。

瑞々しさしか感じないわ。

そもそもそんな大きな声で喋ってるわけでもないし。

「心配って？」

「朝、私がガヴの部屋に行ったら佐倉君まるで廃人みたいになってたのよ。最近よく見るホラー映画に出てきたゾンビみたいだったわ」
「……………」

「それでヴィーネが、『佐倉君、ちゃんと元の佐倉君に戻ってくれるかしら』ってずっと言ってたんだよ」

「他人事みたいに言ってるけど、ガヴももっと自分のしたことの罪の重さを噛みしめなさい」

「だからそこまで大げさなことじゃないって。私だってちよつとだらしな性格になっただけで学校には来てるし、生活にそれほど支障はないしさ」

「入学式とその次の日を休んだ奴が言うな」

……うん。

一言でまとめると、やっぱりヴィーネさんは女神だったってことだな。

「確かに結構ヤバイ状態だったけど、もう大丈夫だから。心配してくれてありがとう」

「……ホントに？ ある日突然連絡が途絶えて、心配して家に様子を見に行ったらゴミ屋敷の中でゲームをやっていたなんてことに佐倉君はならないでね？」

「……今後はそうならないように気を付けるよ」

天真さんが墮落した経緯の一端か。

今日の俺はまさしくそんな感じの状況だったから笑えない。

「ていうか、天真さんはごく普通に登校してきたのか」

「私は佐倉と違ってこれが日常だからな。一日や二日徹夜した程度で行動不能に陥ったりするほど軟弱じゃない。佐倉も早く私みたいなになれるように精進しろよ」

それって精進してるんじゃないやなくて退化してると思うんだ。

ヴィーネさんも呆れた顔をしながらため息をついてる。

白羽さんは相変わらずのニコニコスマイルだ。

いつも楽しそうで何よりですね。

それと、いい加減俺の席からどいてくれない？

前の席が空いてるのでそっちに移ってくれませんか？

そんな感じの意図を込めた視線を白羽さんに送ると、

「あら、どうなさったんですか佐倉君。私の顔に何かついてますか？」

笑いながら言うセリフじゃないからねそれ。

だが、はぐらかしても無駄だ。

俺は屈しないぞ。

「……そろそろ座りたいなああって思ってた」

「そうですか。ではお座りになつたらどうですか？」

「白羽さんが今座つてるところが俺の席なんだけど……」

本当は別にそこまでこだわることもない。

しかし、ここで譲つたらなんか負けなような気がする。

「はあ。でも、床が広いではないですか」

「……………」

……やっぱ俺の負けでいいや。

俺は仕方ないのでカバンを机の横にかけて前の席の方に座った。

「じゃあ、佐倉君も無事に戻ってきてくれたことだし、お昼にしましよ！」

俺はついさつきヴィーネさんの手料理を食したばかりだから弁当は持つてきていない。

そして、そのことについて色々疑問に思ったことがある。

朝の忙しい時間にもかかわらず、男子の俺でも十分な量が用意されていた彼女の料理。

お手軽と言うには豪華過ぎたし、本当に冷蔵庫の中身は少しも減つていなかった。

あの天真さんの部屋の冷蔵庫にまともな食糧が保存されているとも考えにくいし、どこかの店でわざわざ食材を買ってきてくれたのだろうか。

あるいは、彼女自身のアパートから食材を持ってきたかだ。

というか、登校時間帯に開店してる店なんてコンビニぐらいしかないしそっちの方が有り得る。

そうなると、彼女は俺のアパートと自分のアパートを何往復もしたことになるが……。

「……………どうしたの、佐倉君？」

無意識にヴィーネさんの方を見つめてしまい、怪訝そうな顔で尋ね

られた。

この際、本人に聞いたほうが早いか。

「もしかしてヴィーネさん、朝、学校間に合わなかったんじゃないかなって今さらながらに思い当たったんだけど……」

「ああ……確かにギリギリだったけど、何とか間にあったから。気にしないで。佐倉君は優しいから気に病むかもしれないけど、全然佐倉君は悪くないんだから。心配してくれてありがとうね」

ええ……なんか笑顔でお礼言われちゃったよ。

こんなこと考えると失礼かもしれないけど、この子お人よし過ぎてちよつと怖いよ？

出会って間もない関係なのに何でここまで人に優しくできるの？

ヤバイ……なんか泣きそう。

心が震えるってきつと今の俺の心境を言うに違いない。

「……ありがとうヴィーネさん。この恩はいつか必ず返します」

「ふふ、じゃあ、楽しみにしてるわね」

目頭を押さえながら俺が言うと、彼女は微笑みながらそう言った。

……アカン。

マジで惚れそう。

三人が昼食を食べ終わった後、白羽さんが用事があると行って教室を抜け出したので俺はすぐさま自分の席に座り直した。

白羽さんの体温で生暖かくなった椅子の温度を全力で感じながら天真さんとヴィーネさんの話を聞く。

「あ……そうだ、数学の宿題やるの忘れてた」

唐突に天真さんが言った。

「今からやれば間に合うんじゃない？ そんなに難しい内容じゃなかったし、すぐ終わるわよ」

「ええ……面倒だし、写させてよヴィーネ」

「ダメ。自分でやりなさい」

数学の宿題か。

そういや確かにプリント一枚分のやつが配られた覚えがある。

「ちつ……じゃあ佐倉に見せてもらおう……つて佐倉も昨日は私とずつとネットゲしてたんだからやってあるわけないか」

「いや、多分やってあると思うけど……」
「え？」

カバンの中身をこそごと探り、プリント保存用のクリアファイルを取り出す。

まだ学校が始まって間もないが、すでに年間予定表や時間割、授業のオリエンテーションで配られた配布物などのせいでパンパンだ。

中学のときもしょっちゅう思ったことだが、全部一冊の冊子にまとめてくれればいいのと思わざるを得ない。

一番嫌なのが大量のプリント類を何回にも分けて配られることだ。

これをやられると大事な連絡事項が記載されたプリントがなくなったり埋没する恐れもあるし、自分にも渡っているかの確認もいちいちしないといけない。

せめて一回で済ませてほしいと思うのも仕方ないだろう。

対応策としてはクリアファイルの方も何種類かに使い分けることだが、それはそれで面倒だし。

真面目に分けようとする和二つや三つじゃ足りなくなるのもあるし、学生の悩みの種の一つだな。

そんなことを思いながら、取り出したファイルの中から一枚のプリントを引き抜いて机に置いた。

「……うん、やっぱやってあった」

しつかり黒い文字で解答が書かれているのを確認して安心する。

まあやってなかったとしてもヴィーネさんの言う通り、この程度の内容なら問題はなかったと思う。

「……お前それいつやったんだ？」

「多分昨日渡されてすぐやったんだと思う」

「うわあ……流石優等生……何にせよ、それなら私にとっても好都合。早く見せて」

天真さんがさっさと寄越せと手を差し出してくる。

女子にそういう風に手を差し出されると思わず犬みたいにお手、っ

て手を置いちやいたくなるんだよな。

もしかして俺だけだろうか。

まさかそんなことはないと思いたい。

それはさておき、天真さんに宿題を見せるかどうかについてだが、友達に宿題を写させてあげるといふ行為は結構昔からやってた。

別に俺が損するわけでもないし、むしろ礼を言われる分、得をしているとも言える。

それに加えて、天真さんには昨日色々な意味でお世話になった。

結果はどうあれ、何だかんだ気を遣ってくれたことには俺も感謝している。

だからここで普通にプリントを渡してもいいんだが……。

俺は天真さんの前の席に座っている人物に目を向ける。

「……………」

彼女はこちらをムツとした顔で見ている。

ムツとした顔もやはり可愛らしい。

率直に言つてペロペロしたい。

無言だが、何を言いたいのかは分かる。

「絶対渡しちゃダメ」と言いたいのだろう。

もちろんフリじゃない。

天真さんとヴィーネさんのどっちを取るか。

須臾の葛藤の後、俺は言った。

「ごめん天真さん。俺はヴィーネさん側に付く」

「はあ？」

師弟関係とは場合によっては親子関係よりも重いことがあると聞く。

けれど、俺は彼女の弟子である前に一介のヴィーネ教徒だ。

神ヲ裏切るハ、ソレ即チ許サレザル禁忌ナリ。

というわけでごめんね天真さん。

後でまたブレインエンジェルのシュークリームあげるからさ。

だからそんな面倒くささと怒りを足して二乗したような顔しないで。

「よく言ったわ佐倉君！ 今度は負けなかったわね！」

対照的にヴィーネさんは嬉しそうに声を上げる。

師匠を裏切った甲斐がありますわ。

「代わりと言ってはなんだけど俺が教えるよ」

とはいってももちろんフオローは忘れない。

むしろこの展開を望んでいたまでである。

つまり、女子に勉強を教えるという憧れのシチュエーションを、だ。

対象が天真さんだと若干違和感を覚えてしまいが細かいことはどうでもいい。

「私も教えるのを手伝うわ。さあガヴリール、観念して大人しく自分で宿題をやりなさい」

「ちえー……二人とも頭固いなあ。ヴィーネはともかく佐倉なら見せてくれると思ったのに……全く。不出来な弟子を持つと苦勞するよ」

「弟子って……佐倉君も朝変なことを言ってたけど、一晩で一体どういう関係になったのよあなたたち……」

朝のことは記憶の彼方に飛ばしてください。

昨日からの一連の出来事はもう俺の黒歴史ベストスリーに認定されたので。

いや、ベストじゃなくてワーストか。

「それじゃあ、早く終わらせましょう」

「そうだね」

ヴィーネさんの言葉に頷き、二人して天真さんに数学の宿題を教え始めた。

昼休み終了約十分前。

ハプニングが起きた。

後は残り一問だけ、という状況。

文句を言いつつも素直にヴィーネさんの教えを賜っている天真さんの端正な顔に見とれていたときだった。

「あはははははは!!」

「うおわ!!」

なにになになに!?

急に後ろから大きな笑い声上がる。

結構な大音量だったため思わず悲鳴を上げて飛び上がってしまった。

「滑稽ね、ガヴリール!! 私の宿命のライバルともあるうものがそんな紙切れ一枚に翻弄されるなんて……落ちぶれたものね!」

「……はあ」

シャーペンを握っている天真さんがため息を吐き、俺の後ろに顔を向ける。

ついでに俺も後ろを振り向く。

「しかも人間に教えを乞うなんて……呆れたわ。これはもう私があなたに勝利してこの世界を支配する日も近いわね!!」

そう言つてまた高笑いを始めたのは、胸がヴィーネさん以上白羽さん未満の赤い髪の女の子。

見覚えがあるその子に俺は思わず言ってしまった。

「ごめん。すげえうるさいからもっとポリューム落としてくれない?」

「うえ? あ、そ、そうね。失礼したわ」

本当に鼓膜が破れそうになるくらいうるさかったのでマジのトーンで言つたら意表を突かれたような顔をして彼女はそう言った。

あ、ちよつとシユンつてなってる。

強く言いすぎたかもしれないな。

「佐倉、お前の頭脳でそのバカを何とかしてやってくれ」

「えつと、この人、天真さんたちの知り合い?」

「あら、あなた……このサタニキアさまを知らないの? 私は胡桃沢

ⅡサタニキアⅡマクドウエル!! いずれ魔界の王となりこの世の全てを統べる者よ!! そんな私と共に会話できることを光栄に思いなさい、人間」

いや、だからうるさいんだって。

白羽さん然り、何でみんなして俺の真後ろでそういうことすんの? 確かにここ一番後ろの列の席だけど、机の後ろ側結構なスペースあ

るんだしそつちで話せばいいじゃん。

あと、その自己紹介なんだけどさ。

名前以外の全部の情報省いたほうがいいと思うんだ。

その自己紹介だけで君のオツムの加減が分かっちゃうから。

「今日の朝会つたばつかなのに何故か私に絡んでくるんだよコイツ……」

「へえ……」

「ごめんね、佐倉君。この子は私と同じ出身なんだけど、ちよつと面倒臭い性格してるから……悪い子じゃないから仲良くしてあげて」

悪い子ではないのはなんとなく分かるよ。

この子のタイプはあれだ。

捨てられた子犬系女子だ。

あるいは、ウザカワ系女子。

段ボール箱に入れられ、道端にただ一匹ポツンと。

そばを人が通ると、つぶらな瞳で涙目になりながらこちらを見上げてくる子犬。

人間に酷いことをされながらも人間に救いを求め、一度懐いた人間にはとことん遠慮をしないタイプの生き物。

懐かれた側の人間も、いちいち構ってほしいとねだってくる子犬を無碍にできず、かといつて構ってやると尻尾をぶんぶん振って喜びを全面に押し出すところが可愛くてついつい甘やかしてしまう。

俺の人を見る目は人並みだけど、このサタニキアさんっていう女子の第一印象はそんな感じだ。

天真さんとヴィーネさんの表情もその正しさを裏付けている。

「あはははは!! 人間なんて恐るるに足らず!! 私の雄姿を見せてあげるわ! その目に焼き付けなさい、ガヴリール!」

俺の先ほどの文句はまるでスルーし、相変わらずの大音量で笑いながら彼女は自分の席へ戻っていった。

周囲の目をものともしないその豪胆さは恐れ入るが……。

天真さんとヴィーネさんは可哀そうなものを見る目で彼女を見送っている。

多分俺も同じような目をしているのだろう。

「……とりあえず、天真さんの宿題の続きをやろうか」

今ので五分ぐらい持つてかれたけど、まだ余裕で間に合うだろう。

二人も俺の言葉に頷いて、三人でやりかけの数学の問題に再び取り組み始めた。

第十一話

五時限目である数学の授業が始まる前に天真さんの宿題は何とか終わった。

天真さんは元優等生だったというだけあつて理解力は非常にあり、ほとんど自分の力で問題を解いていたので教えるのもそれほど大変ではなかった。

やればできる子、ということだろう。

問題は数学の授業中。

例の赤い髪の女の子が宿題のプリントを集める際に教師に喧嘩を売る真似をしたのだ。

教師の目の前で、宿題をやっていないことについて全力で開き直った挙句、それを誇っているような発言をし、教室にいる人全員の注目を浴びながら高笑い。

まさに狂人の所業である。

「一回病院に行かせた方がいいんじゃないのアイツ？」

「はあ……頭が痛くなるわよね。あの子を見てると」

天真さんとヴィーネさんもやれやれといった感じで授業終了後のため息をついていた。

ちなみに赤髪の娘……胡桃沢さんは数学の教師であるグラサンに教室の外に連れていかれそのまま授業終了のチャイムが鳴るまで帰ってこなかった。

罰として結果的に授業を受けさせないというのは法律的にちよつとまずいって聞いたことがあるけど、あれはいくら何でも仕方ないと思う。

そして胡桃沢さんは今は自分の席で大人しく座つて……いや、えぐえぐと声を上げて泣いていた。

……可哀そうに。

「まあ……馬鹿な子ほど可愛いっていうし、きっと何とかなるよ」

「……だといいいけどな」

大分投げやりなフォローになってしまったが、あれはもう矯正できない。

俺たちは三人そろって同じような顔をしながら次の授業の準備をし始めた。

授業がすべて終わり、今日も天真さんと二人きりで帰ろうとカバンに荷物をまとめている時だった。

「佐倉君、ちよっとお時間良いですよね？」

「……え？」

「まあ！ ありがとうございます。では私についてきてください。あまり人が多いと恥ずかしいので」

有無を言わさない勢いで白羽さんに声を掛けられ、そのまま最後まで言われる。

そして彼女は体をくるりと回転させ教室の出入り口へと向かい始めた。

……いくらなんでも頼みごとの仕方雑過ぎない？

余りに一方通行な会話だったよ今。

マイペースってレベルじゃねえ。

急な出来事過ぎて隣にいた天真さんとヴィーネさんもポカンとした様子だ。

「白羽さんっていつもあんな感じなの？」

「……いや。あそこまで人の都合を無視した誘い方をされたことはないな」

一応白羽さんの昔ながらの友達であった天真さんに聞いてみると、そんな返答が返ってきた。

つまり、俺だからあんな誘われ方をされたってことですか。

完全にあの人俺のこと舐めてますよね。

物理的に舐められるんだったらともかく、余りいいように使われるのも気分のいいものではないが……。

まあ、今のところは素直に聞いてあげるけどさ。

今後と同じような傾向が続くようならちよっと文句を言ってみよ

う。

「どうする？ 私たちも話が終わるまで待ちましようか？」

「いや、大丈夫。二人は先に帰ってて。長くなると申し訳ないし」

「そう……分かったわ」

「じゃあ行つてくる。また明日」

「ええ、また明日」

「またな」

そうして二人に見送られながら教室を出ると、ドアのすぐ近くで白羽さんが待つていた。

流石に置いていくようなことはしないらしい。

よかった。

彼女だつたら自分だけ先に行つてわざわざメールかなんかでもう一度呼び出すとか考えられなくもない。

この娘、人を苦しませるためだつたら手間を惜しまなさそうだし。

「では行きましようか」

「どこにいくんだ？」

何の用かまだ聞いていないうえに、どこで話をするつもりなのかすら聞いてない。

人気の多い場所だと恥ずかしいと言つていたが、もしかして噂のアレだろうか。

学生限定で、かつリア充限定のイベントと言われるアレ。

アレって今の時代は大抵メールとか電話とかSNSの類で済ますらしいよね。

中学のころ同じクラスにいたカップルとかは大体そうだった。

伝聞形式でしか聞いたことがないからそんなの都市伝説じゃないのってちよつと疑つてたけど。

まさか本当に実在するんだらうか。

え、期待してるのかつて？

いやいやまさか。

だってあの白羽さんですよ？！

告白されるよりも脅迫される可能性の方が断然高い白羽さんです

よ？

でも、今のところパンツ事件以外で弱みを晒した覚えはないし、そもそもやましいことなんて何もしてないのだから弱みが出てくるわけもない。

まあ変なデマを広められたりしたら困るっちゃ困るけど、それなら俺の知らないところでやるだろうし。

大体、そんなことをされるほど彼女に嫌われるようなことをした覚えもない。

だからこそ、本当に何の用なのか推測できないのだ。

入学してまだ数日しか経ってないというのもあるし、心当たりがほとんどない。

一応考えられる可能性としてはこんな感じだろうか。

愛の告白（笑）……5%

脅迫……10%

何らかの厄介ごと……84%

その他……1%

ごめん、やっぱ推測できてるわ。

適当に可能性を挙げてっただけど多分これ正解だわ。

恐るべし、人間の直感。

俺が自分の動物としての生存本能の優秀さに慣れてっていると、俺が質問してから大分時差があって、ほんの少し前を歩いている白羽さんが返事をした。

「そうですね……心霊スポット、といったところでしょうか」

「はっ」

心霊スポット？

心霊スポットって、リア充どもが吊り橋効果を期待して異性と二人つきりで行くあの心霊スポット？

ホラー映画とかだとリア充の墓場スポットとなり、リアルだと恋人たちのホットスポットとなるあの心霊スポットですか？

「……………」

意外過ぎる返答に言葉が詰まる。

この学校にもそんなところがあつたのか。
いわゆる学校の七不思議、という奴だろうか。

俺が小学生の頃も随分と流行つたものだ。

ホラーというのは人によって結構好き嫌いが分かれるものだが、俺は嫌いではない。

というか、むしろ人に比べたら好きと言つてもいい。

それは小説のような文字媒体としてのものでも、テレビのような映像音声としてでも。

あるいは、目の前で人が肉声をもつてして語るといふ形でも。

ホラーというのは色々な意味で心をくすぐる代物だ。

次に何が起るか。

どうして事件が起つたのか。

どういう結末が待っているか。

テンプレとして使い古されているような設定でも、何故か飽きることもない。

昔から実家で妹と二人で一緒によく見ていた記憶がある。

昔というか、最近までしょっちゅう妹とホラー映画鑑賞をしていた。

妹もホラーが好物で、いつの間にかホラー物のDVDをレンタルしてきては一緒に観ることをねだり、俺の隣でビクビクしながら楽しむ、というのが俺と妹の日常的一幕としてあつた。

……そういうえば、妹の声を聴くことがなくなって久しいな。

今日の夜辺りにでも電話してみようか。

きつとアイツも喜ぶはずだろうし。

ともかくにも、ホラーには結構な思い入れがある俺だが、ここでその話が出てくるとは思わなかつた。

白羽さんは俺と心霊スポットに行つて一体何がしたいんだろうか。

吊り橋効果で俺を彼女に惚れさせたいんだろうか。

俺を惚れさせて、自分の言うことなら何でも聞く犬を開発したいの
だろうか。

白羽さんの容姿と性格だと全然ありえない話でもないからな。

人によつてはむしろ進んでなりたがる人もいそうだ。
ふと、俺がそうなつたらどんな感じだろうと想像する。

『私の恋人になりたいのでしたら……跪いて私の靴を舐めなさい』
『ぶひい！ 喜んで舐めさせていただきます！』

……ヤバイ。

悪くないかもしれないと思つてしまった自分がいる。

薄笑いを浮かべながらフオカヌポウとか言つてる自分がいる。

これはダメだ。

これ以上考えない方がいい。

俺は白羽さんのただのお友達。

それ以上でも、それ以下でもない。

それでこの話はお終い。

というわけで意識を現実に向けよう。

白羽さんと斜めに並んでしばらく校内を歩き、やがて周りの環境の
変化に気付かざるを得なくなるところまできた。

入学したばかりの一年生ではまだ知り得そうなもない校舎の片隅。

化学や物理といった科目の実験室や講義室に、美術室やコンピュー
タ室など、特別授業でしか使われない教室が集中している棟に来たよ
うだ。

彼女があらかじめ言つた通り、人の気配はまるでしない場所。

窓の外から運動部などの掛け声などが一応聞こえてくるが、それも
耳を澄ましてやっと聞こえるという程度。

通りすがりのような偶然でも人に邪魔をされたくないからここま
で誰もいない場所を選び、わざわざ足を運んだのだろう。

どうやらそれなりに込み入つた話になりそうだ。

そうでないなら適当に廊下の隅つことかで話せばいいことだし。

俺は少しだけ身構えてそのまま白羽さんのすぐ後ろをついていっ
た。

そして白羽さんが足を止めたのは三階にある一つの空き教室の扉
の前だった。

鍵がかかっているというわけでもなく、白羽さんが先に入り、俺も後続いた。

中の様子を見渡す。

いかにも、という感じはしなくもない。

長らく掃除や整理が施されていないが故の埃っぽいにおい。

教室はほとんど使われなくなった学校の備品や何かの書類ファイルで埋まっており、その様は昨日一晩入り浸った天真さんの部屋を彷彿とさせた。

確かに何かしらの怪談噺の舞台としてはおあつらえ向きだ。

曰くつきの教室としてうわさが広まっただけでもおかしくはないくらいには雰囲気もそれっぽい。

「ここに幽霊が出るのか？」

「はい、ちよつと待っててくださいね」

白羽さんは教室の奥まで足を運ぼうとしていた。

足場が余りよいとは言えないので転ばないか一瞬心配したが、彼女は身軽な足さばきで障害物を乗り越え、あるところでこちらに振り向いた。

二人して向かい合う。

シンとした空気は一層深まり、先ほどまではかろうじて聞こえていた外からの声はもはや微塵も聞こえない。

「……そろそろ、どうしてこんなところに連れ出したのか聞いてもいいか？」

沈黙を先に破ったのは俺の方。

期待とも不安ともつかぬ、ドキドキとしたものを胸に抱きながら声を出す。

白羽さんは、会って間もないながらも既に見慣れた微笑を浮かべ、そして口を開いた。

「佐倉君、私、あなたのことがずっと気になっていました」

「……ほう？」

「ガヴちゃんの下着の件で初めて面識をもったときから……そして、実際にあなたと言葉を交わしていく中でこの思いは確信に変わりま

した」

……ほほう？

これはもしかして。

もしかするともしかして。

まさかの5%を引いてしまった感じだろうか。

白羽さんは気のせいかもしれないもよりも落ち着きがなく、どこかソワソワとしている。

少なくともいつもとは違った様子であるのは確かだ。

そうなる俺も平常心を保つのが難しくなってくる。

いや、まさかとは思うんだよ。

まさか白羽さんが俺に気があるだなんてありえないとは思うよ？

けどさ、「ずっと気になっていたんです」だよ？

そんなこと言われちゃったらこっちだってその気になっちゃうじゃん。

その程度で動揺するなんて童貞臭いつて？

実際童貞なんだから仕方ないだろ。

どうしよう。

もし本当に白羽さんに告白されたら。

まず大前提として。

俺は女子に告白されたことがない。

それ故にこういう時どうしたらいいのかもわからない。

その上、当然のことながら俺は白羽さんのことをまだよく知らない。

人を困らせるのが好き、という性格は自ずから知ることができるが、それ以外はいまいち把握できていない部分が多い。

だからこそ、正直言って白羽さんに対して恋愛感情の類を持ち合わせない。

そう考えると、告白を断るのが妥当でかつ誠実な行動と言えるのだろうか。

……いや、まずは最後まで話を聞こう。

いくら何でも早とちりが過ぎる。

俺はバクバクと鳴っている心臓の鼓動を感じながら、その動揺を知られないように無意識に体に入力してしまっていた。

……そして。

彼女は俺の目をまっすぐに見て、ついに口を開いたのだった。

第十二話

コポコポ、と耳障りの良い音と同時に、鼻を優しくくすぐる独特の香り。

初めてそれを口に入れたときは慣れない苦さに顔をしかめたものだが、今ではやすらぎの風味の大事な要素となっている。

癒し、と表現するには流石におおげさではあるが、それに近い安心を得られるもの。

つまるところ、ドリップコーヒーに俺はお湯を注いでいた。

場所は自宅のアパートのキッチンで。

時刻は夜の七時ごろ。

名目は夕食後の締めとして。

カップからあふれそうになるくらいまでお湯を注いだ後、コーヒーバッグを取り出して三角コーナーにポイッ。

それから置いてある砂糖袋から小さじ二杯ほどをカップの中に溶かして混ぜる。

準備完了。

こぼれないように静かに足を動かして自室に戻り、机の前の椅子に座った。

「……………ふう」

とりあえず一口すすり、一息つく。

口にやや酸味のある苦みがじんわりと沁みとおり、それが鼻の奥まで広がる。

喉を通っていく熱と、手にもつカップから伝わってくる熱。

月並みな表現でしか語れないが、シンプルな美味しさというのはこういうのを言うのだろう。

「……………」

ある程度コーヒーを味わってから、俺はポケットの中からあるものを取り出した。

それは一つの小さな巾着袋だった。

学校で白羽さんに話を聞き終わった後に渡されたもので、中に何が入っているのかは不明。

感触からして固い金属上の物質、他にも何か紙らしきものが入っているように思われる。

開けて中身を確かめようと思ったが、それは白羽さんからNGがでてしまった。

そして厄介なのは人間の性。

ダメと言われたらやっつけてしまいたくなるのは仕方ないだろう。

渡されてすぐはそう思っていた。

だが、白羽さんの話をよく聞いて、その考えは吹き飛んだ。

……そう、一番問題なのは白羽さんからのお話である。

結局、白羽さんが俺に惚れたとかいう話ではなかった。

それが判明した時点で自分のチェリーさ加減に羞恥を覚えたが、それはどうでもいい。

問題は別の意味での彼女の告白の内容。

彼女からはまさに想像の斜め上の告白をされたのだ。

『——あなたは悪霊に憑りつかれています』

彼女は、曇りのない瞳で確かにそう言った。

念のために「パードウン？」と聞き返したが見事にスルーされ、そのまま会話は続行した。

そして、話を聞くにつれて強まる疑いの念。

何をばかな。

そんなことあるわけない。

やっぱり電波だったのか。

早く帰らせてえ。

パイ乙ペロペロしたい。

ところどころで雑念が混じりつつも、一応は彼女の話聞いていた。

要約するとこんな感じだろうか。

・俺には質の悪い悪霊が憑いている。

・早く何とかしないと大変なことになってしまう。

・何とかするための手段はあるがもう少し時間がかかる。

・とりあえずお守りとして例の中着袋を持っていてほしい。

・じゃあ、お大事に。

ツツコミどころは満載ではあるが、ひとまずは彼女の話がすべて真実だと仮定しよう。

ホラー映画とかだと、助言を無碍にしてばかばかしいと一笑に付すのは代表的な死亡フラグだからな。

冗談を言っているような雰囲気でもなかったし、何かのモニタリングかドツキリかとも思ったがカメラのようなものもなかった。

それは白羽さんが教室を去った後に教室をくまなく調べたから間違いない。

その上、大して親しいとも言えない異性に「悪霊がついてます」と告げるような笑えないドツキリを仕掛けるというのも考えにくい。

何より、今になって落ち着いてよく考えると一応の心当たりはあるのだ。

まず、この部屋に引越してきてから変な夢を見るようになった。自分が別の誰かになって助けを呼んでいて、早く気付いてほしいと強く叫んでいる。

そんな感じの夢を。

単純に環境の変化故の悪夢っぽいものだと思っていたが、まあ何かに憑りつかれた兆候としてはありえなくはないだろう。

そして彼女の話の信憑性を裏付けけるような、幽霊のような超常的な存在、あるいは現象を認めざるを得ない出来事がついこないであった。

……言わずもがな、天真さんオカルトパンツ事件である。

結局経緯はうやむやとなってしまう、思考することを放棄してしまっただが、今の状況においてこの事件は一つの判断材料として非常に重要だ。

すなわち、「空から突然パンツが現れるという出来事はあり得る」と

いう事実。

これを少し寛容に一般化すれば、「超常的な現象が俺の周りで起こりうる」という事実が得られる。

加えて、もう一つの事実。

「超常的な現象が起きたことを納得する人物が複数人いる」という事実だ。

こっちのほうが重要かもしれない。

というのも、この事実のために「白羽さんだけが電波少女である」という可能性が薄まるからだ。

白羽さんに加えて、天真さんとヴィーネさん。

彼女らは「パンツが突然空中に現れた」という説明を聞いてほとんど疑うようなことをしなかった。

ヴィーネさんは白羽さんから「天真さんのパンツが佐倉君の机に降ってきた」という説明を受けて「災難」の一言でパンツ事件の感想を終わらせた。

天真さんは自分のパンツが急になくなったというのに、激しい羞恥心を感じただけ。

明らかに普通過ぎる反応だ。

白羽さんに至っては俺の「空から降ってきた」という発言に対してはつきりと肯定するような言動をした。

細かいことを挙げようとすればもつと思いが当たることはある。

個人的に一番気になってるのは彼女たちの名前のキラキラ加減だろうか。

まあ、名前に関して文句をつけるのはナンセンスだからあまり突っ込まないようしよう。

とにかく、以上のことから「白羽さんの言っていることは真実」であるという可能性、「俺に悪霊が憑いている」という可能性もまた現実味を帯びてくるのである。

考えすぎと言うには、今挙げたようないくつもの事実を否定するよきな根拠は持ち合わせていない。

とはいえ、余りに心配しすぎても事態が良くなるわけでもない。

そもそも全部可能性の話だ。

それっぽい根拠を挙げて論理的になったつもりで推理してみたが、何かの間違い、という可能性ももちろんある。

ちなみに、流石に俺も話を聞いている間中黙っていたわけではなく、色々質問をしようとした。

だが、極めて乙女チックなことに「秘密です♡」の一言で全て一蹴。したがって今の俺はただ悪霊が憑いていることを知らされてそのままほったらかしの何とも心もとない状態なのだ。

白羽さんにはマジでいつかセクハラしてやろうと思う。

一応その際無視された疑問点をまとめておくとするれば、

- ①なぜわざわざあの教室に連れてきたのか。
- ②なぜ白羽さんは俺に悪霊が憑いていると思ったのか。
- ③悪霊を放っておいたらどうなるのか。
- ④渡されたお守りは本当に効果があるのか。
- ⑤俺は一体どうすればいいのか。

この五つが一番気になるところだろうか。

考察しようと思えばいくつかそれらしい推論を立てることもできるが、答え合わせをすることはできない。

白羽さんのことを信じるのであれば彼女が勝手に解決してくれることに期待するのが一番だろうか。

そうなると俺にできることは何もないから、⑤の答えは余計なことをしなればいい、ということになる。

④の巾着袋も万が一のことを考えて開けないでおこう。

小さいお札とかが入ったらマジで怖いし。

……今日の白羽さんの話に関してはこのぐらいでいいだろう。

これ以上はただ不安をかきたてるだけだ。

「……と、もうないか」

考え事に没頭していつのまにかカップの中が空だったことに気付いた。

カップを洗って片づけてからこの後はどうするか考える。

「あ、そうだ」

ふと、思い出した。

確か、妹に電話しようと思ってたんだっけ。

白羽さんに変なことを言われて人恋しくなってたところだから
ちよūdい。

思いついてすぐに、充電ケーブルにぶつ刺しておいたケータイを手
に取って、操作する。

今年になってからガラケーではなくスマホを使うことにしたから
まだ操作に慣れていない。

今どきは小学生のころからスマホを持たせる家庭もあるらしい。

俺の家ではそんなことなかったが、天真さんからも時代遅れと言わ
れるし、やはり色々遅れているんだろうか。

「ええと……さ、さ……これか」

妹の名前を見つけたのでタップし、発信ボタンを押す。

しばらく待つと、呼び出ししているときの音が止んだ。

携帯を耳に当て、さっそく声をかける。

「もしもし、沙那さなか？俺だけど聞きこえる？」

『……い……え……る』

「あれ？おい。沙那？」

一瞬電話をかける相手を間違えたのかと思って画面の表示を確認
するが、確かに妹の名前だった。

『……ま……あ……まえ……いる』

「……………」

別に雑音等が入っていて聞こえづらいわけではない。

電波が悪いから断続的に声が聞こえるわけでもない。

単純に相手の声が小さいから、聞こえないのだ。

「……沙那？」

『……いま……いえ……な……る』

……やはりうまく聞こえない。

音量を最大にして耳を澄まして聞いてみる。

「……………やっぱり聞こえないな」

今度はかすかに聞こえていた声も聞こえない。

早速壊れたのだろうか。

別に落したりはしてないのだが……。

仕方ないので一度電話を切ってもう一度かけ直す。

先ほどと同じように、呼び出し音が止まってから声をかけた。

「もしもし、沙那？」

『……………はい』

少し間があつて返事が聞こえた。

幼いころから余り変わらない聞きなれた声。

間違いない妹の声だった。

どうやら今度はちゃんと繋がったらしい。

『兄さん？』

「ああ、オレオレ」

『……………そう』

相変わらずの抑揚のない無愛想な声だ。

とはいえ機嫌が悪いとかではなく、俺の妹はクーデレ属性なのでこんな調子だけである。

「久しぶりだな」

『……………でもまだ一か月も経ってない』

「それでも久しぶりな感じがするだろ」

『……………そうだね。久しぶり』

俺がこつちに引越してくる前まではほとんど毎日同じ屋根の下で暮らしていたのだ。

数週間離れただけでもそれなりに思うところはある。

それは妹も同じだと思いたい。

「なあ、この電話の前に一回そつちにかけたんだけど……………」

『兄さんからかかってきたのはこの電話が初めて……………だよ？』

「……………そうか」

気になっていたことを聞いたが、謎が深まったただけだった。

確かにさつきは一度どこかと電話が繋がったはずなのだが……………。

少しばかり背筋に冷たいものを感じたが、今は置いておこう。

「家の方は何か変わったこととかあったか？」

いざ話そうとするとこのぐらゐの話題しか見つからないのは初めての電話だからだろうか。

何故だか少し緊張している気がする。

けど、妹からの話でその緊張もいつの間になくなっていった。

『……おつきいムカデが出た』

「ムカデ？ 珍しいな」

『うん……大変だったよ。母さんが着火ライター持ち出して危うく火事になるとこ……だった』

なにやってんだ母上。

ムカデ相手にチャツ○マ○はオーバーキルだろ。

そういえば、虫とか嫌いだったな母さんは。

もちろんああいう節足動物が好きな人は少なくとも多数派ではないとは思うが、俺の母親は今妹から聞いた話からも察せる通り大の虫嫌いだ。

テントウムシやカメムシ程度でも視界に入った瞬間にパニックになり、包丁やバーナーを持ち出してくる。

気持ち分かるんだが、いくら何でもそれはないだろと言いたくなる程の虫に対する憎悪をうちの母親は持ち合わせていた。

「へえ……それで誰が対処したんだ？」

『……父さんが洗剤を使って何とかした』

「ムカデにも洗剤効くんだな……」

ゴキブリが出たときには洗剤をかけるといい、というのはよくテレビでやっている話だ。

ああいった虫は口からではなく体中にある気門という空気の入出口から呼吸を行っている。

水だけだと体表をコーティングしている油にはじかれるが、洗剤をかける油を取り除きそのまま気門をふさいでしまうので虫を窒息死させることができるらしい。

しかしよくよく考えたらムカデは昆虫ではない。

ムカデの生態とかに詳しいわけではないが、見た目は似たようなものだし洗剤も効果があるのだろう。

意外なタイミングでちよつとした豆知識みたいなものが増えたな。

『兄さんは……どうしたの』

「いや、ちよつとお前の声が聞きたくなつてさ」

『……………ふうん』

少しばかり長い間があつて気の抜けた返事が返ってくる。

俺の経験から言わせてもらえばこれは多分照れてるな。

この程度の台詞で照れるとか俺の妹マジでチョロイ。

『私は別に……聞きたくなかつたけど』

そしてマジでツンデレで困る。

ツンデレって一般的には『いつもはツンで時々デレる』ことを指すらしいけど、厳密には『最初はツンで後はデレだけ』っていうのが正しい定義らしいよね。

俺の妹はどちらかといえば多分前者のツンデレだと思う。

……自分の妹がクーデレだとかツンデレだとか言ってる兄つてどうなんだろう。

『兄さんのシスコンぶりは今さらだからいいとして……兄さんの方はどう?』

当の本人からシスコン認定されてる時点でもうアウトだな。

でも俺の妹マジで可愛いんだもの。

だから仕方ないよね。

「そうだな……この前の日曜が入学式で今日は最初の週の水曜日だけど、色々あつたよ」

パンツが空から降ってきたり、隣人がゴミ部屋の住人だと判明したり、危うくネットゲ廃人になるところだったり、悪霊が憑いてると友達から告げられたり。

ホント毎日退屈しなさそうで喜ばしい限りだぜ。

『ん……そうなんだ』

「ああ、そうだよ」

『……………』

「……………」

互いに黙るが、気まずい感じはしない。

家族だから、という理由だけではないだろう。

沙那だから、安心して沈黙を過ごすことができるのだ。

とはいってもこのままずっと黙っているわけにはいかないので俺の方から口火を切る。

「今年は沙那も受験生だな」

『……そうだね』

「志望校はどうするんだ？」

少し凶々しい質問のような気もするが、別にいいだろう。

そもそも俺の妹は勉強の話で機嫌を悪くするほど成績が悪いわけでもない。

というか、自慢できるくらいには良かったはずだ。

『……兄さんと同じところ、かな』

「そうか……俺にできることあったら協力するから何でも言えよ」

使い古された提案だが、心からの本心だ。

去年俺が受験生だった時も妹には世話になった。

だから今度は俺が沙那の力になってやりたかった。

『……じゃあ、一つお願いがある』

「ん？ 何だ。遠慮しなくていいから言い給え」

どこかの銀髪お嬢様風美少女にはもっと遠慮を覚えてもらいたいけれど。

ふと思いつくがぶんぶん頭を振って白羽さんのことは頭から追いついた。

そして、妹から出たのは意外なお願いだった。

『今週の日曜日、お花見に行こう？』

『……はい？』

『兄さんのところの町から……電車で何駅か離れた町で……出店とか出るところがあるから』

『……はあ』

『私は一人でそっちに行くけど……兄さんは友達を連れてきていいよ。でも、男の人はダメ……だからね』

……なるほどね。

俺にはきつと女友達なんてできないだろうから二人で出店を楽しもうってことか。

でも、残念だったな妹よ。

今の俺には三人もの女子との交友関係があるのだよ。

しかも、全員お前並みの美少女だ。

突然の妹からの提案には驚いたが、丁度いい。

いつまでも俺が妹以外の女子とは縁のない可哀そうな男子だと思
うなよ。

ほくそ笑みながら妹と相談して待ち合わせの場所と時間を具体的に決め、それからしばらく雑談をした後、電話を切った。

第十三話

妹との電話を終えた後、学校で出された宿題でもやろうかと思った直後のこと。

——ピンポーン。

夜遅くの訪問。

時刻は午後八時前、寝るには早すぎるが、どこかに出かけるのも遅すぎる時間帯。

非常に中途半端な時刻だ。

誰が来たのか疑問に思いながらも持っていたシャーペン置いて玄関まで出ていく。

不審者の可能性もなくはないと考え、ひとまずドアスコープから外を覗き見ると、

「……天真さん？」

もうすっかり見慣れてしまったボサボサのブロンドの髪を持ち主がボケっとした顔でドアの前に立っていた。

放課後教室で別れを告げたつきり今日は会ってなかったが、こんな時間に何の用だろうか。

もしかして夜這い？

それにしてもまだ早いし、またネットゲのお誘いをするつもりだろうか。

とりあえず、考えるのもほどほどにドアを開けた。

「天真さん、こんばんは。どうしたの？」

「よう。佐倉ってもう夜飯食べた？」

「夜飯？ とつくに食べ終わってたけど……どうして？」

「そうか……いやさ、私お金なくてここ最近夜は何も食べてないんだよ。作るのも面倒くさいし。そこで都合のいい隣人がいることが判明したから、余り物でもいいから何か恵んでもらえないだろうかと思ってる」

ちよっと言ってる内容が酷すぎて何言ってるか分かんない。

突然何の話だと思ったただの乞食かよ。

夕食を恵んでもらうにしてももう少し早い時間に頼みに来るのがいいんじゃないだろうか。

「なあ、いいじゃないか。私と佐倉の仲でしょ？」

「……………」

ヘラヘラとした顔で言われると何だか無性に腹が立って……とまではないかないにしろ微妙な気持ちになってしまう。

まあ女子高生と一緒に時間を過ごせるわけだし、やぶさかではないが。

「……パスタでもいい？」

「お？ 悪いねえ……いつかこの恩は返すからさ」

そう言っつて無遠慮に家の中に侵入してきた天真さんは、くたびれたジャージ姿だった。

ただし、上半身だけ。

下半身はいつか見たように白い生肌がさらけ出され、もう少しでイケナイ部分が見えてしまいそうになっていた。

俺の部屋って彼女の中でどういう認識なんだろう。

まさか自分の部屋の一部ってことはないだろうな。

興奮よりも不安の方が勝ってしまう。

……言わないでおくのは気の毒だな。

目の毒でもあるし。

「あの、天真さん」

「んん？ 何？ 気が変わったつて言うのはなしだぞ。空腹が満たされるまで私はお前の部屋から意地でも動かないからな」

「いや、それはいいんだけどさ……」

むしろ動かないでそのまま居座ってくれてもいいですよ。

……やっぱ流石に迷惑かもしれないからやめてほしいな。

「もう少し、あったかい恰好をしたほうがいいと思うんだ」

「はあ？ 別に今日は寒くなんて……——ツツ!!」

遠回しに言っても気づいてもらえたようで、ジャージの裾部分を手で押さえて、すごい勢いで部屋から出ていった。

よかった。

またなんか物騒なものを取り出されるかもしれないと思って身構えていたが、睨みつけてきただけだった。

「うちこそうさまでした」

俺は手を合わせて感謝の念を口にした。

眼福眼福。

「……よし」

お代も頂いたことだし、ちゃんと仕事はしますか。

俺はキッチンへと足を運び、一人前のパスタをゆで始めた。

… … … … …

ゆであがったパスタを中くらいの大きさの皿に盛り付け、ソースをかける。

自家製のソースではなく、普通にスーパーで売ってる市販のソースだ。

今日の夕食に使ったものの余りをすべてぶっかけて割りばしで混ぜる。

ちなみに、使ったのはタラコのソースだ。

俺の場合、パスタを献立に選ぶときはタラコスパゲッティがレギュラーだから他のソースは基本的に買わない。

タラコは好き嫌いが結構分かれる食材だから天真さんの口に合うかどうかは少し不安だ。

とはいえ他に手軽に振舞える食材がないので仕方ない。

「ほい、完成っ」と

インスタントの味噌汁も作って、自室にある小さいテーブルにパスタと一緒に配膳した。

まあ女子高生一人なら、これぐらいあれば十分腹は膨れるだろう。

「やしてと……」

天真さんはさつき部屋から出ていったきり戻ってこない。

そんなに下半身を生で見られたのが恥ずかしかったのだろうか。

一応は俺を男子として意識してくれているということだし、喜ぶべきなのだろうが……それならそもそもズボン履けよつていう気持ちもある。

とにかく、早く食べてもらわないとせつかく作ったものが冷めてしまう。

俺は天真さんを呼びに彼女の部屋の玄関の前に行き、チャイムを押した。

ピンポーン。

反応はない。

ピピンポーン。

またしても反応はない。

ピピピピピピピ「やかましいわ!!」

ドアが外れてしまうのではないかと心配になるほどの勢いで天真さんが出てきた。

今度はちゃんと黒いハーフパンツをはいている。

正直この下りはすでに一度やっているので省略したい。

「天真さん。料理できたよ」

「……………」

そんなに眼光を鋭くしてもただ可愛いだけですよ。

誰かに威嚇するときにはアルカイックスマイルで物腰穏やかに相手の弱みをさりげなくほのめかすのがプロの脅し方だ。

最近それを当たり前のように行っているサイコパスが知り合いに出来たからよかったら紹介しまっせ。

それにしても拗ねた女の子というのはやはりいいものだ。

何というかね。羞恥の仕方というか、質が今までと少し違うんだよ

ね。

最初に天真さんが俺に対して羞恥の感情を抱いたときは「知らない人にパンツを見られた」ということに対する羞恥だった。

けど、今は「知り合いにパンツ見られた」ということに対する羞恥だ。

前者は一時的なものですぐに忘れることができる羞恥だが、後者は違う。

明確に異なるのは分かってもらえるだろう。

とはいってもこのままだとやりにくいのでここは強引にいかせてもらおうとする。

「天真さん」

「……………ナニ」

「天真さんはタラコスパゲッティは好き？」

「……………嫌いではない」

「ならよかった。すぐに食べられるからどうぞ召し上がれ」

何事もなかったかのように俺は笑みを浮かべながら催促する。

天真さんはそれからしばらく俺のことを睨んでいたが、やがてため息をついて玄関から出てきた。

どうやら気を静めてくれたようだ。

「……………明日以降の私の飯当番全部お前な」

それは流石に割が合いませんよ天真さん。

お代を全部パンツで支払ってくれるなら考えなくもないけど。

ふざけたことを考えながらも今の天真さんの言葉が冗談かどうか若干不安になりつつ、俺は天真さんの後に続いて自分の部屋に戻った。

… … …

「ふいー、食った食った」

至極ご満悦そうな顔を浮かべてお腹をさすっている少女。

客観的な評価を下せば、隣人の家に押し入ってタダ飯を食らって平

気な顔をしている少女。

「お味はどうでしたか、師匠」

「うむ。満足である」

「ありがたきお言葉でございます」

下半身を見られたことも飯を食っている間に頭から抜け落ちたのだろう。

険しい顔をするこももなく機嫌が悪いということとはなさそうだ。

綺麗に平らげられた食器を下げた後。

さらに天真さんの好感度を上げるためにあるものを用意して天真さんの目の前に置いた。

「はい、天真さん。食後のデザート」

「おつ。気が利いてるねえ。ありがたくいただきます」

こんなこともあるのかと今日の帰りに買っておいたブレインエンジェルのシュークリームに、温かいココアを添えて給仕する。

女子はスイーツに弱いという話は非常によく聞くし、月曜日に天真さんにパンツを見させてくれたお礼に差し入れしたときも普通に受け取ったので天真さんも例外ではないのだろう。

ココアに関してはコーヒーだと単純に好き嫌いが結構あるので常備してあるココアパウダーに活躍してもらった。

幸せそうな顔でシュークリームをほおばっている天真さんを見ると、俺の心配りはしつかり実を結んでいるらしい。

はむはむ、という擬音が似合いそうな食べ方。

女の子らしい小さい口でシュークリームの生地を啄むように食べる姿は非常に愛らしく微笑ましい。

食事をしている天真さんを眺めているだけでも一時間は過ぎせそうだ。

「ところで天真さん」

「…………ふあ〜」

そういえば、と心の中で思いついて口火を切ると、ちょうどシュークリームにかじりついて時だったようでもった声がかかる。

「今週の日曜日って何か予定ある?」

先ほど妹から提案された花見の件。

早速天真さんを誘ってみることにした。

休日の予定を女子に聞くななんてリア充じみたことを生まれて初めてしたわけだが、二人きりのデートに誘うわけでもないのでそれほど緊張はしなかった。

天真さんは少し考えるそぶりを見せて、

「……割とあるかな」

……あれ？

想定していたものとは異なる答えが返ってきた。

正直、家ではネットゲバばかりやってるらしい天真さんに休日の予定があるとは思っていなかった。

「ちなみに何の予定があるか聞いてもいい？」

高校に入って早速一皮むけたところを妹に見せて驚かせてやろうというプランにいきなりヒビが入る。

少し焦ってプライベートに踏み込んだ質問をしてしまったが、天真さんは特に気を悪くした様子もなく、ココアをすすりながらまったりと答えてくれた。

「日曜はイベントがあるんだよ」

「へえ、イベントか……どこでやるの？」

「……憩いの広場ってとこ」

『憩いの広場』……そんな場所この近くにあっただろうか。

聞き覚えのない地名に首を傾げるも、なかなか思い当たる場所の映像が浮かび上がらない。

まあ、これ以上追及するのも失礼か。

見るからにインドア派の天真さんが休日になんかわざわざ外出するとは意外だったが、別におかしいことではない。

まだヴィーネさんと白羽さんがいるし、明日二人も誘ってみよう。

それでダメだったら泣くしかない。

妹になぐさめてもらうことにする。

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「さつき妹と電話したら日曜日に花見があるから行こうって誘われて

さ。友達も一緒に連れてきていいって言うから天真さんも一緒にどうかなって」

「はあ……私はいいや。なんか人が多そうだし、ただの花見て何が楽しいのって感じだし。てか、それよりもお前にも妹いるんだな」

「うん。一つ下の妹がいるけど……その言い方だと天真さんにもいるんだ？」

「ああ。ちっこいのが一人。今頃はきつと実家でおねんねしてるよ」
手を上げてこのぐらい、と天真さんは背丈を示す。

大体座っている天真さんよりも少し高いぐらいだろうか。
確かにそれぐらいだったらちっこいな。

天真さんの妹ならさぞ可愛いことだろう。

ぜひ一目見てみたいものだ。

「そつか……分かった。残念だけど、もし気が変わったらいつでも言ってみて。ヴィーネさんとか白羽さんとかも明日誘ってみるし、賑やかで楽しくなると思うから」

「はいはい……」

予定もある上にそもそも花見に行くこと自体気が進まないなら仕方がない。

潔く諦めることにしよう。

でも人が多いのが嫌なのにイベントには参加するっていうのには違和感を感じるな。

まあいいけどさ。

部屋に置いてある時計をみると時刻は九時前。

天真さんの方を見るとシュークリームはすべてお腹の中に収まったようでココアをズズツとすすっている。

追い出すにはまだ早い時間だし、天真さんがよければもうしばらく駄弁っていたい。

そう思っていたが彼女はいつの間にか昨日俺もお世話になったノートパソコンを小テーブルの上に開いて無表情でカタカタと操作し始めていた。

そういや最初に部屋に入って来たとき何か小脇に抱えてたな。

思わず苦笑いが漏れてしまう。

天真さんらしいといえはそうなのだろうが……。

白羽さんとは違う意味でマイペースだ。

「……………」

白羽さんの顔が思い浮かんで、ふと悪霊の件が頭によぎった。

……そうだ。

ちよūdいいいし白羽さんのことについて聞いてみるか。

何か新しい情報が得られるかもしれない。

「そういえば、天真さんって白羽さんと昔から仲がいいんだよね？」

「ん……？ まあ、一応な……どうして？」

「白羽さんってどつかのお寺とか神社の出身だったりとかするのになって」

「はあ？」

天真さんはパソコンを操作する手も止めて、訳が分からないというような表情を浮かべた。

自分でもバカげた質問だと思うが、今日の白羽さんの話の件で辻褄が合うような説明が他に考えられないのだ。

白羽さんが由緒正しいお寺の娘だったりとか、あるいは白羽さんの見た目だどどつかの教会出身だったりとか。

教会だと幽霊というより悪魔祓いの方だし、国籍は多分日本だろうから、お寺か神社がしっくりくる。

そういった特別な家の生まれだったとしたら、白羽さんが変わった能力持ちだったとしても頷けるかもしれないのだ。

しかし、俺の予想を肯定するような返事は返ってこなかった。

「あいつは普通の一般家庭……とは言えないけど、ちよつと金持ちな家に産まれただけで私たちと同じ一介の庶民だぞ」

「じゃあ実は一家代々イタコの血を継ぐ家系だとか、有名な陰陽師の末裔だとか、そんな感じの事実は？」

「だからないって。何なんだよ一体……」

どうしても納得がいかずしつこく食いついてみるも、天真さんは面倒くさそうな顔をしてあしらうばかり。

……うーむ。

でも絶対天真さんは何か知ってると思うんだよな。

ここ最近になって白羽さんが霊能力を持ち始めたとか、怪しい新興宗教とかに引つかかったみたいなき可能性もあるかもしれないけど、どうしてもパンツ事件のことがひっかかる。

パンツが急に空中に現れて降ってきた、という状況はシニールで可愛らしいけれど。

パンツを斧とか刀とか生首とかにとつかえたら相当なホラーだし。しかもそのパンツはあくまで天真さんのものということになってる。

白羽さんではなく、天真さんの。

つまり、白羽さんだけでなく天真さんもただものじゃないと俺は見込んでいるのだ。

「……………」

「……………」

ジーンと天真さんを見つめるが、彼女はパソコンの画面から目を離さない。

俺の中では好奇心と思いやりの心がせめぎ合っていた。

パンツ事件の真相はなんなのか。

天真さんは何か隠していることがあるんじゃないか。

白羽さんと天真さんは一体何者なのか。

もう一つ、好奇心以外に疑問解決をせかしている要素があるとすれば、それは不安だった。

仲がいいとも悪いとも言えない人に悪霊が憑いてるなんて言われたら普通不安になる。

しかし、このままだと埒が明かないのもまた自明なことだった。

「…………ごめん、変なこと聞いた。今のは忘れて」

「…………別に」

仕方ないのでここは一旦引くことにしよう。

これ以上聞くのは、天真さんにも白羽さんにも悪い。

不安を解消できないのは辛い、とりあえず二人を信じることにす

るべきだ。

俺の質問で不信感を覚えたのか、天真さんも心なしかさつきからムスツとした感じだし。

やっぱり白羽さんのことを突つついたのは失敗だったかもしれない。

今の俺にとって一番嫌なことは、せつかく仲良くなりかけている天真さんや白羽さんを傷つけてしまうこと。

ある程度信頼関係を積んだ後なら多少失敗しても容易に仲直りできるが、現時点だとそうはいくまい。

最悪、男子と女子との関係でありがちな自然消滅パターンに入ってしまう恐れもある。

女子の心は繊細であるということをやめゆめ忘れななかれ。

妹にも似たようなことを言われたことがあるだろう。

ひとまず、一回頭を冷やすことにしよう。

今日は色々ありすぎて、なんだか頭の働किが鈍い感じがする。

「天真さん」

「なに」

「……えっと、俺シャワー浴びたいんだけど、天真さんはどうする?」

「……まだしばらくはここでゲームしてく」

「分かった。喉が渴いたら冷蔵庫に牛乳とか入ってるから勝手に飲んでいいよ」

「ん、そうする」

……顔つきが不機嫌な割には帰らないんだな。

違和感を感じたが、激おこぷんぷんというわけではなさそうだし、少し安心した。

着替えやタオルは脱衣所に置いてある。

妹以外の女子が家にいる状態で全裸になるというのなかなか新鮮だが、ちよつと今はそれを気にしている場合ではない。

さつきからやけに頭が熱いし、ポーつとしてる感じがある。

かゆうま状態と言ってもいい。

元ネタは友達から聞いただけで使い方あってんのかは知らんけど。

シャワー浴び終わったら天真さんには申し訳ないけど、さっさと
ベッドに入って寝てしまおう。

俺は風邪をひいたときのような悪寒とともに浴室へと向った。

第十四話

「……そろそろいいかな」

部屋の主の意識が完全になくなったのをキッチンと確認して、パソコンを閉じる。

ゲームの続きをしたいのが本音だけど、そうも言っていられない。

「こいつ、運がいいんだか悪いんだか……」

私たちに会えたのは不幸中の幸いというべきか。

もはや何かしらの運命ではないかと思うくらいには偶然が重なった結果だ。

「ちやつちやと終わらせてゲーム三昧と行きますか」
そう。

本来であれば私は今の時間、いつも通り自分の部屋に引きこもってネットゲをしているはずだった。

というか、さつきまで実際に自分の部屋の床で寝っ転がりながらやっていた。

そんな私の尊い娯楽の時間を奪ったのは一本の電話。

最近は一人の悪魔の友達からしかかかってこない携帯電話に、珍しいやつから着信があった。

何事か、と思いながらも仕方なく出たところ、いきなり変な仕事を押し付けられたのだ。

何でも最近知り合った同じクラスの佐倉に悪霊が憑いてるから除霊を手伝ってほしいらしい。

悪魔祓いだったらともかく、天使にとって除霊は専門外な気がするけど、やろうと思えば一応できる。

面倒くさかったので断ることも考えたが、一応は一晩一緒にネットゲをした仲だし、すぐ隣に住んでる人間が悪霊に呪い殺されてしまうとこの後味というか、気分が悪い。

そういうわけで私は依頼を受けることにした。

作戦としては非常に簡単。

佐倉が寝た時間を見計らって幽霊を二人がかりで退治。除霊道具などは向こうが既に準備しているらしい。

私の仕事は佐倉の用心棒を一時的に務めることと、リンチに参加することだ。

「……とりあえずラファイに電話だな」

携帯をポケットから取り出して私の部屋に控えているもう一人のリンチ要員に電話を掛ける。

呼び出し音が鳴ってすぐに応答があった。

『もしもし、ガヴちゃんですか？』

「ああ。佐倉はもう寝たからいつでも始められるぞ」

『分かりました。では早速佐倉君をこちらの部屋に移動させましょう』

「私一人じゃ無理だからお前も手伝ってくれ。鍵は開けとくから」

こっちの準備が整ったことを報告し、電話を切る。

玄関の鍵が開いていることを確認して待っていると、やがてドアが静かに開いた。

「こんばんは、ガヴちゃん」

「おつす。もう除霊道具の準備はできたのか？」

「はい。後は幽霊さんが部屋のどこにいるか探し出すだけです」

「よし。早く見つけてぶちのめそう」

除霊している最中に佐倉が目を醒ますといけないので、まずは佐倉をラファイと二人で私の部屋に運んだ。

途中意識が戻りかけたときは私の睡眠魔法（物理）で何とかし、運搬を完了。

その後佐倉の部屋の物色を開始した。

物色を始めて十分もしないうちに、標的を発見した。

場所はベッドの下。

ベッドと床の隙間にピツタリ収まるようにそいつはいた。

ベッドの下を覗き込んだら普通に目が合ったので割とマジでビビった。

「おいおい………こんなのどつから拾ってきたんだよ佐倉の奴」

「私もここまで強い霊は見たことがないですね……もう少し気付くのが遅かったら本当に危なかったかもしれないですね」

佐倉と初めに顔を合わせた段階でラファイは気づいたらしいが、最初はそんなに警戒していなかったらしい。

昨日今日になって急に幽霊の気配が強くなったため早めに対処することに決めたそうだ。

「何にせよ、私たちに見つかったのが運の尽き。あの世で悔い改めるんだな」

「はい。どういった経緯で悪霊になるに至ったのかは知るすべもありませんが、放っておくことはできません」

ベッドの下から引きずり出すと、幽霊はうめき声をあげてこちらを恨みがましい目で睨みつける。

何だか可愛そうな気もするが、ここまで怨念が深い幽霊はもうどうしようもない。

私たちにできるせめてもの救いは楽に成仏させてあげることだけだ。

隣にいるラファイと顔を合わせ、頷き合う。

ラファイから除霊道具を受け取り、私たちは天使としての仕事を始めた。

… … … … …

無事に除霊が終わり、佐倉を私の部屋から運び戻した後。

戸締りや電気を消したかどうかなどを確認して佐倉の部屋を後にした。

今は私の部屋の玄関前だ。

ちなみに佐倉の部屋の鍵は、ラファイが針金らしきものでどうにかした。

「お前、こっちに来てから段々本性を表すのが露骨になってきたよな」「なんのことですか？」

「……いや」

今回の件も然り、一応は天使っぽいこともやっているみたいだが……。

天界で一緒に過ごしていた時はもっと控えめだった気がする。今までずっと猫をかぶってきたのだろう。

監視の目が消えたから抑えがなくなつたということか。

ある意味私と同じでラファイエルも下界に降りてきて変わったと言えるのかもしれない。

単純にこれが素なのかもしれないけど。

「それにしても何でラファイは佐倉に幽霊が憑りついていることに気付いて、私は気付かなかつたんだ？」

電話で依頼を受けたときからずっと気になっていたことだ。

天使は邪悪なものの気配に敏感なはずだが、隣に住んでるにも関わらず私には佐倉に憑りついている幽霊の存在に気付けなかつた。

私が首を傾げながら言うと、目の前にいるラファイも首をふって分からないという意味表示をした。

「そうなんですよね……私もあの優秀なガヴちゃんが気づかないわけがないと思って、だからこそわざわざ佐倉君を放課後連れまわして色々確かめたんですが」

「まさかこっちに来てから墮落しすぎたせいで天使としての力が衰えてきてるとか……」

「……ないとは言い切れませんね」

「ええ……マジかよ」

だとしたら普通にショックだ。

確かにさつき天使の姿になって除霊を行ったときも、頭の上の天使の輪っかがドス黒く変色していたりしていた。

適当に拭いたら元の輝きを取り戻したから多分大丈夫だろうと安心していたけど。

やっぱり結構ヤバイ状態なんだろうか。

「一日一回でも天使らしいことをしてみたらどうですか？」

「言われてやるぐらいだったらとつくにやっってるって……それに私は働いたら負けだと思ってるから」

この名言を生み出した人は天才だと思う。

この言葉ほど現代人の仕事づくめの生活を揶揄したフレーズはあ
るまい。

世間一般の良識として通用していない現状が非常に残念だ。

「ふふ……ガヴちゃんのお姉さんが今の発言を耳にしたらどうお思い
になられるのでしょうか？」

「ゼルエル姉さんの話を出すのはやめてくれ」

姉さんに今の私の生活態度がバレたらどうなるかなんて火を見る
よりも明らか。

あの自分にも他人にも厳しい姉が見過ごすとはい到底思えない。

下界に降りて以来会ってないが、きつとあのクソ真面目な性格は健
在だろう。

今の状態で会うのは絶対に避けなければならない。

「……そういえば、佐倉がお前のこと怪しがってたぞ」

姉さんのことから話をそらすために話題を探して、ふと思いつく。

ラファイが言うには、幽霊が憑いていることは佐倉には打ち明けたら
いい。

急にラファイの出自を気にするような質問をしてきたのは、ラファイの
昔からの友人の私なら何か知っていると聞いたからだろう。

とりあえず誤魔化しておいたが、あの様子だとまだ疑っているに違
いない。

あまり深く追及されるとボロを出してしまうかもしれないので不
機嫌な様子を演じたら素直に引き下がってくれたが。

「無理ありません。いきなりあんなことを言われて信じる方がおか
しいですし」

「ま、人間界じゃ余りないことだからな」

「思ったよりもすんなり事が運んだので、学校で説明したのは余計な
ことだったかもしれませんが……方が一のこととも考えるとあらかじ
め説明しておいた方がよかったのは間違いありませんから」

「私も適当にフオローしておくよ」

「恩に着ますね、ガヴちゃん。……それと、これなんですけど」

ラファイが取り出したのはさつき悪霊を退治した後、佐倉のベッドの下から出てきたものだ。

一見、子供が遊ぶのに使うような普通の人形に見えるが……。

「恐らくですが、これが悪霊の憑代となっていたんでしよう」

「まあ、いいものではないのは確かだろうな。天界に送り付けとけば大丈夫だろ」

そうなる今回を天界側に話さざるを得なくなるが。

本来、見習いの天使である私たちが人間界で特別な力を使用するのはご法度だ。

とはいえ、今回は相手が相手だったし、天界も融通が利かないわけじゃない。

除霊の一つや二つ勝手にしたって何ら問題ないだろう。

「そうですね……では、私が預からせていただきます」

ラファイが私に向って微笑みながらそう言った。

今いる玄関前の通路は蛍光灯の明かりだけが光源だが、仄暗さの中でもラファイの顔ははつきりと目に見える。

最近になって腹黒さが露呈してきたラファイだけど、私や他の親しい人に向けてくれるこの顔は今の性根が腐りきった私でも嫌いじゃない。

幼かったときからずっと見てきたものだ。

(……この笑顔は全然変わらないな)

何となく感傷的な気分になり、ラファイの顔を見つめてしまう。

駄天しきったせいでまともな天使らしい感情はとつくになくなってしまったと思っていたが、どうもそういうわけではないようだ。

「……どうかしましたか、ガヴちゃん？」

誰と接しているときでも崩れることがないこいつの笑顔。

長く付き合っていて自然と分かったことだが、ラファイの笑顔は何種類もある。

嫌いな奴に会ったときは顔の一部分が引くつくし、逆に好きな奴に会ったときは何がそんなに嬉しいのか分からないほどにんまりと頬を緩める。

普段浮かべている笑顔がデフォルトだとしたらそこからまるで百面相をするかのように笑顔が変化するのだ。

パツと見はいつも愛想笑いを浮かべている澄ました奴と思われがちだが、その実ラフィは人並み以上に感情を表に出す天使だということとは、それなりに長い期間付き合わないと気づけない。

「何でもない。それより、私は早く自分の部屋に引きこもってネットゲの続きをしないといけないから。また明日な」

「はい。改めて今日はありがとうございました」

今日はもう何も考えずに脳死状態でネットゲをしようしようしよう。

私はひらひらと手を振ってラフィに別れを告げ、部屋に引きこもった。

：
：
：
：
：

木曜日、というのはどうも中途半端な曜日だ。

少なくとも学生の身分である俺にはそう思える。

月曜日は週の初めということと土日休んだし今週もまた頑張ろうって気になれる。

火曜日は休日の弛みが抜けてきて授業に身が入ってくる頃で割と頑張れる。

水曜日はまあ週の真ん中だし、あと半分頑張ろうってなる。

金曜日はこの日を切り抜ければ土日が待っている、と気合いが入る。

がんばれないのは木曜日だけだ。

休日が明けて四日目で疲れもたまっており、しかもまだ一日平日が残っているというどうしようもない憂鬱さに襲われるのは俺だけではないと思う。

しかし、今日に限ってはそうだったことはなかった。

朝起きたときから非常に目が冴え、頭も冴えている気がする。

要するにすこぶる調子がいい。

昨日の夜、天真さんに夕食を振舞った後ぐらいから急に体調が悪く

なり、シャワーを浴びた後、結局天真さんが部屋にいた状態のまま俺は眠りに落ちてしまった。

いくら友達、いくら女子だとは言え流石に抵抗があつたのだが、それすらもどうでもよくなるほどに早く体を休めたかったのだ。

そもそも既に天真さんの部屋で一晩過ごしたのだし今さらだろう。

ちなみに起きた後天真さんの姿はなかった。

にもかかわらず玄関の鍵はちゃんとかかっていた。

鍵を渡すようなこともしてないし、合鍵も持つてるわけがない。

非常に不可思議なことだが、まあ後で天真さんに直接聞けばいい。

……そして何より驚いたのは。

今まで毎日のように見ていた例の悪夢(?)を今日は見なかったことだ。

悪夢を見なくなった原因として思い当たるのは当然昨日の白羽さんの件。

白羽さんに何か実際にしてもらったわけではないので、恐らく渡されたお守りのおかげだろう。

体調がいつもより良くなつたうえに、変な夢も見なくなった。

偶然と考えるには出来過ぎている気がする。

つまり、彼女はインチキ靈感少女ではなかったのだ。

そうなると俺には本当に悪霊が憑いていたということになるが、考えても怖いだけなのでとりあえずそれは置いておく。

正直白羽さんの正体は気になったままだが、この際本気で彼女のことを信じてみよう。

それは昨日彼女が言っていたことも含めてだし、彼女の人柄とかそういういったものも含めてだ。

お守りは無償でくれた物だし、本当に効果があるっぽいし。

変に疑っては彼女も気分が悪いに違いない。

それと、余計な詮索もすまい。

今の状況から考えて、彼女が何かしら特別な環境にいたことはほとんど確実だ。

もちろん、だからと言って変に気を遣うことはせず今まで通り接す

るのが賢明だろう。

「……一応今日のうちに真面目に悪霊の話聞いておくか」
客観的に見たら馬鹿馬鹿しいこと甚だしいが、俺は白羽さんのことを信じよう。

現金な気もするが、あつさり信じたわけでもないし、とりあえずは様子を見るようなものだ。

「まあ実は騙されてた、とかいう話だったらその時はその時ってことで」

白羽さんのことはもういいだろう。

一言でまとめれば現状維持ってことだ。

今までと何も変わらない。

現在、時刻は七時半。

朝食は食べ終わり、学校へ持つてく授業道具とかも既に準備し終えたところだ。

「……ん、いつも通りのパツとしない顔だ」

制服を着用して、鏡の前で身だしなみを確認する。

漫画の主人公みたく、容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群と並んでいればよかったのだが、残念ながら俺が持っているのは成績だけだ。

まあ特段ブサイクというわけでもないし、普通に見える顔ではあるから満足だけどね。

もっとイケメンだったら……と思うのは年頃の男子高校生だし仕方ない。

運動神経に関しては平均よりも少し上、というところだろうか。良くもないし、悪くもない。

特におかしいところもなかったので鏡の前から離れる。

念のためカバンの中身をもう一度確認し玄関から外に出た。

天気は昨日と同じくらい晴れている。

絶好の登校日和と言えよう。

「……ん？」

何かがポケットの中で振動した。

取り出してみると、使い慣れていないスマートフォンに電話がかかってきている。

電話の相手は……

「うはッ！ ヴィーネさんじゃん」

月乃瀬という文字列を視認した瞬間指が高速で動き、電話に出る。やっぱり白羽さんのお守りはすごい。

朝っぱらからヴィーネさんと電話できるとか。

悪霊退散だけでなく運氣上昇の効果まであるようだ。

「もしもし、ヴィーネさん？」

『あ、おはよう佐倉君。朝の忙しい時間に悪いんだけど今大丈夫？』

じんわりと温かく耳に沁みとおる声が、電話越しに聞こえてくる。

もう声だけでもヴィーネさんという人間の懐の深さが感じ取れてしまえるほどだ。

「おはよう。全然大丈夫だよ」

『よかった！ 実は頼みたいことがあるんだけど……朝登校するついでにガヴが起きてるか確認してきてくれないかしら？』

控えめにヴィーネさんがお願いをする。

どうやら天真さんが今日もちゃんと学校に登校するか心配なようだ。

俺はヴィーネさんのお願いだからと反射的に了承しようとしたが、よく考えたら起きてるか確認する方法がない。

正確には、起きていない場合にそれを起こす方法がない。

チャイムを連打すればワンチャン起きるかもしれないが、眠りが深かったら起きない可能性もある。

まあ、まずは起きてるか確かめるか。

俺はヴィーネさんにちよつと待つように言って、天真さん家のチャイムを押した。

ピンポーン。

返事はない。

ピピンポーン。

やはりというか、返事はない。

ピピピピピピピッピピピピピピンポーン。

……………。

「もしもしヴィーネさん？ 天真さんなんだけど、どうも起きてないっぽいです」

『ハア……やっぱり。ごめんね佐倉君。ガヴのことは私に任せて先に学校に行つて。遅れちゃうといけないから』

「いや、でも……」

ヴィーネさんも天真さんを起こすことはできないんじや……と喉元まで来てとどまる。

そういえば昨日の朝。

天真さんと仲良く寝過ごしかけていたのを起こしに来てくれたのはヴィーネさんだが、彼女はどうやって天真さんの部屋に入ったのだろうか。

天真さんの部屋に入った後、天真さんがカギをかける音を聞いた覚えは確かにあるのだが。

「ねえヴィーネさん、一つ聞いてもいい？」

『なあに？』

「昨日の朝、俺と天真さんを迎えに来たときって、玄関に鍵掛かってたよね？」

『ええ。でも私ガヴの家の合鍵もってるから大丈夫だったわよ』

「ああ……合鍵か。天真さんから渡されたんだね」

恐らく毎朝起こしに来てもらうために天真さんがヴィーネさんに渡しておいたのだろう。

あるいはヴィーネさんの方がいつでも様子を見に来れるように合

鍵を渡すように言ったかだな。

いずれにしても、天真さんの意地でも朝は早起きしないという意味を感じさせるのは流石だ。

いくら何でも天真さんは甘えすぎだと思うし、ヴィーネさんもヴィーネさんで甘やかしすぎだと思うけど。

しかし、ヴィーネさんの次の言葉でそのどちらでもないことが判明した。

『いいえ？ 私が勝手に業者さんに頼んで作ってもらったの。もう佐倉君の分も作ってあるから今日にでも渡すわ』

「いやいやいやいや」

『それにしても人間の技術力ってすごいわよね。一昨日業者さんに注文したら三十分もしないうちに作り終わっちゃうんだもの。私びつくりしちゃった』

「ちよ、待って。ヴィーネさんストップ」

『……？ どうしたの佐倉君？ あ、お金のこと心配してるのね。安心して。鍵を作るのにかかったお金は全部私が払うから』

「いや、そうじゃなくて。天真さんに内緒で合鍵を作ったの？」

『そうだけど……やっぱり不味かったかしら？』

「まあ、いって言うかなんというか……」

ヴィーネさんの仰天行動に内心恐々としながらも言葉を絞り出す。

部屋主の了承を得ずに合鍵を作製。

マジレスするとヴィーネさんのやってることは普通に犯罪だ。

でも責めるつもりにはなれない。

だって、俺が問い詰めた途端に不安そうな声音になったヴィーネさんを責めるなんてフェルマーの最終定理の証明よりも難しいもの。

まあ実際に証明見たことないから良く分からないけど。

歴代の数学者に失礼なことを考えながらも、俺はヴィーネさんと会話を続ける。

「えっと、現時点では天真さんは合鍵の存在を知ってるの？」

『どうかしら……もしかしたら気付いてないかも』

やっぱりか……。

今回の犯行はヴィーネさんがやったからまだ笑って済ませることが出来るが、ヴィーネさんじゃなかったら全然笑えないことだ。

合鍵というのは言わずもがな便利なものだが、デメリットが当然ある。

単純に住居への侵入手段を増やすことを意味するし、失くしたりしたら大変だ。

ヴィーネさんはしつかりものだし、合鍵を失くすなんてことは滅多になさそうだが、それでもうっかりということはある。

せめて本人には合鍵の存在を知らせておかないとまずいだろう。

つーか、そもそも本人にばれずに合鍵を作るっていうのもなかなか難易度が高いはずなんだけど……業者さんに身分証明とか色々提示させられなかったのだろうか。

ヴィーネさんは可愛いし、業者の人も疑わなかったのかもしれない。

『も、もしかして私すぐいけないうことしちゃった？ 逮捕されたりとか……』

俺が会話の途中で黙ったのをどう取ったのか、一層不安を含んだ声でヴィーネさんが言う。

「ああ、ごめん。別に問題ないとは思うよ。ただ、天真さんには一応ちゃんと話しておいた方がいいと思う。他人が自分の知らないところで合鍵を作って持ち歩いてるって結構なホラーだから……」

『分かったわ……ありがとう佐倉君。私、まだにんげ……世間の常識がいまいち分からなくて。これからも私のしたことでおかしなところがあつたら全部教えて欲しいわ』

そーいやヴィーネさんも名前だけ見たら純日本人ではない。

もしかしたら高校に入るまで海外とかで生活していたんだろうか。

だとしたら今回のようなことが起こったのも納得……できないけれど、まあいいか。

ヴィーネさんのお茶目な一面が見れたってことで。

「話が逸れたけど、じゃあ今からヴィーネさんもこっちに来るんだよね?」

『ええ。ガヴを起こさないとだから』

「オツケー。それなら俺も待つてる」

『え……どうして?』

「お前はさっさと一人で登校しろ」という意味で言ったのではもちろんないだろう。

でもそんなふうにしてと聞かれると答えづらい。

「ヴィーネさんと天真さんと一緒に登校したいんだけど……ダメか?」

女子に言うとなると結構恥ずい。

聞きようによつては下心があると思われそうだし。

まあ実際に下心はあるんだけども。

ただ、下心もそうだが一人登校するより多人数で一緒に登校したほうが純粹に楽しそうだ。

「せっかく徒歩で通学してるわけだし。

それに一人だけ早く学校に行つてもすることがない。

『ううん、全然ダメなんかじゃないわ。じゃあ急いで向うから少し待っててね』

「危ないからゆっくりでいいよ。気を付けてね」

そのやり取りを最後に、電話を切った。

「よし。後はヴィーネさんが来るまで部屋で待機だな」

そういうわけで俺は足を翻し、自分の部屋に戻った。

第十五話

ヴィーネさんと合流し、天真さんを起こした後。

俺たち三人は春の陽気の中仲良く通学路を歩いていた。

ちなみに天真さんは予想通り俺たちが部屋に押し入るまで床に転がって惰眠を貪っていた。

床で寝ると起きたときに結構しんどいと思うんだけど、別に平気そうなところをみると既に慣れてしまったのだろう。

いずれにせよ今日も天真さんは相変わらずだな。

ちよつと変わったことがあるとすれば、なぜか会った直後に体に異変はないか聞かれたことか。

もしかしたら昨日の夜、俺の体調不良に気付いたのかもしれない。

今はむしろ体調がいいので心配ないと告げ、ついでに心配してくれてありがとうとお礼も言っておいた。

彼女は今眠気でフラフラとしつつも、ヴィーネさんに支えられながら歩いていた。

大変仲がよろしくて結構だと思います。

「ヴィーネさんやヴィーネさんや」

「なあに佐倉君？」

「ヴィーネさんは今週末の予定何かある？」

いつ切り出そうか心待ちにしていたことを尋ねる。

もちろん日曜日の花見の件だ。

尋ね方が昨日の天真さんのときと同じでバリエーションがないのは俺が童貞で女性の誘い方を知らないせいでは断じてない。

「んー……特にはないわね。あ、でも駅近くのショッピングモールでお洋服のセールがあるからガヴと一緒にいこうって思ってたわ」

「ええ……やだよメンドクサイ。一人で行けばいいじゃん。私、今週末は家でずっとゲームする予定だから」

「あれ、天真さんは何かのイベントがあるんじゃないの？」

昨日天真さんを誘ったときは、「憩いの広場」とやらでイベントがあるからと断られたが……。

俺が疑問の声を上げると、天真さんが俺のことを睨む。
なんか気に障るようなこと言っちゃった？

……いや、違う。

これ多分なにか誤魔化そうとしてるときの反応だ。

「あ、ああ、そうそう。週末は楽しみにしてるイベントがあつたんだよ。だからごめんヴィーネ。私のことはいいから一人で買い物楽しんできなよ」

「ガヴが自主的に外出なんて怪しいわね……まあ仕方ないか。それで、佐倉君は何かあるの？」

ヴィーネさんが聞いてくるので天真さんのことは一旦置いておく。

俺は隣町で花見があることと、一緒に行くメンバーを募集中であることを説明した。

すると、ヴィーネさんは目を輝かせ、

「お花見!! もちろん行くわ!!」

と、思った以上の食いつきを見せた。

驚いて少し後ずさつてしまうほどの剣幕だ。

ヴィーネさんは俺が微妙に引いてることに気付いたのか、若干顔を赤らめて、

「あ、ごめんなさい……私お花見なんて行ったことがないから、ちよつと憧れてたの」

「そうなんだ……それならちようどよかつたかな」

「ええ、ありがとう佐倉君。そもそも私、桜の花もそんなに見たことがないし……すつごく楽しみだわ」

ヴィーネさんの発言に別の意味で驚く。

桜をそんなに見たことがないって。

日本に生活していればそこら辺の道端とか、学校とかの校庭に咲いてるのを春に何度も見ることが出来るほどにはありふれた植物のはずだが。

この近くはあんまり咲き乱れている場所もないし、今までも似たような場所に住んでいたのかもしれないな。

ともかく、一人はメンバーを確保できたので安心した。

それにこの様子だと本当に心の底から俺の誘いを喜んでくれているのだろう。

思わず頬が緩んでしまう。

「花見なんて何が楽しいんだか……」

ヴィーネさんの気分の高揚具合を見て天真さんはボソリと呟く。

さつきも少し思ったが、天真さんが参加するつもりイベントに見当がついた気がする。

「ここはちよつと餌を垂らしてみるか。」

「確かに天真さんは花より団子つてタイプに見えるよね」

「……そうかもな」

「ところでさ、もしかして天真さんも花見には行ったことない？」

「……ないな。昔の純粹だったころの私ならどうだったか知らんが、今は全く興味もない」

「そっか……そういうえば妹が言ってただけど、今度の花見は出店がたくさんあるらしいよ」

一概に花見といっても公式なものとそうではないものがある。

今回妹が誘ったのは前者。

公式な花見であれば出店は結構な頻度であるし、何らかの催し物があるときもある。

ただし、人が集中しやすいので団体であれば朝早くから場所取りをする必要が生じるし、混雑が嫌いな人にとってはのんびり楽しめないというデメリットもあるが。

俺たちの場合は朝から晩まで楽しむ、というわけではないので多分大丈夫だろう。

花見ガチ勢と矛を交えることにはなるまい。

さて、俺が注目したのは出店の屋台。

これを餌に天真さんを釣ることにした。

妹から詳しい話も聞いたし、多分いけるはずだ。

「……出店？」

ほんの少しだけ好奇心が沸いたように天真さんが顔をこちらに向ける。

その脇に並んで歩いているヴィーネさんも興味をひかれたように俺の方を伺っていた。

もしかしたら二人とも花見に限らず祭りとかの伝統行事に疎いところがあるのかもしれないし、出店についてもちゃんと説明しておくべきだろう。

俺の腕の見せ所だな。

「出店はいいよ。花見みたいなお祭り行事の最大の醍醐味と言ってもいい。道端の両脇に並んだ数えきれないほどの屋台を冷かしながら歩いてもよし。出店の屋台で買った食べ物を手に、食べ歩きをしながら満開の桜を鑑賞するもよし。そして、出店の最大の特徴は何といってもその種類の豊富さ。食べ物で言えば焼きそばやリンゴ飴、かき氷に綿あめといったオーソドックスな品目に加えて、土地の名産を使った料理が出されることもある。妹の話ではケバブや牛ステーキの串焼きの出店なんて珍しいものも今度の花見ではあるみたいだね。味は去年も友達といった俺の妹お墨付き。流石その道で稼いでるだけあって、どの屋台も見掛け倒しじゃない美味しさを提供してくれるらしいよ」

実際に出店する屋台は食い物専門ばかりではない。

他にも的当てやらくじ引きやら色々ある。

だが、天真さんは花より団子、色気より食い気、名誉よりも現金、という句が似合う人だし、今は食材推しで出店の魅力を語ろう。

果たしてその効果たるや、いかなるものか。

俺はチラつと二人の方を見た。

天真さんもヴィーネさんも、どうやら俺の語りに完全に聞き入っている様子だ。

二人とも身をこちらに乗り出している。

「……ハッ！ い、いやいや。でもお金がかかるんでしょ？ 私課金しすぎたせいで金欠状態だし」

俺の視線を受けて、微妙に俺の狙いに気付いたのか天真さんが首を振って視線を逸らす。

まあ確かに独り暮らしの高校生にとっては千円二千円の出費も結

構な痛手になるだろう。

だが、それももちろん想定内だ。

「もし天真さんも一緒に来てくれるんだったら俺の小遣いで二千円分くらいおごって上げてもいいけど……」

「マジ!？」

「佐倉君、流石にそれは……」

「大丈夫だよ。一応は今まで手伝いとかして自分で稼いだ小遣いから予算を引っ張ってくるつもりだし。それに、どちらにしろ天真さんはいけないんだからもしもの話だよ」

「いやー、残念だなー」とわざとらしい声を上げる。

おごってあげてもいいのは本当だし、仕送りの金から金を出すなんて筋違いなこともするつもりもない。

さあ、そろそろ釣れるんじゃないかな……？

「ぐ……お前って結構やり方が汚いんだな」

君のお友達に比べたら私なんかまだまだですよ。

「というか、ガヴは何のイベントに参加するつもりなのよ？」

「……………」

ヴィーネさんも段々気になってきたのか、天真さんに質問をぶつける。

まあ、十中八九ネットゲのイベントだろう。

一昨日彼女からゲーマーとしての手解きを受けているときに、ゲーム内でのイベントの説明もなされた。

定期的開催される、それこそゲーム内でのお祭りのようなもので自分も今では常連メンバーの一員だ、と胸を張って言われ、この子やっぱりあまり乳ないなって感想を抱いたのを覚えている。

もちろん女の子の魅力は乳だけじゃ決まらないから他意はないんだけどね。

王侯将相いづくんぞ乳あらんやって昔の中国の人も言ってたし。

そして、天真さんはついに降参したようだ。

「はあ……仕方ないな。なんでそこまでして私を誘いたいのかわからないけど……背に腹は代えられん。約束はちゃんと守れよ佐倉」

「もちろん」

「え？ え？」

俺が天真さんの『イベント』が何かに気付いたように、天真さんも俺の意図に気付いたようだ。

結果としてヴィーネさんだけが置いてけぼりな形となってしまったが、彼女もすぐに理解できるだろう。

花見メンバー二人目確保、つと。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

昼休み、俺は訳あって校内中を歩き回っていた。

というのもこないだの新入生テストの採点が早くも終わったらしく、昨日遅刻したために受けられなかった英語の授業で俺を除いて答案が返却されたらしい。

それで答案を直接取りに職員室に行ったのだが英語の教師が不在だったのだ。

他の教師のヒントを頼りに何とか英語の担任を発見しようと奮闘していたのだが……。

「……………」

屋上に続く階段前。

移動の途中で仕方なく通るぐらいしか用のない場所。

近くは特別教室ばかりで人の気配も薄い。

そんなところを俺もたまたま通りかかった。

その結果、見てはいけないものを見てしまったのだ。

別に誰かが着替えをしていたとか、エアギターを弾いていたりだとか、あるいは校内の人間の命を奪うような結界を設置していたとかいう話ではない。

純粹に、単純に、偶然に、ただただ哀しいものを見てしまっただけ。

つまるところ、同じクラスの女子が階段に座って独り、無表情で昼食を食べているのを目にしてしまった。

「……………」

(うわあ……めっちゃこっち見てくるよ。どうすつかなこれ……)
しかも例の赤髪の子じゃん。

なんか悪役になりきれてない悪役みたいな名前の。

廊下から階段前のスペースに出て、ぼったり彼女と出くわした。

そのまま何も見なかったことにしてスルーすればよかったものを。

余りにもあんまりな光景だったから足をつい止めてしまった。

というか、今からでも遅くはないか。

ちよつと時が止まったことにしてこのまま通らせてもらおう。

そう思つて足を動かさそうとしたところ、

「ちよつとあなた……」

作戦変更。

後方へ全速力で駆け抜けよう。

来た道に戻ることになるが、昼休みはまだ始まったばかりだ。

急ぎの用事でもないし、問題ない。

彼女の口から音が出た瞬間にそう判断を下した俺は、脳から脚に命

令を伝え、身を翻す。

彼女との距離は空いてるし、男子である俺には追いつけまい。

人もいないので走って誰かにぶつかる可能性も薄いだろう。

というわけでさようなら胡桃沢さん。

また教室で会いましょう。

「あ!! こら、待ちなさい!!」

「大丈夫! このことは誰にも言わないから!」

がんばれ胡桃沢さん。

この学校の生徒はパンツ野郎の俺にも優しくしてくれる人が沢山いるから。

きつと勇気を出せばだれか一人ぐらい友達になつてくれるよ。

なぜか逃げなければならぬという焦燥にかられた俺は、そのまま

彼女のもとを去った。

……というわけにはいかなかった。

「待ちなさいってば!!」

「うっそ?」

最初彼女と俺の間にあつた距離のハンデにもかかわらず、俺が走り出してから数秒も経たずに肩を掴まれた。

ヤバい。ちよつと女子だからって舐めてたけど。

大事なことを忘れていた。

すなわち。

頭のイカれた女子は、総じて運動能力が並外れていると相場が決まっているということに。

ついでに言えば、逃げられたら追いかけたくなるのも人間の心理だろう。

こういう単純そうな子には良くあてはまるものだ。

って!!

こんな冷静に分析してる場合じゃない!!

この子握力がマジでヤバいんですけど!?

絶対60、70はあるぞコレ!?

「イタイイタイ!! 胡桃沢さんイタイって!」

「逃がさないわよ! あなたは大事なスパイ候補なんだから!」

「スパイって何!?! 何にせよこのままだと俺の肩が根元からもげるから早く手を離して!!」

「ふふ、そう簡単にこのサタニキア様が騙されると思って? 絶対に

この手は離さないわよ!」

嬉しいセリフんだけど嬉しくない!

仕方なく多少乱暴にもがいてみるが、右腕を丸ごと両手でつかまれているせいで相当暴れないと振りほどくのは無理そうだ。

このままだと脱臼か骨折は確実。

どうにかして胡桃沢さんを落ち着かせないといけない。

(腕を失いたくなかったら考えろ俺! どうすれば胡桃沢さんの拘束をほどける!?! 暴力的なのは論外、言葉でどうにか説得したいけど聞く耳持たなさそうだし……そうだ!)

「分かった!! スパイになるから手を離して!! マジでもげる!!」

「そんなこと言って手を離れた瞬間に逃げるつもりなんでしょ！ 騙されないわ！」

「イデデ!! じゃあせめてもっと力緩めて!! このままだと本当に俺の利き腕がなくなるから!!」

「……仕方ないわね。これで勘弁してあげるわ」

俺の必死の懇願が通じたのか、胡桃沢さんは言葉通り拘束を緩めた。

両手で俺の手首と二の腕辺りを掴んでいるのはそのままだが、今度は普通の握力だ。

……ハア。

マジで死ぬかと思った。

逃げようとしなければこんなことにはならなかったかもしれないのに……なぜ逃げたし俺。

「それで胡桃沢さん、スパイっていったい何の……」

「ストップ！ 人間風情が私のことをそんなに気安く呼ばないでもらえる……? 私のことはサタニキア様とお呼びなさい！」

顎をクイっと上に上げ、文字通り上から目線で彼女は言う。

……もう、何というか。

やっぱりこの子このままだと友達出来ないかもしれない。

「……えっと、サタニキア様は一体何のスパイに俺を採用しようと思っただけでしょう」

「そんなの決まってるわ……あなた、今朝ガヴリールのやつと一緒に登校してきたでしょう?」

「そうだけど……」

何で知ってるのか、とは聞かないでおく。

まあ校門辺りでたまたま見られたのだろう。

「それに、あなた何でも今年の学年『シユセキ』とやらになつたそうじゃない。有能な者であれば種族は問わない……魔界の王として君臨するこの私が人間界で手元に置くのにふさわしい人材だわ。というわけで貴方は今この瞬間から『大悪魔の手下』のサタニキア・ブラザーズ一員に任命よ！

私の下で働けることを光栄に思いなさい！」

……もつたいない。

どや顔で俺の雇用宣言をする胡桃沢さんをみて、俺はそう思わざるを得なかった。

もし、この子の頭のネジがもつとしっかり閉まっていればきつと友達がたくさんできたことだろう。

もし、この子のおつむがもつとちゃんとしてればきつと運動神経抜群の人気者になれただろう。

もし、この子の性格がこんなに面倒くさくなかったら、きつと俺はこんな切ない気持ちにはならなかっただろう。

そんなこの子のために一句。

——身の程を知れと胡桃は鳴くばかり、いかでか耳をつけむべけんや。

ああ、哀しいなあ。

「ちよつと！… 聞いているの！」

「……ハッ！」

素人感まるだしの黒歴史じみた句を頭の中で詠んでいると、いつの間にか胡桃沢さんが俺の顔を覗き込んでいた。

距離が近いのでよりよく見えるが、本当に見た目はスゴイいいんだよ。

良いんだけど、なあ……。

「……何よその不満げな顔は？ 私のような主君をもてて嬉しくないの？」

「いや……一つ提案があるんだけどさ」

「何よ？」

「学校で、しかも同級生でサタニキア様はおかしいから、別の呼び方をしてもいい？」

「……それもそうね。なら、私のことはサターニヤ様と呼びなさい。私を愛称で呼ぶことを特別に許可するわ」

そこじゃないんだよサターニヤ様……。

天然なのかわざとなのか疑わしいレベルだぞもはや。

とりあえず、四苦八苦しながらもその後の交渉でなんとか様付けは

勘弁してもらおうようになった。

第十六話

頭のおかしい赤髪娘に絡まれて数十分。

まだ昼休みは終わらないが、彼女による拘束も終わる気配はない。というか、そろそろ腕を離してほしいんだよね。

話の流れで片手は離してくれたんだけど、まだ彼女の右手が俺の右手首をがっしりと掴んでいる。

あまり妹以外の女子から物理的な接触を受けたことがないから居心地が悪いんだよ。

女子とすれ違いざまに肩がぶつかった程度でドキッとするレベルだからね俺？

それぐらい女性に対する免疫がない俺の手首を、文字通り手錠するなんて。

しかも、制服の上からではなく直接肌同士が接触しているのだ。

最初は肩をもがれかけた痛みで気にする余裕なんてなかったが、途中から彼女の手の温もりが気になって仕方がない。

「コホン、それじゃあ話を戻すわね」

「その前にそろそろ手を離してほしいんだけど……」

「話が終わったら離すわよ。そんなことよりも、あなたの最初の任務を伝えるわ」

俺の胸のときめきがそんなこと呼ばわりされちゃったよ。

ひどすぎて草生えるわ。

「ズバリ！ ガヴリールの嫌いなものを今日の放課後までに探ってきてなさい！」

「天真さんの嫌いなもの？」

「ええ、昔の偉い人はこんなことを言ったらしいわ……『敵を知り、自分を知れば百戦して危うからざる無し』……とね」

「おお……」

この子がそんな難しい言葉を知っていることに驚いた。

微妙に惜しいんだけどね。

文末が二重否定になってるからそれだと逆の意味になるんじゃない

いかな。

「そこでああなたの……そういえばあなた、名前何て言うの？」

名前も知らない奴を工作人員に雇おうとしてたサターニャさんは流石っすわ。

もちろん口には出さないけど。

まあ出してもこの子なら純粋に誉め言葉として受け取るかもね。

「……佐藤の佐に、鎌倉の倉。最後に優しいって書いて佐倉優。以後お見知りおきを」

「砂糖の砂に、鎌倉の倉……易しいって書いて砂倉易ね！」

うん。

とりあえずイントネーションでなんか違うってことは分かった。

俺の名字シユガーでもサンドでもないんだよね。

まあ訂正する機会があったら指摘してみよう。

「それで、サターニャさんは天真さんの嫌いなものを知ってどうするの？」

「くふふ……そんなのわざわざ言うまでもないわ」

「あ、じゃあ言わなくていいです」

「え……な、そこはあんた聞くとこころでしょ？」

あ、少し残念そうな顔してる。

ごめんね。

意地悪してみたかっただけだよ。

「……まあいいわ。奴の嫌いなものを知ってどうするかって？ あいつにバレないうちに下駄箱や机の中に仕込んでおくのよ！ 嫌いなものをさんざん見て弱ったところを一気に叩けば私の勝利は確実だわ！」

「……………すごい作戦っすね」

「ふふ……この程度の家なら私に掛ければすぐに思いつくわ」

俺が棒読みに近い発音で言うとな彼女は自慢げに胸を張って答える。

白羽さんには劣るけど普通にデカイ。

そんなことより、なかなか面倒くさいことを押し付けられてしまったな。

やむを得なかったとはいえ一度はスパイになることを了承してしまっただけだし、今さら彼女を無視するというのもしづらい。それにだ。

彼女の目的は別に天真さんに嫌がらせをすることではないだろう。本当の目的は考えなくてもすぐわかる。

「別に素直に友達になつてほしいって言えば天真さんも普通に頷いてくれると思うけど」

「なっ?! 何言つてんのよあんた! 私とガヴリールは因縁のライバルであつてそんな生ぬるい関係ではないわ!」

俺がつい心の声をもらしてしまふと彼女は凶星を突かれたのか顔を赤らめて慌てて主張した。

うーん……変な風に考えないで単刀直入に友達申請をすれば、少なくともヴィーネさんとかは受け入れてくれるとおもっただけだなあ。ま、とりあえずは彼女のしたいようにさせておこう。

「分かった。今日の放課後までに天真さんの嫌いなものを調べてくればいいんだね」

「ええ。待ち合わせ場所はここにするわ。あとは……そうね、合言葉を決めましょう!」

「合言葉って……いや、うん。いいよ。何にする?」
「うーん……かつこよくて悪魔的なやつがいいわね」

合言葉の発案は彼女に任せて俺は彼女の胸部をガン見していると、いつの間にか腕から彼女の手が離れていることに気付いた。

安心したけど、ちよつと残念な感じもする。

その後、俺の意見も取り入れたうえで合言葉が決まり、その場は解散となった。

「任せたわよ、佐倉優。とびっきりの情報を期待してるわ」

「善処するよ」

合言葉を決めるついでに俺の名前を確認したところ、やはり漢字が誤字ついていた。

易は「ゆう」とは読みません。

そんなわけで俺はやつと解放され、自由の身となった。

「ああ……！　いつの間にか私のメロンパンが！　今日の昼食だったのに……」

何かを嘆くような声が聞こえた気がするが多分気のせいだろう。

俺はその場を後にし、教師の探索を再開した。

… … …

「……というわけなんだけど、ラファイも一緒に行かない？」

いつもの、といってもまだ仲良くなつて数日しか経つてないけど、とにかくいつもの三人で昼食を食べながら話をしていた。

本当はもう一人いるんだけど、何か用事があるらしいので今はいない。

話題はその今は不在の彼が誘ってくれたお花見の件について。

佐倉君のした説明をそのまま受け売りでラファイにしていたところだった。

もちろん、本人の了承は得ている。

まあどちらかといえば彼の方からラファイに話してくれるように頼んできたんだけど。

「お花は天界でたくさん見る機会がありましたけど、観賞用としての桜は確かにあまり見たことがありませんね……私もぜひ一緒にさせてほしいです」

ラファイも特に週末に予定はなかったようで快く承諾してくれた。

彼女の言葉を聞いて私も嬉しくなる。

四人……そういえば佐倉君の妹さんがいるらしいから全部で五人。それなりの人数でこういうイベントに参加するのはこっちに來てからは初めてだ。

ガヴ（純粹）とお出かけしたり一緒に外でご飯を食べたりすることはあったが、それとはまた違った楽しみがある。

気心知れた人の数が多ければ、それだけ楽しいだろう。

魔界で過ごしていたときも友人とピクニックやキャンプのような野外活動をしたり、何かしらの催し物に参加したりしたことはあつ

た。

でも、魔界に咲いているのはマンドラゴラや食獣植物といった変な花だけだし、外にいとたまにモンスターに遭遇して襲われることもある。

だから人間界で落ち着いてほのぼのとお花見ができる機会を得られたことが非常に嬉しかった。

佐倉君にはいっぱい感謝しなきゃね。

「詳しい日時とか場所は後でスマホで佐倉君が知らせてくれるって」

「ホント、そこまでして何で私たちを誘うのか理解できんな」

「佐倉君もできれば大勢の方が楽しいって思ったんでしょ？」

「だったら男子を誘えばいい話じゃん。何で女子の私たちを誘うんだよ」

「それは……」

「あいつ、実はただのムツツリスケベなんじゃないの？ 私と部屋にいるときもなんかジロジロ見られてる気がしたし」

ガヴがさらつと彼の悪口を言ったので流石にムツとなる。

確かに、何でわざわざ女子の私たちを誘ったのか聞かれるとちよつと不思議だ。

でも、少し考えるとその原因がすぐに思い浮かび、私は目の前にいる人物を白い目で見た。

「ガヴの下着のせいで男子の友達を作る機会を逃しちやつたんでしょ」

彼の人当たりの良さなら多分作ろうと思えば男子の友達をすぐに作れるはずだ。

が、あんな出来事があった手前、やはりまだ私たち以外の同級生と話すのは気が引けるのではないだろうか。

ちやうど両隣の席が私とガヴだったために、なおさら他の生徒と仲良くなるタイミングがなかったのだろう。

私が事件のことを持ち出すと、彼女は自分の下着が公衆の面前に晒されたことをはつきりと思いつ出したのか、白い雪肌を赤く染めて俯いた。

今でも相当恥ずかしい黒歴史として彼女の心の中に刻まれているのだろう。

色々な意味で自業自得よ。

「ふふ、まあ彼がどうして私たちを誘ったのかは置いておくとして、今はもう少しお花見の話題に花を咲かせたいですね……花だけにぷっ」

「……………」

ラフィは咲き誇る花のような笑顔でそんなことを言ったのだった。

しばらくして、お花見の話題も語りつくしたところに佐倉君が手にプリントをもって帰ってきた。

「ただいま」

「おかえり佐倉君。用事は済んだの？」

「ああ……まあ、もっと大変なことがあったんだけどね」

「……………」

彼が自分の机の椅子を引きながら疲れたように話す。

何かあったのかしら。

というより、そもそも用事とはなんだったんだろう。

「何しに行ってたんですか？」

私の気持ちを彼の前の空いた席に座っているラフィが代弁してくれた。

「この前の英語の新生テストの答案。昨日午前中しか英語の先生いなかったせいで受け取れなかったから」

「ああ、そういえばそんなのもありましたね……」

私とガヴは当日受けなかった新生テスト。

成績には特に入らないので受けなくてラッキーとも思えるかもしれないが、私はみんな受けているのに自分だけ受けない罪悪感に駆られて、問題と解答用紙を一昨日にもらって昨日の朝提出するという形で一応受けた。

「何点だったんだ？」

ガヴが大して関心もなさそうに佐倉君に聞いた。

人のテストの点数を聞こうとするこの無神経さも日に日に増して
いつている気がするのは私だけなんだろうか。

でも、入学試験でガヴを抑えながらトツプになった彼のテストの点
数が気になったのは私もだった。

ラファイも興味をひかれたのか、点数を見せるのを促すように彼に視
線をやっている。

「ん、あまり人に見せると色々言われるかもしれないから気は進まな
いけど……この三人ならまあ、いいか」

ボソボソと何か呟くように言ってから彼は答案を私たちだけに見
えるように広げた。

「わッ……」

「おお……」

「まあ……」

見事に三人の感嘆の声が重なる。

それもそのはず、彼の答案用紙には赤で書かれている部分は丸と一
本の棒しかなかった。

つまり、

「百点……流石首席ですね」

「キモ……お前ホントに人間かよ」

「わぁ……スゴイ」

高校に入っていくかなりのテストで百点って……。

ガヴの感想は言いすぎだけど、やっぱり佐倉君は見かけによらずす
ごい人なんだ。

もう少し彼の丸ばかりの答案を眺めていたかったが、私たちの反応
を見て恥ずかしくなったのか彼は引っ込めるように答案をしまった。

「なんか自慢してるような形になってゴメン」

非常に微妙そうな顔をして佐倉君が言う。

「私たちが見せてほしいって催促したんだから気にすることないわ
よ。むしろ、縁起のいいものを見せてもらって得した気分だわ」

「そういつてもらえると助かるよ」

それにテストで百点を取るといふのは、ちよつとくらい自慢しても

許されるくらいの成果だと思う。

しかし、彼の謙虚な性格はそれを許さなかったようで、テストの話題についてはもう触れずに、別の話題を持ち出した。

「そんなことより花見の件、白羽さんはもう知ってる？」

「はい、ヴィーネさんからお聞きしました。私もお花見には興味があるので、お言葉に甘えてご一緒させていただきませぬ」

「それはよかった。集合場所と時間は追って連絡するから。それと……」

一旦言葉を区切つて、佐倉君は言いにくそうに続けた。

「あと一人、メンバーが追加されるかもしれない」

「同じクラスの人？」

「胡桃沢さんんだけど……」

「ああ、サターニヤね」

「胡桃沢さんって、昨日数学の授業中に面白い一発芸を披露してくださった赤い髪の……？」

「そーいやラフィはまだあいつとは面識なかったな。そう。そいつであつてる」

「一発芸って……まあ、何でもいいけど」

サターニヤとは魔界に居たところから付き合いはあつたが、ここ最近 はあまり話す機会がなかった。

そのため彼女の近況をいまち把握していない。

それでも彼女の性格が昔とあまり変わってないのはラフィが今挙げた昨日の授業中の痴態からも伺えるが。

それどころかむしろ悪化している気さえする。

元氣そうであることが分かって安心もしたけど。

彼女に関して唯一心配なことと言えば……。

サターニヤとこの昼休みに会って話したという佐倉君。

私は少し気になったことを彼に聞いた。

「佐倉君、サターニヤと何かあつたの？」

「……………いや、別に。何も」

「でも、急に誘おうと思ったからには何か理由があるんじゃないのか

？」

そもそも昼休みに偶々会って話をするような仲だったことにも驚きだけど、佐倉君の声には何かマイナスの感情がこもっているように感じられる。

何というか、こう……諦念、というか不本意というか、投げやりな気持ちだ。

ガヴも同じようなものを感じ取ったのか、私の質問に便乗してきた。

ラフィはそもそもサターニヤのことをあまり知らないので、黙って会話の行く末を見守っている。

「……彼女の名譽に関わることだから言えない、とだけ」

「昼休みにできる名譽に関わるようなことって何だよ」

……このやり取りからちよつと気付いたことだけだ。

佐倉君つてもしかして嘘が吐けないタイプの人なのかも。

だって私とガヴが質問したときすぐく目が泳いだし。

今も目線を明後日の方向に向けて、これ以上聞かないで欲しいという態度を表に出している。

なんでだろう。

共感を覚えてしまう自分がいた。

興味本位でやってみたインターネットの性格診断で、気苦労が絶えないタイプ、と出た自分と同じ診断結果を彼は出せそうな気がする。

——キーンコーンカーンコーン。

「あ……」

「そろそろ授業が始まるし、この話はまた今度ってことで」

彼ははつきりと安心したような息をついて、そのまま次の授業の準備をし始めてしまった。

彼とサターニヤの間に何があったのか気になるけど、私たちが首を突っ込むことでもない。

私はそれ以上経緯を追求するのはやめて、とりあえずまた一人お花

見のメンバーが増えたことを素直に喜ぶことにした。

第十七話

——夕暮れ。

オーマガドキ……とも呼ばれる時間帯に、私は一人黄昏色の光を浴びて立っていた。

周囲には誰もいない。

まるで誰も、私がいる道を通ろうとはしない。

それは、私が絶対的な強者故。

下等で弱小な人間の多い学校という建物の中で、群れを成さずに黄昏るような強者は私ぐらい……そして。

「来たわね……」

静かな廊下に響き渡る足音。

私という存在を恐れずに、この場所に足を運ぼうとするもの。

今の時点ではそんな恐れ知らずは一人しかこの学校にはいない。

「黒より黒き……？」

合言葉は、悪魔との契約を結ぶにあたっての誓いの言葉と同義。

忘れるなどもつてのほかで、しかも今回はその者自身が私に意見までして決めたものだ。

……にもかかわらず、返事が返ってこない。

確かに足音は私の後ろで止まったというのに。

「黒より黒き……？」

もしかしたら聞こえなかったのかもしれない。

そう思っただけより強調して言葉を発する。

しかし、そんな私の寛大な思いやりも無意味で、返事は返ってこない。

「——ちよつとあんた！ せつかくこのサターニヤさ」

「あの、通っていいですか？」

「……………」

「……………」

後ろを振り向いた先に居たのは、手に荷物を抱えた一人の女子だっ

た。

……………。

「ご、ごめんなさい。急いでるので……」
「……………」

振り向いたときの姿勢で固まったままの私の横を通り過ぎて、彼女は先へ進んでしまった。

「……………」

——漆黒に。

「——!!」

もう一度後ろを振り向くと、今度こそ私が契約を交わした男の姿があった。

驚きと、今の失態を見られてしまったかもしれないという羞恥心に苛まれる前に、私は合言葉の続きで彼が本当に私の契約者であることの確認を遂行する。

「あ、紅より紅き？」

くれない
「紅に」

「我が望むは!？」

「神をも穿つ天魔波旬の雷なり」

「それを望むは!？」

「絶世独立の大悪魔」

そして、最後の文句を交わす。

「それ、そなわち?」

「胡桃沢・サタニキア・マクドウエル様でございます」

「んふ〜!!」

そう! これ! これよ!

私に今まで足りなかったものは!

こんな感じの忠誠心のある僕!

人間界に来たはいいものの、思ったよりも平和で退屈してた……けど、それももうおしまいね。

いや、まだしばらくは平和な時間を保とう。

この男のような部下をもっと増やしてから行動を起こすのだ。

焦ってはだめよサタニキア。
時間はまだたつぷりあるんだから。

「くふ……くふくふくふ」
「……………」

時が来るのが待ち遠しい。

絶望と苦悩の日々が待ち受けているとも知らずにのうのうと暮らしている人間たちのことを思うと、笑いが抑えきれなかった。

… … … … …

超死にたい!!

豆腐の角に頭をぶつけて超死にたい!!

白羽さんのおっぱいに顔をうずめて窒息死したい!!

好感度上げるためとはいえ、流石に割に合わねえよこんな厨二役者
担当すんの!!

黒より黒い漆黒とかどこの爆裂娘!?

天魔波旬って何!? 絶世独立って何!?

紅より紅い紅ってそれ唯のめっちゃ濃い赤色じゃん!

サターニャさんの合言葉に答えていた俺の内心は大体こんな感じ
だった。

合言葉を考えたのは一部引用がある（主に黒より……の下り）とは
いえ、ほとんど俺だ。

彼女が考えた合言葉は余りにあんまりだったので、俺が少し手心を
加えたのだが、完全に余計なことだった。

俺の黒歴史が増えただけだった。

「えへ、えへへへ……」
「……………」

でも、まあ。

この娘が満足そうならそれでいいような気がしてきた。

中二病でも可愛いのは正義です。

かといっていつまでもエヘエへされても話が進まないの俺は咳
ばらいをして、話を切り出す。

「サターニヤさん、例の件だけど」

「え、あ、ああ、そうね。忠誠心が高いのと役に立つかどうかは別問題。さっそく、お手並みを拝見させてもらおうじゃない」

「天真さんの嫌いなもの、ちゃんと聞いてきたよ」

「へえ！ やるじゃない。それで、何なの？ あいつの嫌いなものは」

「天真さんの嫌いなものは……」

わずかに言い淀んで、それでも俺は最後まで口にした。

「人間だつてさ」

「はあ？」

「うじやうじやうるさいから滅ばいいって言つてたよ」

「何よそれ！ 他にはないの？」

『働きたくないでござる』つて言つてた」

「誰もあいつの気持ちなんて聞いてないわよ！」

まあ、サターニヤさんが喚きたくなる気持ちも分かる。

俺もずっこけそうになったもん。

天真さんには、また俺の家に乞食しにきたときのために、と建前を立てて好き嫌いを聞き出した。

以下、そのときの応答の全部。

Q. 嫌いなものは何？

A. 人間。うじやうじやうぜえ。

Q. 食べ物で嫌いなものは？

A. 働きたくないでござる。

Q. 真面目に答えてほしいんだけど。

A. 今日はカレーが食べたい。

Q. 甘口？ 辛口？

A. 中辛で。

やりとりを隣で聞いてたヴィーネさんも呆れた表情をしていた。

ついでに、「乞食ってなんのこと」と聞かれたが、天真さんが睨みつけてきたので適当に誤魔化しておいた。

「それであんたはガヴリールのボケた答えに満足して私のところに報告しに来たわけ？」

「まあ、そういうことになるのかな」

「何よそれ!？」

「将来の夢が自宅警備員とかぬかしてる人に何を言っても無駄なんだよ、サターニヤさん」

「はあ?」

俺だつてこんな報告したくなかつたさ。

でも話の途中で天真さんは話すことすら億劫になつたのか、おでこを机にくっつけてシャツトダウンしてしまつたんだよ。

だから仕方ないじゃないですか。

「というわけで天真さんに嫌がらせするのは諦めよう」

「ぐぬぬ……」

悔しそうに唸っているサターニヤさん。

そんなに天真さんと絡みたかつたんですね。

俺もサターニヤさんと天真さんが絡んでるところ見てみたいで
す。

「で、そこで俺に提案があるんだけどさ」

いつまでも邪な妄想をしているわけにもいかない。

俺は指を一本立てて、サターニヤさんの表情を伺いながら口を開い
た。

「今度の日曜日、花見があるんだけどさ」

「はなみ? ……ふうん、それで?」

今「花見」が「はなみ」に聞こえた気がするんだけど、流石に気の
せいだよな? ……

……この娘だつたらありえない話じゃないから一応補足しとくか。

「隣の花天町っていう桜で有名な町があつて、天真さん含む五人で
行くんだよ」

「……なんで?」

「綺麗な桜を見ながら出店で適当に色々買って食べ歩きするお祭りや
るから。それにみんなで行くっていうこと」

「お祭り!？」

「サターニヤさんもご一緒にどうですか、っていうのが俺の提案」

「いいの!？」

『なにそれおもしろそう!』、と言わんばかりに顔を輝かせるサターニヤさん。

そういう反応してくれるところお兄さん好きだよ。

ここまでチョロイと笑えてくるな。

心の中には納まりきらない苦笑いをしてしまう。

チョロイっていうか素直っていうべきか。

ところが、何かを思い出したように彼女は首をぶんぶん振って、

「いえ、ちよつと待って!」

「はい?」

「そんな庶民どもが参加するような祭りにこの私が行くと思つて?」

「は?」

ああ、そうだった。

チョロイでも素直でもなくただのおバカだったわこの娘。

ただ、口ではアホなことを言いつつも顔は完全に『私も行きたい!』つてなっているのが可愛いので許しちゃう。

……いや、でもちよつとからかつてみよ。

「そっか。今回の花見で天真さんの弱点やら何やらを探せば、祭りも楽しめるし一石二鳥だと思つたんだけど……」

「うえ?」

「確かに、高貴な身分のサターニヤ様が行くところではないですね。不躰な提案を申しました。お許してください。天真さん達にはサターニヤさんは来られないと伝えておくので」

「な、誰も行かないとは……」

「いやー、花見絶対楽しいと思うんだけどなあ。桜の花が舞い散る中で、知り初めの友達とおいしい串焼きとかリングゴ飴を食べながら談笑するの。サターニヤさん行けなくて残念だなあ」

「……………」

「でもまあ仕方ないか。高貴な身分は窮屈な身分と同義。楽しいお祭りに一人だけ参加できないなんて同情しますよサターニヤ様」

流星に言いすぎただろうか。

途中で完全に黙ってしまった。
てかなんか俯いちやってるし。

「……おい、サターニャさん？」

恐る恐る顔を覗き込んでみると、

「……うう……ひっぐ」

「うそお?!」

ちよ、ま!?

今ので泣くの!?

メンタルお豆腐すぎない!?

ヤバイ。

やばい。

罪悪感で死にそうなんだけど。

こんな可愛い女の子泣かすとか末代まで残るレベルで恥なんだけ
ど。

いや待て、まだ涙は流してない。

ギリギリセーフ。

まだ舞える。

てゆうか泣きそうになってる顔めっちゃ可愛いなこの娘。

見たとき思わず「おっふ」ってなったんだけど。

どこの照○さん？

とにかく謝ろう。

調子乗りすぎた。

「ご、ごめんサターニャさん、今の冗談だから！　大丈夫、ちゃんとサ
ターニャさんも一緒に来るって他のみんなに既に伝えてあるし！」

「……ほんと?」

「うん。サターニャさんにも後で詳しい場所とか日程とかラインで送
るから。安心して」

「……し、仕方ないわね。そこまで言うなら私も一緒に行ってあげる
わ」

目元をぬぐって小さくうなずく。

どうやら落ち着いてくれたようだ。

今度からは余りいじめすぎないように気を付けよう。
めっちゃ焦ったわホント。

「えっと、じゃあとりあえず、ラインの連絡先交換しようか」

「……どうやるの？」

うっわ。

その質問悲し過ぎるだろ。

この子ライン交換できるような友達出来たことないんだって一発で分かっちゃうもん。

俺も泣いていいかなこれ。

どうやらスマホは流石に持っているらしいので、サルでも理解できるくらい丁寧な操作方法を教える。

それこそ賢い犬ならマジで理解できるくらいには丁寧に。

「ここをこうやって……」

「……ふんふん」

彼女の持っているスマホを覗き込んで教えるので、自然と寄り添う形になってしまう。

これまた童貞には厳しい姿勢だが、今は悲しさゆえかそういう感情が湧いてこない。

こういう子にも残念美人って言葉使っていいんだろうか。

俺の努力の甲斐あって、連絡先は何とか交換することができた。

「じゃあ、今日のところはこころへんで」

「ええ、私と花見できることを光栄に思いなさい！」

「はいはい」

何というか、疲れた。

この子見ていると眼福な部分も多いけど、予想外の方法でメンタル削ってくるから勘弁してほしい。

今日はもうさっさと帰ろう。

そう思っただけ、踵を返して一階の玄関に向おうとしたところ。

制服の袖を引っ張られてることに気付いた。

「ん？ どうしたのサターニヤさん」

「いえ…その、なかなかいい提案だったわ。私の部下だけはあるか

しら」

「え、あ、どうも」

廊下の窓の外の夕日で染められた顔で、サターニヤさんが控えめな声で言う。

ああ、これもしかしくなくても『誘ってくれてありがとう』って遠回しに言ってるのか。

ちゃんとお礼を言おうとするあたり、やっぱり天真さんと同じく根はいい子だな。

余計にさつき泣かせかけたことに罪悪感が湧いてしまう。

「いや、人数増えたら嬉しいのはこっちも同じだから。体調だけには気を付けてね」

「ふん……私を誰だと思ってるの？ 風邪なんて馬鹿じゃあるまいし引かないわよ」

「馬鹿はむしろ風邪ひかないんじゃないかな？」

ついツツコんでしまったが、彼女は聞こえなかったのかそのまま何も言わずに立ち去ってしまった。

「……帰るか」

呆れからか、疲れからか。

よく分からないため息をついて、俺は帰ることにした。

第十八話

住居侵入罪、というものをご存じだろうか。

まあ、いわゆる不法侵入というやつである。

刑法第130条に詳しくあるが、ちよつと引用してみよう。

『正当な理由がないのに、人の住居若しくは人の看守する邸宅、建造物若しくは艦船に侵入し、または要求を受けたにもかかわらずこれらの場所から退去しなかつた者は、三年以下の懲役または十万円以下の罰金に処する。』

この条文には不法侵入だけでなく、不退去罪という罪に関しても書かれているが、それは置いておこう。

問題なのは今俺の直面している状況がこの刑法第130条で言うところの住居侵入罪に当たるかどうかだ。

すなわち、

「……何してんの二人とも」

「あ、佐倉君、おかえりなさい……」

「おっす」

おっすじゃないよ。

煽ってんのかこの娘。

そのピンクのパーカー脱がして匂い嗅ぐぞ。

「ぷりーず、あんさー、まい、くえすちよん」

「ご、ごめんなさい。私は止めたんだけど、ガヴが自分の部屋は汚いつて言うから……」

「私も別に好きであの汚部屋に住んでるわけじゃないからな。汚い環境でネトゲか綺麗な環境でネトゲかだったら当然後者の方を選ぶさ」

一回鍵を差し込んでひねってからドアノブを回して玄関に入る。

いつもの行程を踏んで部屋に入ろうとするも、ドアは開かず。

鍵を朝閉め忘れたか、とも思ったがちゃんと鍵をかけた覚えはある。

はておかしいなと思って改めて鍵を開け中に入ると、自室に知り合いが二人勝手に上がりこんでいた。

この状況は不法侵入に当たるとしてどうだろうか。

「……当たるとしてどうだろうか」

「……佐倉君？ やっぱり怒ってる？」

いや、怒ってはないよ？

だからそんないたたまれない様子で俺のこと上目遣いで見なくてもいいんだけどさ。

むしろお礼を言いたいよ。

こういうとき最初に抱く感情が怒りとか驚きとかじゃなくて恐怖だつてことを教えてくれて。

だって怖くね？

いくら二人が美少女だったとしてもだよ？

鍵がないと開かないはずの玄関開けたら当然のように他人が自室に居座ってるって。

俺の心境を知ってか知らずか、天真さんはのんきに床に寝っ転がりながらノートパソコンで遊んでいる。

一方でヴィーネさんは俺が本気で怒っていると思っっているのか、泣きそうな顔でこちらを見ている。

ヴィーネさんの泣きそうな顔もサターニャさんに負けず劣らず可愛いけど、流石に色々ツツコミを入れさせてもらおう。

まあでもその前にカバンとか置いてゆったり話をできる体勢になるか。

「ヴィーネさん」

「は、はい」

「そんなに怯えなくても怒ってないから大丈夫だよ。あと、ヴィーネさんも適当にそこらへんに座って」

「うん……ありがとう」

ヴィーネさんらしいというべきか、どうやら俺が帰ってくるまでずっと立って待っていたっぽい。

そういう律義なところを、床と平行、というか床と一体化しているその金髪少女も見習ってほしい。

女子二人が床で俺だけがベッドの上や椅子に座るというのも気分

が悪いので、俺も部屋に敷かれたカーペットに腰を下ろす。

天真さんの部屋の床はフローリングのままだったけど、フローリングだと冬寒そうだし、こつちに引越して来た早い段階でカーペットは購入した。

天真さんもそのうちカーペット買ったらしいと……思わないな。

あの部屋だとダニか何か湧きそうだし。

俺が座ると、ヴィーネさんもお淑やかに座る。

女子が座るときの衣擦れの音ってなんかいいよね。

変態的な思考はさておき。

尋問の時間だ。

俺がまっすぐにヴィーネさんを見つめると、彼女も覚悟を決めたのか堂々と見つめ返す。

率直に言っつて抱きしめたい。

「こほん……さて、ヴィーネさん」

「は、はいー」

「俺が今からヴィーネさんにいくつか質問をするので嘘偽りなく答えるように」

「はい」

「いい返事だ……では、第一の質問」

なんか茶番っぽくなってきたけど実際そこまでシリアスな話にする気もないので問題ないだろう。

ただヴィーネさんの隣で大あくびしているパーカースカート女子にはもうちよつとシリアスになってほしい。

ちよつと捲れてるぞ。

「まず、どうやって俺の部屋に入った？」

「えつと、ラファイが針金のようなものを使って開けてくれました」

「待て待て待て待て」

いきなり意味不明なんだけど。

今の発言ヤバすぎるだろ。

ヴィーネさんの何でもないような口調で答えてるところがヤバみに深みを加えている。

針金のようなものって。

ボールのようなものみたいない言い方しないでくれる？

それまごうことなき針金だから。

っーか驚きすぎて声音が素になっちゃったよ。

俺声低いつていう理由で中学生のころ女子に怯えられたことがあるから女子と話すとき声作ってる部分あるんだよね。

実際ヴィーネさんも今の俺の声に少しびっくりしたような顔をしてるし。

ごめんね、でも俺はもつとびっくりしてるからね。

「白羽さんもいるの？」

「あ、うん、その……」

ヴィーネさんがそこで視線を俺からはずす。

その視線を追ってみると、

「あ、どうも。お邪魔してます」

案の定、人形よりも整った容姿の白銀の女の子が立っていて、にこつと挨拶をしてきた。

「おお……どうも、お邪魔されてます」

「佐倉君の部屋、すごく綺麗ですね」

「ね！ 私も思った！、男の子の部屋つてもつと散らかってるのになつて思ってたけど、私も昨日初めて入ったとき驚いちゃった」

「……ありがとう」

思わずお礼言っちゃったけど、君たち自分たちが不法侵入してるってこと分かってる？

もし同じこと男の友人がやってたら間違いなく通報してるからね？

そして気付いたら天真さんが可哀そうなものを見るような目でこちらを見ている。

「……どうしたの、天真さん」

「いや、お前の気持ちは良く分かるよ。悪いことは言わん。あきらめろ」

「……………」

……段々カオスになってきたな。

「白羽さん」

「はい？ 何ですか？」

「どうやって針金で俺ん家の鍵開けたの」

「うふふ、乙女の秘密です」

「……あ、そう」

いや、本当はどうやって開けたのか分かってるんだけどさ。

出会って数日の友達がピッキングで不法侵入してきたなんて現実
そうそう受け入れられんつつの。

素晴らしいテクニクをお持ちでっか。

やかましいわ。

「侵入手段についてはもういいや……それで、何でみんな俺の家にいるの？」

「あ、うん、それなんだけど……」

そう言っつてヴィーネさんが不法侵入の経緯を話し始めた。

………

「……なるほどね」

「それで佐倉君もどうかなくて」

「うん、まだ夕飯決めてなかったし俺も行くよ」

ヴィーネさんの話をまとめるとこんな感じだ。

放課後、サターニヤさんとの会合のために俺が場を離れた後。

天真さん、ヴィーネさん、白羽さんの三人は共に下校することになった。

初めての高校生活。

色々忙しいこともあるかもしれないが、所詮は高校生。

まだ授業も始まったばかりで今はまだ日程的にそこまで立て込んでいるわけではない。

ただこれからも今ほど暇かどうか分からないので、今のうちに親睦を深める会を開こう、ということとで夕食をみんなで取ることになっ

た。

そうすれば花見をする際にももつと打ち解けた雰囲気を楽しめるだろうと。

で、そうになると花見を企画した張本人の俺もいないとダメだろう、そんな経緯で俺の家で待つことにしたらしい。

最後の結論の部分がおかしい気もするが、話としては非常に嬉しいものだった。

しかし、

「ここにいる面子だけだと、サターニヤさんが仲間外れになるけど……」

「そうね……サターニヤも誘いたいけど、そういえば私サターニヤの今の連絡先知らないわ」

「了解。じゃ俺が連絡するね」

「……何でお前があいつの連絡先知ってるの?」

「ちよつと色々あって、俺サターニヤさんの作業員になったので」

「はあ?」

つい先ほど別れた手前、ちよつと顔を合わせにくい部分もあるが女の子にはもつと人の温かみを知ってほしい。

そういう理由でサターニヤさんも誘うことを提案した。

あと大分適当に答えちゃったけど、自分から作業員ですつてターゲットに名乗るスパイってヤベエな。

最近大活躍のスマホの画面をタップして俺はサターニヤさんに電話を掛ける。

……………

あ、出た。

「こちら、佐倉優。サターニヤさん応答願います」

『も、もしかして? 聞こえてる?』

彼女は電話の経験もないんだろうか。

流石にそれはないと思うけど。

「聞こえてるよ」

『そう? ならいいわ。それで、何の用?』

「これから天真さんたちと飯食いに行くんだけど、サターニヤさんも一緒にどうすか」

『はあ？ 何で私があいつと一緒に仲良く夕食なんて食べなきゃいけないのよ』

「ヴィーネさんと白羽さんもいるんだけど、サターニヤさんだけ除け者にすんのもどうかと思って」

『ふん、余計なお世話よ。勝手に行ってくれば？』

まあね？

彼女のことだろうからそういうひねくれたこと言うと思いましたよ。

でもさ。

そういうキャラを貫きたいんだったらもつと徹底した方がいいと思うんだ。

こう、電話越しでも分かる声の震えとか急に高くなった声のトーンとか。

分かりやすくて非常によろしいんだけども。

俺の妹とかは感情表現に乏しくてマジで嫌がつてんのかどうかの区別がつかないことがあったからな。

俺が中二で彼女が中一のとときとか顕著だった。

小学生のころは素直に俺に甘えてくるが多かったが、中学生になったとたんツンツンし始めて、それはもう苦労した。

俺が「可愛いな」とほめると「……キモイ」と返され。

「似合ってるよ」とほめると「……あんぽんたん」と返され。

頭をポンポンすると「……おまわりさん」と返され。

割と早めに彼女の反抗期は収まったが、今でもたまにツンツンしてくる。

まあそこも含めて全部が彼女の可愛いところなんだけれども。

その点サターニヤさんは本当に扱いやすい。

犬みたいに感情が表に出るし。

ちよつとこつちが見放すふりをすると全力疾走で駆け寄ってくるところがまたね、こう、グツとくるよね。

ただ今日は俺もちよつと疲労が蓄積してるからな。
また突き放すようなこと言うのも心が痛むし……。

俺は周りを見る。

天真さんは……ダメだな。

ネトゲに夢中でこっちのことはアウトオブ眼中だ。

他の面子はどうか。

白羽さんは……俺のベッドの下を覗き込んでいた。

っておい。

何しとんねん。

エロ本なんて隠してないからな。

そういうのは某新世界の神を見習って別の場所に隠してあるから。

流星に火がつくような仕掛けは施してないけど、その代わり絶対見

つからないようにした。

白羽さんでも見つけることは叶わない……と思いたい。

とりあえず彼女は放っておいて、最後にヴィーネさん。

目が合うと、コテン、と首を傾げた。

チヨベリキュート過ぎる。

余りの可愛さに謎の言語が出たが、本当に可愛い。

というのはいって。

「ヴィーネさん、パス！」

「へ!？」

「サターニャさんの説得頼みます」

「ええ？」

ヴィーネさんなら一応旧知の間柄らしいし、何とかしてくれるだろう。

俺は彼女にスマホを渡し、様子を見守ることにした。

「えつと、もしもし？ サターニャ？」

『その声は……ヴィネット？』

「うん、そうだけど……えつと、夜ご飯、一緒にみんなで行かない？」

お花見のメンバーで行くことになったんだけど」

突然の無茶振りじみた俺の行動を咎めるようなことをせず、ややぎこちない会話をし始めるヴィーネさん。

こういうのを見てほっこりする俺はやっぱり性根がねじ曲がってるのかもしれない。

でもまあ、不法侵入したことに対する一応の罰つてことで。

俺の目の保養になってください。

しばらく見守って交渉が無事に進んでいるのを見届けてから、俺は意識を別のところに向けた。

……さて。

「白羽さん、何してるの?」

「いえ、何か面白いものはないかな、と」

「……ナニを探しているのかは分からないけど、ベッドの下には何も置いてないよ」

「ふむ……そのようですね」

俺が声をかけてようやく彼女は這いつくばっていた体勢から起き上がる。

エロ本を探すにしてはやけに熱心だったが、白羽さんてけっこうムツツリなんだろうか。

普段は清楚なお嬢様だが、夜になると乱れる白羽さんを想像するとマジで興奮してくるのでやめておく。

「……あんまり俺の家で変なことしないでね?」

「変なこと、ですか?」

「こう、針金のようなものを使ってピッキングとか、部屋のどこかにお札貼るとか」

「あら、見てたんですか?」

「え?」

「まあでも、善処しますね」

「ちよ、ちよっと待った! お札貼ったの? どこに?」

「んー……今日は天気がいいですね」

「いや何その会話の打ち切り方!? そのセリフってむしろ会話のきつかけに使う奴じゃないの!?!」

「佐倉君、余り大きな声を出すと電話をしているヴィーネさんにも、近所さんにも迷惑ですよ」

こ、この女……。

メツ、みたいな感じで言ってくる白羽さんに俺は何も言えなくなる。

可愛いからこそ質が悪い。

いやでもほんと、そろそろ本気でセクハラのメニュー考えますよ？

最後のデザートは白羽さんの胸で、お会計は俺の社会的な死になるだろう。

自分の人生終了を予期していると、どうやらヴィーネさんの電話も終わったようだ。

「どうだった？」

「サターニヤも来るって。やっぱりあの娘、高校に入る前から全然変わってないみたい」

呆れたように言うも、表情は懐かしむような微笑み。

どこかホツとしているような笑みだ。

「ごめんね、急に話投げて」

「ううん。むしろこのタイミングでサターニヤと話せてよかったわ。直接会ってからだと微妙に気まづくなっちゃったかもし……気を遣ってくれてありがとう」

「い、いや。それならよかったよ。うん」

なんかポジティブにとらえてくれたようだ。

……これヴィーネさんのポジティブさにマイナス1掛けたらイコールヤンデレになりそうだな。

時刻も丁度良く、準備をした後。

俺たちは揃ってアパートを出た。

第十九話

胸騒ぎがあった。

それを私は、自分の『大切』が少し遠いところに行ってしまったが故の感覚だと思っていた。

生まれて以来ずっとずっと一緒に同じ屋根の下で暮らしてきた人。

「失って初めて分かる」というフレーズを引用するほど悲劇的な話でもないけど、それでも最初の数日は耐えきれなくて夜も眠れなかった。

ちよつと住居が遠くなってしまった程度で薄まる関係なんて、あの人は築いていない。

ちよつと言葉を交わさない日があつたくらいで弱まる絆なんて、彼とは築いていない。

だからといって距離が遠くなっても何でもない強い心なんて、あんな『兄』と一緒に過ごしていたら持てるわけがなかった。

「さつちゃん！ 朝飯よー！」

「ん……今、行く」

枕元に置いてあつた時計代わりのスマートフォンを見ながら返事をする。

兄が高校に入ると同時に家族で持つようになったスマホ。

友人にスマホの入手を伝えたところ、家族以外無記載だった連絡先が一気に三十件ほど増えた。

私ってこんなに友達いたんだ、と感慨深く思ったものだが、昨日兄にその感想を話したら『中学校までの友人が必ずしも高校からの友人とは限らないから今のうちに色々実験しとけ』と言われた。

高校生にもなつて中二病みたいなことを言わないで欲しい。

でも、まあ兄の言う通りだと思う。

中学校まで仲が良くても、高校が別になつたら一生会う機会を持たないようなこともあるだろうし。

だからこそ、今の友人と過ごす『今』を大切にしたい。

「本当に……ひねくれてるのか…素直じゃないのか、分からない」

多分、どっちもなんだと思うけど。

優しさを帯びた低い声は、すごく心地いい。

電話越しでも、兄はやっぱり兄だった。

ただ、不安が絶えない。

兄と電話で話している間にも、その不安はますます大きくなっていった。

本当に兄が遠く離れた場所に行ってしまうような、そんな不安。

「さっちゃん。今日はちゃんと眠れた？」

「……うん」

顔を洗ったときに鏡で目元のクマが取れていたのは確認済みだ。

不眠症については、とりあえずの応急処置的手段はできた。

余り他人には言えないような方法ではあるが、これ以上睡眠不足が続くと母さんや父さんに心配をかけてしまう。

と言っても既に心配されてるのは明らかだが。

驚くべきことに兄さんにも『声に覇気がないけど大丈夫か』と心配された。

「ポーカーボイス」なんて揶揄されたことのある私の声から覇気のないなしを聞き分ける兄はやっぱりシスコンにもほどがあると思うが、兄が私の不調に気付いてくれたことに歓喜している自分も相当なブラコンだなと思う。

母さんの作った、温かい炒り卵をぱくつきながらご飯を進める。

母さんは私が夜眠れていないことにすぐに気付いた。

その原因も、当然分かっているだろう。

客観的にみたら兄離れできてない妹だし、私は母さんに夜眠れていないことを最初に指摘されたとき羞恥の念を覚えた。

『でも私のご飯が食べられるうちは問題ないわね』なんて言われて、ちよつとイラつとした。

実際食欲はいつも通りだったので更なる羞恥に耐えながら恨みがましい目で母を睨むことでしか私には反抗できなかつたが。

「ごちそうさま」

「お粗末様です」

今日もしつかり朝食を食べて、私は学校に行く準備を整える。

兄から似合っていると称賛されたセーラー服姿に身を包んで、学校指定のカバンに教科書やら筆記用具やらを入れて。

最後にサブバッグとして使っている兄譲りのリュックサックの中心を確認して。

「あと、あれも持ってこ」

部屋の隅の方に置いてあった安っぽい木製の将棋盤とその駒を無理やりリュックサックに押し込み、チャックを四苦八苦の末に閉めてパンパンになったリュックサックを背負う。

ずいぶん昔に親から買ってもらった代物だから折り畳みの盤は関節部分が緩くなっていて、駒の方も文字が剥けている部分が多かった。

「準備……おっけー」

カーテン越しからでも分かる強い日差し。

兄が一人暮らしを始めてからこの窓も何だか私の寂しさを強調する要素になっている気がする。

文学的な感傷に浸るには時間がない。

あれこれと『設定』を考えていたせいで、結構急がないと遅刻してしまう時間だ。

いつもより大荷物なものもあるし、そろそろ出発しよう。

玄関まで来て、母さんの「いつてらっしやい」に微笑んで、私は外に出る。

「行ってきます」

——今日は晴れ。

花冷えした風が、日差しの中を泳いでいた。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

欲しいものが何でも一つ手に入るとしたらみなさんは何を願うだろうか。

絶対的な力？

国を動かせるほどの財力？

それとも天才的な知力？

まあ、どれも魅力的な願いだらう。

で、中学校の頃の無邪気な俺はこの子供だましのようなアンケートにこう答えた。

『ネコミミ美少女』

アンケート用紙に書かれたその単語は一般的な感性を持つ中学生には少々インパクトがありすぎたようだ。

幸いアンケートは匿名で行われたため、またそういう匿名のアンケートはわざと利き手とは逆の左手で書く習慣が俺にはあったため、アンケートが行われたクラスで後日『変態がこのクラスに一人いる』という噂が広まった際に俺が容疑者となることはなかったが、今後アンケートでふざけるのは止めようと誓った事件だった。

ちなみに別に俺はケモナーじゃない。

ただ、アンケートの当日の朝登校中にモフモフの猫を目にしてしまっただけで。

ただ、アンケートが行われる直前にたまたまド○えもんのキーホルダーを目にしてしまっただけで。

ただ、アンケート用紙に回答を書き込んでいるときに目の前の席に座っている女子を見たら寝ぐせが猫耳に見えてしまっただけで。

要するに。

「俺は悪くない」

「いや、お前が悪いだろ」

高校生になっても昼休みというのは次の授業のための準備時間ではなく、ただ友人と時間を浪費して過ごすための時間というのは変わらない。

もちろん日によって違うこともあるが、今日に関してはいつも通りの過ごし方だった。

まあ昨日までとは友人の性別がちよつと変わっているが。

同性との交流も重要だからな。

野郎共の力は馬鹿にできないし、何よりパンツ事件の後始末がまだ

不完全なのだ。

入学してからの数週間というのを馬鹿にしてはいけない。スクールカーストは高校生になってからも当然存在する。

女子なんて初日の時点でほぼグループのメンバーが固定化されるし、男子に関しても余り悠長に構えていられないのだ。

学生生活というのは最低でも数人は友人と呼べる人間がいないとやっていけない。

それプラス、他クラスにも知り合いと呼べるような人間が何人か必要だ。

天真さんやヴィーネさんたちと一応は仲良くなれたし、昨日もファミレスで一緒に飯食ったりして交流は深められたけど、だからといって彼女ら以外の友人を作らなくていい理由にはならない。

人脈は宝であり、武器であり、何よりも自分を守る盾。

同性である男子との交流をないがしろにし、奇跡的なハーレム状態に甘んじているわけにはいかなかった。

と、いうのは建前で。

ぶっちゃけヴィーネさんとかいつものメンバーが他の女子とおしゃべりめぐしているために仕方ないから俺も野郎たちと仲良くなるうと思っただけだ。

天真さんは一応一人で座しているけど、スリープモードだから邪魔しないでおくことにした。

「やっぱりお前ただものじゃねえよな……妹のパンツをホームルームの時間で鑑賞したり、新入生テストで全教科ほぼ満点だったり」

「……前者については割と複雑な問題だから触れなくてくれるとありがたい」

話しているのは俺のすぐ目の前の席の男子生徒だ。

パンツ事件の時点で一応顔見知りだったので改めて今日俺の方から話しかけたところ、普通に会話に応じてくれた。

内心ほっとしたのは仕方ないだろう。

パンツ事件による俺のクラス内評価への影響はマジで予想がつかなかったからな。

ヴィーネさんと、俺が下心でヘルプした女子たちのおかげでひとま
ずは俺の行為は不問となったがそれでも俺に対して悪感情を抱いて
いる人間がいけないとは限らない。

女子に関してはやはり疑いやら何やらがぬぐい切れてない可能性
は十分あるし、男子に関してはもしかしたら、妹のパンツを自由にで
きることに嫉妬した男子がいるかもしれない。

割と俺のクラス内における立ち位置は不安定なのだ。

もちろん、それを支えているのがヴィーネさんたちであるというこ
とは忘れてはいけない。

精神的な面で、本当にあの四人の存在は救いになってるからな。

感謝の念は絶やさないようにしよう。

「優は部活どつか入るのか？」

気安く下の名前で呼んでくれる友人A。

確か、彼の名は神谷人こうのみやじんだったはず。

漫画か小説の主人公みたいな名前してんなという感想を持ったの
を覚えている。

入学から数日しか経っていないが、クラス全員の名前は暗記してあ
る。

優等生だからな。

そのくらいはたやすい。

ただし、男子の名前に関しては余り自信ないけど。

「今のところはまだ予定ないかな」

「仮に入るとしたらやっぱ文化部か？ お前あんまり運動してるよう
には見えないし」

「一応中学校の頃は卓球やってたんだけどねえ」

大会で優勝したりとか、そういう経験はないがそこそこうまく自
負している。

少なくとも素人相手だったら完封する自信はある。

何にせよ、部活に入るか、入るとしてどの部活にするかというのは
言わずもがな大きな問題だ。

学生生活に青春の一ページなんてタイトルづけるためには部活に

入るのは必然だろう。

「女子ウケ狙うならやっぱバスケットとかテニス部だよな」

「安直だな」

「なら、他にどんな候補があるというのかね秀才君？」

試すような目つきで神谷が俺を見てくる。

俺は腕を組んで考えこむ……ふりをしながら同じく教室内で談笑している女子グループの方を眺めた。

そのグループにはヴィーネさんと白羽さんも含まれ、二人とも楽しそうに他のクラスの女子と喋っていた。

ふーむ。

女子ウケがいい、と言うと聞こえはいいがただ部活に入るだけでそんなに女子にモテるのであれば苦労はない。

バスケットとテニス部に関してはおうちの高校はそもそも女子と男子で分かれているっぽいので出会いを求めるには適さないだろう。

俺がこれらの部活に入部したところで手に入るのはステータスだけだ。

その肩書を活用できるほどの運動神経を持っているわけでもない。

部活そのもののハードさを考えると割に合わない可能性の方が高いだろう。

女子ウケが良さそうな部活は大体練習がキツイと相場が決まっているからな。

……それに。

現時点で天真さんやヴィーネさん達とお近づきになれているわけだし。

他の女子たちとはパンツ事件のこともあって関わりづらい部分があるかもしれないが、別に俺は女子にモテたいっていうわけでもないからな。

どちらかといえば省エネ志向のキャラだし。

「しばらくは帰宅部でいいかなあ」

「……ま、確かに安パイだろうな」

どこぞの女子中学生たちをリスpekトして

「アミューズメントクラブ」とか作ったら天真さん達もワンチャン入ってくれるかもしれないが、合法的にそんな部活を作る手段が思いつかないのでこのアイデアもお蔵入りだろう。

特に実りのない、実に男子高校生同士らしい会話で昼休みを終え、五限の数学が始まった。

… … … … …

帰りのホームルームが終わり、一斉に皆が帰宅や部活のモードに切り替わるざわめきの中。

スマホをいじっている天真さんに俺は囁く。

「天真さん、今日も俺の部屋来るの？」

他人が聞いたたらなかなかにヤバい発言なので、周りには絶対聞こえない音量だ。

「ん…：…：そうだな。今日は牛丼が食いたい」

本当に天真さんは欲望に忠実だ。

睡眠欲には忠実だし、食欲も隠そうとしないし。

性欲にももしかしたら忠実なのかもしれないと考えると流石に失礼なのでやめておく。

昨日、女子四人組と飯を食って解散した後。

天真さんは当然のように俺の部屋の中にまでついてきた。

寝るときになったら自分の部屋に戻ると言っ

て。一応俺も年頃の男子高校生だし、年頃といえば彼女にも当てはまる。

躊躇はしたが、寝るのは自分の部屋でという条件もあって俺は彼女を招き入れた。

寝落ちした彼女を起こして自分の部屋にお帰り願うところまでで俺の昨日は終わった。

そして、今日も天真さんは俺の部屋に入り浸るつもりらしい。

しかも、夕食までごちそうになるつもりようだ。

学生生活一週目から自宅に美少女が寄生するって世の中何が起るか分からんな。

パンツ事件が起こった時点で今さらではあるんだけど。

「悪いんだけど、今日俺用事があるから帰り少し遅くなるんだ」

「はあ？ 佐倉のくせに生意気だなあ」

「だから先に部屋で待ってて」

「え？」

意味不明そうな顔つきをしている天真さんの目の前に鍵をぶら下げた。

うけけ。

驚いてる驚いてる。

俺もびつくりだよ。

入学早々同級生の女子に家の鍵渡すイベント発生するとか。

「え、キモい……」

「ちよ、ナチュラルに引くのやめて」

「お前頭おかしいんじゃないか？ 寄生しようとしている私が言うのもなんだけど、家のセキュリティもつと気にしたほうがいいぞ」

「白羽さんにピッキングされちゃってる時点でもう気にしても仕方がないかなって」

「そういう問題なのか……？」

もちろんそういう問題じゃない。

いや、そういう問題もあるんだけどさ。

白羽さんのピッキング対策は事態がもつと深刻化してきたら実行するとして。

こうも簡単に天真さんに鍵を渡すのはいくつか理由がある。

普通の女子だったら男子からいきなり合鍵とか渡されても訴訟のきっかけにかなり得ない。

だが、そこは安心と信頼の天真さんである。

彼女のボケたぐーたら思考であれば『むしろ都合がいい』程度の感想しか持たないはず。

まあ、流石の天真さんも警戒がこもった目をするが、やがて鍵を受け取ってポケットの中に突っ込んだ。

それを満足気に見届けてから俺はカバンを肩に掛ける。

「じゃあ、一旦さようなら」

「……ん」

依然として微妙そうな顔をしている天真さんを尻目に、俺は教室から出ていった。

第二十話

晴れなのに肌寒いというふざけた天気の中。
身を縮こまらせながら帰途に就く。

……帰途、と言つていいのかはなかなか微妙なところだが。
ポケットに手をつ突っ込みながら歩いていると、手に馴染みのない金
属が触れる。

男子から家の合鍵をもらうとか、意味不明な状況ではあるがそこま
で深く考えることでもあるまい。

「ホント、太陽仕事しろよ」

ため息をすると幸せが逃げるといふが、ため息をするような状況な
時点で既に幸せではない。

天使補正で運がよくなるというわけもあるわけがなく、天候に一喜
一憂するのは人間と同じだ。

……その気になれば雨の日を立派な日本晴れにすることもできな
くもないけど。

よく考えたらチートも使えたわ。

あくびにため息と、およそ天使のする所業とは思えない行為をしな
がら帰る足を速める。

こんな寒い日は家にこもってグータラするに限る。

せっかくなきれいな部屋でゲームをする権利を手に入れたのだし、利
用しない手はない。

ほんと、佐倉さままだ。

学校から徒歩で15分程度というお手頃な距離にあるアパート。

引越した当初、駄天する前の私は通学がちょうどいいウォーキン
グになっていいだろうと思つたが、今になってはたかだが15分の徒
歩ですらかつたるい。

あの頃にもし戻れたら、過去の自分をぶん殴りたいくらいだ。

もつと学校に近いアパートにしろよ、と。

何だつたら学校の近くに新しく家を建ててでも歩きたくない。

まあ、そんな金はないけど。

怠惰極まる思考で脳内を満たしているうちに、アパートに到着する。

いつもよりも一つ手前の部屋で足を止め、もらった合鍵でドアを開ける。

「さあ、ネトゲの時間だ……つて、ん？」

「お帰りにやさしい！ おにいちゃ……」

「……………」

「……………」

——時が、止まった。

当然、そつ閉じである。

これ以上ないほどの、見事なそつ閉じ。

プロのシノビでもなければ今のはできまい。

ていうか。

何だ今の。

「…………部屋を間違えた？」

言いながらそんなわけはないと可能性を捨てる。

確かにここは佐倉の部屋で、実際鍵も使うことができた。

泥棒、というわけでもないだろう。

玄関で部屋主を待つ泥棒がどこにいる。

強盗とかだったらまだしも、あの姿である。

……そう。

個人的に一番ショッキングだったのは玄関で出迎えてきた人間の

姿である。

本来給仕のために用いられる女性用の服……いわゆるメイド服に身を包んだ女性。

それだけでも十分異常なのに、頭に変な耳がついていたのだ。

一目でわかった。

コイツやべえ。

余りに突然かつ意味不明な現象が起きたので動揺がひどい。

とりあえず落ち着こうと深呼吸すると、

——ガチャ。

「!!!」

ドアノブが動いたのを見て反射的にそれを抑える。激しい力で抵抗されるが、同じく力を振り絞って抵抗する。なんでこんなことしてるのかは謎だが、身の危険を感じるのだ。あれに捕まったら、ただでは済まない。

そんな確信。

(くそ、何だこいつの力！ ホントに同じ女子か!?)
少なくとも見た目は女子だった。

むしろ、男子があんな格好してたらマジでヤバイ。ゲームしては寝てゲームしては寝てという駄天生活が祟ったのだろう。

筋肉にうまく力が入らないのがありありと感じられた。

日頃の運動不足がこんな時になって悔やまれるとは。

そもそも、なんで佐倉の部屋にあんなのが……

「……ちよつと待て」

視覚的な情報が刺激的過ぎてそれ以外の五感が機能していなかったが、よくよく記憶をたどってみる。

確か、非常に重要なことを言っていた気が……。

……

……

……

え、こいつ佐倉の妹？

「うわ!!」

思い当たると同時に、ドアをこじ開けようとする力に負けて後ずさってしまふ。

目の前には先ほど玄関に立っていた女性が全く同じ姿でこちらを見つめていた。

——ジ——

そんな擬音が付きそうなくらい、強い視線を向けられる。

端的に彼女が今思っていることを言い表すならば、「あなた誰？」といったところだろう。

見るに、佐倉の帰りを待っていたっぽい。

それにしても佐倉の妹ってこんな奴なのか……。

メイド服を着て猫耳を頭に装着して兄の帰りを待つ妹。

ナニソレコワイ。

見た目は可愛らしいが、そんなことを発想できる精神が怖い。

あるいは、兄の方がそうさせているのか。

だとしたら、速攻で絶交するな。

想像しただけで寒気がする。

信じたくない可能性に複雑な気持ちを抱えながら、いまだに黙っている佐倉の妹（推定）に私は声をかけた。

「えっと、もしかして佐倉の妹？」

「はい。あなたは？」

鋭く切り返される。

言葉の温度がやけに低かった。

あいつ、こんな無愛想な妹持ってたのか……。

自分の妹とはまるで対照的な印象にびっくりする。

誰に対しても朗らかで温かい笑みを振りまき、周囲を幸せにするようなわが妹を思い出しほんの少し微笑ましい気持ちも生まれるが、ちよつと今はそれどころではない。

「私はあいつの……ただの友達だな」

一瞬答えに詰まるが、少なくとも友達未満の人間が一応は異性の家に来訪するのもおかしな話なのでとりあえず友人を名乗ってみる。

いや、正直私もよくわかっていないんだよ。

あいつとの関係性。

一晩ゲームをやったりはしたけど……あのときはテンションが少しおかしかったような気がするし。

戦友と言ってもいいかもしれない。

佐倉妹は私の自信なきげな回答に訝しげな視線を強め、

「ただの友達が……どうして兄さんの部屋に？」

「……」

それを聞かれると弱い。

まあ、変にひねった答えを出さなくてもいいか。

「あいつの部屋でネットゲをするためだ」

「……ねとげ？」

拙い発音でリピートされる。

もしかして知らないのだろうか。

佐倉の妹ならありうるな。

説明する義務はないが、邪魔が入らないようにするためにもう少し詳しく説明すると、

「……ゲームなら……自分の部屋でやればいいのでは？」

さつきから痛いところを突いてくるな……。

さすが学年首席の妹といったところか。

まあ、非常にごもつともなことを言われているのだが。

「私の部屋は汚いからな。それに、あいつは私に借りがあるんだ」

「借り……どんな？」

「それは秘密だ。あいつのプライバシーに関わる」

別に貸してもいないし借りでもないが、それっぽいことを言って誤魔化する。

疑いをもたれるのは免れないけど、そのうち帰ってくる佐倉が何とかしてくれるだろう。

この調子だと、多分佐倉は妹がここにきていることを知らないはずだ。

知っているのにも関わらず私を先に部屋に行かせたとしたら、意図が不明すぎる。

忘れていたとかだったらとりあえず後で一発ぶん殴るけど。

やっぱり自分の部屋でグータラするという選択肢もあるが、ここで引いたら負けな気がする。

だいたい、当の佐倉が許可を出しているのだからどうこう言われる筋合いはないのだ。

「とにかく、客人をいつまで玄関先で待たせるんだ？」

「……………」

腕を組みながら偉そうに言うと、渋々といった感じで佐倉妹は道を

開けてくれた。

年上の威厳とやらが通じたのだろう。

ドヤア。

そんなこんなで、想定外の出来事が起きつつも私は佐倉の部屋に上がることに成功したのだった。

…
…
…
…

——帰宅部こそが至高。

そのような考えを友人の神谷に披露したものの。

実際のところ俺は舞天高校の部活動についてあまりよく知らなかった。

新入生歓迎会というイベントで様々な部のパフォーマンスを見たが特にグツとくるものもなし。

各団体5分程度の発表で短時間にしてはよくまとめられたクオリティの高い発表ばかりであったが、自分も参加したいと思うようなものはなかった。

しかし、一部の団体についてはそもそもパフォーマンスのしようがないクラブもあった。

運動系の部活動はまあ、申し訳ないが卓球部以外興味はないので置いていて。

文化部に関しては音楽系の部活動以外は普通の宣伝に終始していた団体が多かったのだ。

だからこそ。

一通り見て回リたかった。

昼休み神谷と話した部活に入るメリットは非常に視野が狭い。

女子にモテるために部活をするというよりかは友人を増やすために部活に入るのが一番の目的だろう。

同じ趣味を共有し、目標に向かって互いに技術を高めあい、交流をする。

それこそが部活動というもののコンセプトであり、本質だ。

断じて、女子にモテるためだけにやるものではない。

……部活動内のトラブルって大抵男女関係のもつれから起きること多いしな。

偏見かもしれないけど、中学校のころに傍観者として経験済みなのであながち間違った説でもないと思う。

さて、過去の話は置いておきこれからの話である。

しばらくは帰宅部でいるつもりというのは本当だが、部活動に興味があるのもまた事実。

新歓のときにあらかじめもらっておいたビラを手に、俺は教室を出たのだった。

天真さんを待たせることにはなってしまうが、どうせ俺が部屋にしようがいまいがゲーム三昧だろうし構わないだろう。

それに、あの汚部屋に入り浸ってたらマジで衛生面心配だし。

もし仮に入りたい部活があったとして入部するタイミングを逸すのも嫌だし、時間のある今のうちに見ておくに限るからな。

夕食の時間までには帰るつもりだし。

すでにある程度の目星はついているため、そんなに遅くはならないはずだ。

まず最初の部活動の活動場所に向かおうとしたとき。

後ろから声がかかった。

「佐倉君、どこに行かれるのですか？」

「白羽さん？」

にっこりスマイルいい笑顔。

白い天使あくまの登場である。

いや、そこまで苦手なわけではないんだけどさ。

自分の部屋ピッキングとかされてみ？

こんなヴィーナスレベルの女子も恐怖の対象になりうるってことが分かるから。

「部活、一応目ぼしいところは見て回ろうかなって」

「なるほど……私も付いて行ってもいいですか？」

「まあ、いいけど……」

なんか怪しいな……。

でも、ちようどいいかもしれない。

ちよつと話しておきたいこととかあるし。

「何か所くらい見て回るんですか？」

「二か所だけ。ちよつと見学だけして帰ると思う」

「了解です。では行きましょう」

「白羽さんの興味が向くような部活じゃないかもしれないけど」

「いえ、全然お気になさらず。むしろ私も色々見て回りたいと思っていましたから」

一か所目は卓球部。

活動場所は第二体育館の二階。

現在の部員数は約20名。

男女比は2対1程度。

実績は団体戦県大会優勝、全国大会出場経験あり。

収集した情報通りならそこそこ規模の大きい部活だ。

「……佐倉君、その後調子はいかがですか？」

「おかげさまで大変よろしゅうございます」

やや抽象的な問いかけだが、意味は理解できた。

やっぱりというか、彼女も例の件で話しておきたいことがあったよ
うだ。

お守りを渡されてから特に何も話をしてなかったし。

今のところ何の不調もない。

悪夢も見なくなったし、金縛りとかにもあっていない。

「お守り、効果があつたっぽいから。ありがとう」

「そうですか……それならよかったです」

安堵のこもった優しい声色で言われ、少しドキツとする。

わざわざ俺の私用に付き添ってまで話す機会を設けてくれたことは
素直にありがたかった。

「除霊の方も済んだので、もうご安心ください」

「へ？」

「ずいぶん昔から佐倉君に就いていた霊だったみたいなんです……」

心当たりありますか？」

いや。

あのさ。

唐突に仰天ニュースカミングアウトすんのそろそろやめない？

最近衝撃の事実発覚しすぎでしょ。

「いつの間に……っでもしかして」

「ええ、昨日佐倉君の部屋にお邪魔している間に」

……マジか。

いや、もう。

なんか、もういいや。

「なんというか、ありがとう？」

「はい、どういたしまして」

お礼を言おうにも状況のクレイジーさ加減に疑問符がついてしま
う。

今更事態を複雑にとらえる意味もない気がする。

要約すれば白羽さんマジぱねえつす。

以上。

女子と廊下を二人並んで歩く。

まともな心境でいつかはそのようなシチュエーションを迎えたい
ものだ。

遠い目をしながら白羽さんと二人、第二体育館へと向かった。

第二十一話

木製の建物特有のにおいが鼻につく。

体育館のにおい、と言えば理解してもらえらるだろう。

やや汗臭さが混じった、青春の匂いだ。

「二階はバドミントン部とハンドボール部が使ってるんですね」

キュツキュツ、という足で床を踏みしめる音が響き渡る中、若者たちの声が反射していた。

入口の扉は開放されたままであり、外にまで体育館内の音が漏れていた。

校舎内を歩き回るためのサンダルから体育館シューズに履き替えてから中に入る。

入学時に買った新品でまだ足に馴染んでいない感覚が少し嬉しくなってしまうのはなぜだろう。

「曜日によって使用団体が変わるみたいだよ」

「そうなんですか？ どうやって決めてるんでしょう」

「まあ、部長同士が話し合って調整してるんじゃないかな」

悪霊の件の話がメインでついてきたのかと思っただが、どうやらそんなこともなかったようで白羽さんも見学する気が満々だった。

用事に付き合わせる罪悪感が薄れたので素直にありがたい。

「白羽さんはどっか部活入る気あるの？」

「今は特に、といったところでしょうか」

運動部であれば弓道部。

文化部であれば茶道部か華道部。

白羽さんのイメージであればそこら辺が似合うだろうか。

完全に見た目と雰囲気と判断しているので口にはしないが。

S Mクラブとか似合いそうじゃない等と言った暁には入部届を出す前に入院届を出すことになってしまいうだろう。

入院だったらまだいいが下手すりゃ入獄することになるからな。

絶対言ってはいけない。

「何か失礼なこと考えていませんか、佐倉君」

「イイエゼンゼンマツタク」

「……………」

こういうやりとりは恋人関係一歩手前の男女がやるものですよ白羽さん。

テンプレ応答はさておき、今回の目的は卓球部の活動見学だ。

一階の半分程度の大きさの二階を独占して使っているそうで、たまーに他の部から何故卓球部だけ鼻負されるのかと苦情の声がかかるらしい。

二階はスペースも広く、最近改装されたばかりのため非常にきれいな環境で活動ができる。

羨望や嫉妬の的になるのも仕方がないが、その分実績も上げているので愚痴程度のクレームに収まっているらしい。

活動している人たちの邪魔にならないように壁沿いを進む。

俺たち以外にも見学に来ている新入生はいるようで、隅っこのほうで目立たないように練習を覗いていた。

「どうせだったらヴィーネさんとかも誘えばよかったかな」

サターニヤさん連れてくると練習妨害の危険があるので彼女は考慮外である。

「ヴィーネさんはヴィーネさんで用事があるらしいですよ。何か先生に頼まれごとをされたそうで」

もともと一人でさっさと見学して回るつもりだったので誘おうという発想がなかったが、白羽さんが付いてくるならヴィーネさんとも途中合流という手段もあったかもしれない。

まあ、後の祭りか。

歴史が感じられる壁の汚れや床の傷を後目に二階への階段を上る。卓球は中3の夏の大会で引退して以来だから、半年程度のブランクがある。

それでも動きやセンスは体が覚えているだろう。

少なくともサーブで空振ったり、ラリーが一往復で終了したりだとかということはないはずだ。

「白羽さんは卓球できるっ！」

「卓球ですか……中学校の体育で少し経験した程度ですね」

卓球はイメージとしてはほかのスポーツに比べると大分容易な感じがあるが、実際のところそうでもない。

繊細な技術の力で勝負が決まる要素が確かに多いが、スタミナはもちろん球威を強めるための基礎的な筋力の増強も不可欠だ。

とはいえっても体育の授業やレジャー施設で友人と気軽にプレイするぐらいであれば流石にそこまでは要求されないが。

最低限のルールさえ知っていればいい。

……特に、白羽さんはあんまり激しい運動すると凄いことになっちゃいそうだしね。

なぜかは言わんけど。

二階に上がり、練習スペースに出る。

卓球台が間隔をはさんで並べられており、ちょうど活動しているところであった。

身軽な卓球用の練習着の恰好をした男女が現在進行形で打ち合っている。

ラリーの練習だろう。

四人一組一台でクロスラリーをやっているみたいだ。

よく見ると試合をやっているところもある。

思った以上に広々とした空間。

一階が見下ろせる造りで、ピンポン玉が一階に落ちていかないうちに天井から緑色のネットが張られていた。

柵の高さが胸ぐらいままであるので余程のことがない限り不慮の事故が起きたりということもないだろう。

「すいません、見学をしたいのですがよろしいでしょうか」

壁際のベンチの方に立っていた男子部員に断りを入れる。

アポなしでの来訪だが今は新歓時期だし問題は全くない。

卓球部目当ての新生も見渡せば何人か練習に交じっていた。

普通の体育用のジャージを着ているのがそうだろう。

中には制服姿でラケットを握っている者もいた。

当然、俺たちも歓迎される。

さわやかな笑みを浮かべながら応対してくれた。

てかこの部員超イケメンだな。

卓球部というよりかはテニス部にいそうな容姿だ。
くたばれ。

心の奥底でつぶやく下衆の魂を抑えつつ俺も愛想よくコミュニケーションをとらなければ。

「二人とも経験者かい？」

「僕は中学校のとき卓球部でしたが、彼女は体育の授業でちよつと経験したぐらいです」

「なるほど。うちの卓球部は初心者でも懇切丁寧に教える体制が整ってるから経験が浅い人でもおすすめだよ！」

「とりあえずお邪魔にならない程度に見学をさせていただきたいのですが……」

「見学といわず一緒に練習に参加してみないかい？ 今は新歓期間中だからいつもの練習じゃなくて新入生向けの体験メニューでやるんだよ」

「体験メニューですか」

「そう。筋トレとか走り込みとかの基礎練は置いて、最初にラリー練習をちよつとやってある程度慣れてもらってから練習試合をする、みたいな感じで気楽にやってるんだ。時間に余裕がなければ途中で抜けてもいい」

ほお。

それは確かに初心者に優しい。

小難しい要素がまったくないからな。

「試合は部員の方と？」

「腕に自信があればそれでもいいし、不安だったらペアを組んでダブルスでやったりもできるね」

ふーむ。

今日のところは雰囲気さえ掴めればオツケーなのでそこまでガチで卓球をやりに来たわけではない。

白羽さんにいいところを見せる、なんて心づもりでもないし。

まあでも。

そうだな。

ここはちよつと勇気を出してみるか。

「白羽さん」

「はい？」

「せっかくだからダブルスでちよつとやってみない？」

人生で一度はやっておきたいこと。

女子とダブルス。

拒否されたときのショックがヤバそうなので結構勇気が要ったが、何とか誘うことができた。

あくまで下心からではなく。

ただの友達同士なんだからこれくらい普通だよね的なノリで。

アイアム陽キャ。

ノットチェリーボーイ。

さあカモン。

「ええ。もちろんいいですよ」

「よしきた。それでは、ダブルスで試合お願いできますか？」

「お、いいだろう。じゃあたまたま今暇だから部長の俺が直々に相手になろうじゃないか」

内心ガッツポーズをして、俺は話を進める。

心臓がちよつとバクバクいつてるのは気にしない。

顔赤くなったりしてないだろうか。

いやホント。

童貞はどうしてもこうなっちゃうんだよ。

女子免疫不全症候群だから。

もはや先天性の病気だからこれ。

女子の方は何とも思ってたとしても、男子の方は興奮状態。実はヴィーネさんたちを花見に誘うときも結構緊張していた。

ナンパとか自然にできる人たちはどういうメンタルしてるんだろう。

嫌みとかではなく普通に知りたいものだ。

「ラケットは貸してあげよう。ペンとシェイク、どっちがいい？」

「俺はシェイクで。白羽さんは？」

「私もシェイクをお願いします」

スペアのラケットだからか、余り手入れはされていないようだ。

まあ、正直ラケットの良しあしにこだわるような実力の持ち主ではないけれど。

何にせよ、やるからには全力で。

審判無しの簡易なゲームだが、物事を楽しむためにはやはりベストを尽くさなくては。

「では、佐倉君。お手柔らかにお願いしますね」

「……それ、相手に言うセリフだからね？」

……足とか踏まないでね。

「じゃあ、始めようか」

「はい、お願いします」

もし理不尽な暴力を白羽さんに振るわれたらどさくさに紛れてセクハラしよ。

スポーツマンシップをガン無視した気持ちのまま、試合が始まった。

… … …

「……………」

「……………」

——気まずい。

静けさが、いやに肌を刺してくる。

静けさだけじゃない。

纏わりつく視線が、私に居心地の悪さを感じさせる要因となっていた。

(佐倉のやつ、いったいいつになったら帰ってくるんだ?)

どういうわけか隣人の妹と、隣人の部屋で二人つきりという状況に陥った私。

そんな状況でも面識のない者どうし、仲良くやればよかったのだが……

「……………」

(こいつ、愛想が無さすぎるだろ)

部屋に入って最初のころは、いくらネトゲ廃人の私とはいえ彼女とコミュニケーションを取ろうとした。

人づきあいは面倒なので極力避けたいのはやまやまだが、一応は友人の妹だし挨拶ぐらいはしとくかと思ひ話しかけたものの……

以下、その時のやりとり。

Q. えっと、名前なんて言うんだ？

A. 佐倉沙那です。

Q. 今日ここに来ることは佐倉（兄）には説明してあるのか？

A. いいえ。

Q. ……好きな食べ物？

A. ごま。

まるでロボットがしゃべってるのかと感じるほどの感情の無さ。会話してるだけで息苦しい。

話を続けようとする気が全く感じられなかったので、仕方なく私も会話を諦め結局ネトゲを始めた次第である。

コミュ障ここに極まれり、といったところか。

ちなみにメイド服を着ている理由についてはどっからどう考えても地雷っぽいので触れないでおいた。

佐倉が私への嫌がらせのために呼んだわけでもなさそうなので、ラストレーションのやり場もなく。

ただこうして仕方なく時間を過ごしている。

部屋に入ってからずっと突き刺さる視線。

当然初対面なので恨みを買うような真似をした覚えはない。

人の目を気にするようなタイプではないが、それでも居心地が悪いことには変わらない。

……仕方ない。

こうなったら徹底抗戦だ。

下界に来てから培った厚顔無恥さを存分に発揮してやろうじゃないか。

私は大人しく佐倉（兄）を待つことにし、佐倉（妹）をガンスル―
することに決めたのだった。

第二十二話

「いやー、惜しかったな」

「すいません、足を引っ張ってしまつて……」

「全然。むしろ体育の授業でやつただけなのにあそこまで上手なのは凄いな」

春のまだ肌寒い時期にはちょうどいい運動を終えた後、白羽さんとさきほどの試合の感想を言い合いながら廊下を歩いていた。

「そうですか？」

「うん。サーブミスもレシーブミスもなかったし。何より横回転サーブを返せたのはちよつとビビつた」

白羽さんのボディのスペックは見掛け倒しではなかった。

まず、その俊敏さ。

実は卓球部だったのではないかと疑うレベルでダブルス特有の立ち位置の入れ替わりを難なくこなしていた。

卓球のダブルスではルール上交互に球を打たなければならない。

だからこそ立ち位置の入れ替えは重要なのだ。

そして、ダブルスを組む二人の間に実力差がある場合、うまく息があわず体がぶつかつてしまうなんてことは結構あるのだが……。

スムーズに球を打ち返し、俺が次に球を返せるようにすぐさま場所を譲る。

俺が打ち返し後ろに下がろうとすると同タイミングで前に出る。

円を描くような立ち回りで、互角に渡り合う。

普段の俺への態度とは違い極めて心配りに満ちたプレイであった。

想像以上の俺たちの連携に、現役卓球部員も侮ることをやめ目の色を変え始めた。

それなりには強い俺と、いろいろな意味で戦闘力の高い白羽さん。

気を抜いて勝てるほど甘い相手ではないとみられたようで、ついにはサーブに本気の字を見せ始め、ラリー中もいやらしい小技を使ってくるようになった。

結果、3セットのフルゲームで、スコアは7―11。

そしてよくよく考えると服装が制服なだけにハンディもあった。大健闘、という他ないだろう。

しかも、相手になつてくださった部長は部内ランキング一位で、もう片方のペアの人も上位の人らしかつた。

当然の流れで熱い賛辞と熱烈な勧誘を受けたが、ひとまず保留ということでその場を後にした。

あまりその場のノリで決めたくはないからね。

「佐倉君も流石でしたね。無駄のない動きに思わず見惚れてしまいました」

「ダブルス中にペアの人の動きを観察する余裕のある白羽さんの方が流石だと思うけど」

そんな感じで褒めあいをしながら歩いていると。

「ん……う？」

「どうしました？」

「いや、天真さんからラインが届いてた」

「ガヴちゃんからですか？」

ホワン、というかなんというか。

擬音化しにくい特徴的な受信音を耳にして、スマホを手取る。

ラインのアプリを起動し見てみると、天真さんからメッセージが届いていた。

メッセージの内容は……

『おい』

『返事しろ』

『はよ』

『ころすそ』

「え、こわ」

「ガヴちゃんらしいラインですね。要件が簡潔です」

覗き見た白羽さんがのんきにコメントしているが、メッセージを受け取った俺は何故殺害予告をされているのかさっぱりだ。

『殺すぞ』が『ころすぞ』になっていることに天真さんらしさを感じてしまう。

濁点入力するのがめんどくさかったんだね。

ちよつとわかるよ。

「どうやら急いでるみたいですね」

「んー……なんかあったのかな」

俺と白羽さんが卓球の試合に興じている最中にメッセージが送られてきたらしい。

受信時刻から30分経っていた。

先に俺の部屋に行かせたが、ちゃんと合鍵は渡したはず。

何かトラブルでもあったのだろうか。

とにかく、結構待たせているし返信するか。

『返信遅れてごめん。どうしたの?』

送ると、ほとんど間を置かずに既読がついた。

やはり、急な案件のようだ。

心配で心がざわつくが。

次の天真さんの返信に目をむいてしまった。

『芋来てる』

『いいつやば〜』

『へるふ』

『はよ』

いや何があつたんだよ。

わけのわからないメッセージの羅列にクエスチョンマークが舞い踊る。

ていうか芋ってなんだ。

「なんか俺の家芋に襲われてるらしい」

「はあ……すいません、ちよつと意味が分かりません」

いやほんとその一言に尽きるわ。

芋のサイヤ人なんていただろうか。

マジで状況がつかめん。

まあ、彼女の性格からして、文字を入力するのが面倒で適当に省略しようとしたらミスったのだろう。

問題はこういう間違いを犯したのかだが。

……芋。

いも。

いも。

あ、なるほど。

「変換ミスか」

推測がついたので、返信をする。

『妹?』

『そう』

正解らしい。

『いも』と入力した時点で出てきた予測変換の『妹』をタップする際に間違えて『芋』を押してしまったらしい。

自分の面倒省略のために相手に解釈の面倒を押し付ける天真さんは穀潰しの鑑だろう。

……それにしても。

いったい誰の、なんて疑問は浮かんだ瞬間に沈んでしまった。

「沙那が来てるのか?」

『俺』の部屋に来る『妹』なんて、『俺』の『妹』に決まっている。

確かに、沙那が来るとなれば悪いことをしてしまったなと思うが。

天真さんの言葉が気になる。

そんなに俺の妹はヤバイやつだったのだろうか。

家に客が来た時や電話に出る時などは普通の対応をできるくらいには礼儀をわきまえている子だし、ちよつと無愛想なところは玉に瑕かもしれないが、その無愛想具合もただのシャイな娘ととらえれば自然な程度だ。

俺が前に電話をしたときもいつも通りの様子だった……いやでもそういえばちよつと元気がなかった気がする。

そんなに気にするほどでもないかとその時は思ったけど。

俺がいない間に沙那に何かあったんだろうか。

相談があるから、電話とかではなく直接会って話したい的な理由で。

だとしたら、速攻で帰らざるを得ないが。

『もうちよい詳しく説明できるっ?』

『めんどい』

ええ……。

指先の運動すら怠りますか……。

マジで一回根性鍛え直した方がいいんじゃないかなろうか。

「妹さんの方に連絡をとってみてはどうでしょう」

「それもそうだね」

文字通り天真さんとはお話にならないので、件の妹の方に電話を試みることにする。

やや時間をおいて、通話がつながった。

「もしもし? 沙那?」

『……はい』

「いったいどうしたんだ。急に俺の部屋にくるなんて」

『兄さんの方こそ……誰、あの人』

質問を質問で返すなあーっ!

……と叫びたかったが、隣に白羽さんがいるのでやめておく。

マイペースなのんびり口調。

静謐で、淡々とした言葉。

いつも通りのしゃべり方だ。

でも、少し棘のある言い方だった。

「ただの同級生だよ」

『兄さん……ただの赤の他人を自分の家に呼ぶほど……防犯意識ない人……だったっけ』

「いや、じゃあただの友達」

『……兄さんって、出会って間もないただの赤の他人を……自分の家に呼ぶほど、頭の悪い人だったっけ』

あれえ……。

なんか応答がやけにひねくれてる。

まるで昔のツンデレ期の沙那に戻ったみたいなの……。

「沙那、何かあったのか？」

『別に……何も』

何も無いのに家からそこそこ離れた俺のアパートに来るほど俺の妹は頭の悪い娘だっただろうか。

電話の向こうの沙那の表情はうかがい知れない。

ただ、いつも通りむすっとした顔でいるんだろうなとは思っていった。

実際のところどうなのかは、神のみぞ知る、だが。

……まあ、仕方ない。

今日のところは家に帰ろう。

まだ二件目の部活動を見ていないが、二人のことが気がかりだ。

「とにかく、今から帰るから天真さんに失礼のないようにな」

『……………』

返事がないが、ひとまず電話を切る。

代わりに天真さんの方にメッセージを入れた。

『妹がなんか迷惑かけてるみたいでごめん。今から帰る』

『り』

『沙那はごまが好きだから冷蔵庫に入ってる牛乳にごま入れてあげると喜ぶと思う』

『り』

『1足す1は？』

『に』

よくできました。

流石に眼球の運動は怠っていないようだ。

「ごめん、家の方が心配だから今日は帰るね。部活の見学、付き合ってくれてありがとう」

「いえ、久しぶりにいい運動ができたのでとてもよかったです」

ダブルスをしている最中、ずっと白羽さんの通ったあとの残り香をかいでいたことは口が裂けても言えない。

マジでいい匂いがエンドレスだったから鼻血が出そうだった。
心の中だけでごちそうさまを言って。
俺は我がアパートに向かうことにした。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

——どうして∴返事してくれないの？

耳鳴りが止まらない。

鈴がずっと耳元でなっているかのよう。

冷たく、固い音が響いてやまない。

——私は、兄さんのことがこんなに好きなのに。

本来甘酸っぱいはずの言葉が、重くのしかかる。

鉛のようにつしりと。

こびりついて離れない汚泥。

そのような最低極まりない表現がしつくりくるほど。

——今、行くからね。

果たして、彼女は人間なのか。

容姿は間違いなく人間だ。

一般的な女性。

むしろ、魅力を挙げていけばキリがないほどの理想的な女性。

なのに、どこかがおかしかった。

例えるなら、美しい絵画。

絵の女性は、薄つすらと微笑み、何かを見つめている。

完璧と形容するしかない、妖艶ささえ兼ね備えた美を収めた絵画

は、どこかがいびつだった。

けど、分からない。

何がおかしいのかが。

人は見かけではない。

絵画も、実は見かけではないのかもしれない。

五感では感じ取れない感覚というのは得てして不気味なものだ。

はつきりと知覚できないからこそ、未知を見出し人は惹かれるのか

もしれない。

人の血液と、髪の毛と、爪でできた絵画の話はそれほど怖くなかった。

実際に見ていないからかもしれないし、ただのフィクションだからと嘲笑に終わっただけ。

でも、それがいざ現実の話となると変わってくる。

五感で感じ取れなかった感覚が、五感で感じ取れるようになった途端。

つまり、『歪み』が目に見えだしたら。

どうなるかは想像に難くなかった。

光沢を帯びた、包丁が、何故か点に見えて。

それがどういふことか理解した時にはもう。

——私も、痛かったんだからね。

——ずっと、ずっと。

——きつと、その目がいけないんだよね。

——見た目ばかり気にする兄さんだから。

——しかた、ないよね。

——大好きだよ、兄さん。

… … … … …

好きな属性は何か、と聞かれたらあなたは何と答えるだろう。

もちろん、ここで言っているのは萌え属性のことだ。

唐突な質問で申し訳ないが少し考えてみてほしい。

眼鏡っこ？

ポニテ？

地味子？

ツンデレ？

影の薄い主役？

まあ、いろんな回答があることだろう。

あるいは、複数の回答をする人もいよう。

その回答を否定することは絶対じゃないし、されるべきではない。

ただ、今まで見聞きした属性の中で一種類だけその良さを理解できない属性があった。

すなわち、ヤンデレである。

先の文章は昔友人に貸してもらった小説の引用だ。

小説を読み終わった後、実際に妹のいる俺にこんなもん読ませやがってぶっ殺すぞと憤慨したものだ。

ヤンデレがどういった属性か知るにはもってこいの教材だったと言えよう。

永久に光を奪われた主人公と、現実と理想の乖離に発狂して自我崩壊したヒロインのエピローグはまさに鳥肌ものだった。

俺は読書をする際に決まってイフストーリーを考える習慣がある。もし、あそこの場面でああしていればどうなっていたのだろう。

特に、バッドエンドじみた展開で物語が終わった時には、どうしたらハッピーエンドにたどり着くことができたのだろうか。

しかしながら、ヤンデレものの小説に関してはそんなイフストーリーは夢物語もいところだった。

主人公がどんな行動をとっても、どんな受け答えをしても、ヒロインはバッドエンドへの道へまっしぐら。

お手上げ万歳グリコのオマケといった感じだった。

と、まあヤンデレというものに対してとにかく良い感情がない俺なのである。

で、なぜこんな話を持ち出したのかというと。

俺が鈍感系主人公ではないことの証明のためである。

つまるところ、「あれ、俺の妹若干ヤンデレってね？」と先ほどの沙那の電話から察知したのだ。

まあ、単なる可愛い嫉妬心だとは思うけど。

家に帰って玄関の扉を開けたら天真さんが倒れていて、沙那が血まみれの包丁を手に持っていたとかいう展開はまさかないだろう。

それでも、念には念を入れて。

一応妹と話をしておくことにする。

俺の学生時代は *school days* であってほしくないからな。

ちなみに、天真さんの身を案じるなら自分の部屋に帰らせた方がよいのではと思う人もいるだろう。

確かに、選択肢としてはありだ。

だが、俺の妹は色々鋭い。

まず地頭が相当良く、彼女自身が自分の直感の有用さを把握しているので、推測力が異常に高い。

他人の行動の意味を必ず考えれば、ほぼ100パー当てる。

水平思考ゲームや、それに類するクイズで彼女は負けなし。

脳内に浮かぶ『選択肢の多さ』が人並みではないのである。

もし、天真さんを自分の部屋に帰らせたとしたら沙那の脳内には次のような推測が立つだろう。

なぜ天真さんが自室に帰ったか

↓①単純に居心地が悪くなった

②兄（俺）に教唆されたから

③体調不良

④忘れ物

⑤急用

⑥その他

恐らく、情報がない状態でこれくらいの選択肢は浮かぶだろう。あくまでこれらは俺が考える理由なので、本人にはもつとたくさん理由が浮かんでいるかもしれない。

そして、ヤンデレの思考だと十中八九②の選択肢が直感で選ばれる。

で、次の思考回路。

なぜ兄はこの女を自室に帰らせたか

↓一緒にいられると都合が悪いから

↓①轢殺

②鮮血の結末

③永遠に

④我が子へ

要するに、バッドエンドである。

まあ、まさかわが妹に限ってそんなことはないと思いたい。

そんなわけで、やましいことがあると思われたくはないので俺がアパートに帰るまでは下手に状況をいじらないようにする。

何にせよ。

俺も久しぶりに沙那の顔を見たいので早く帰ることにする。

俺はくだらない妄想を掃き捨て、帰る足を早めた。

第二十三話

さて、玄関前に到着した。

「……」

ちよつとドアを開けるのが怖い、勇気を出して取っ手に手をかける。

「ただいま」

家に誰もいなくてもただいまを言う派だが、最近は誰かしら部屋に居座っている（というか侵入している）ことが多いため、寂しい気分にはならない。

いいことなのか、悪いことなのかと言ったら……

「まあ、いいことなのかな」

「兄さん！……おかえりなさい」

「………おう」

久方ぶりに見る、ひとりの美少女が俺のただいまに応える。

「沙那、来るなら来るで連絡してくれよ」

「妹からの……サプライズ……です」

幼い、けれど確かに女性らしい華のある顔立ち。

気品を纏った黒髪は、月のような光沢を放ち。

ささやかれる声は、甘美極まりない。

「相変わらず、さなたんS・マジM・天使T！」

「……ごめん、ちよつと何言ってるのか…分かんない」

「ともかく、見た目は元気そうでよかった」

「……兄さんも」

白いほっぺたに、うっすらと健康的な赤みがさしている、風邪とかを引いているっていうわけではなさそうだ。

「………」

「………」

会話が途切れる。

いつものことだから気まずさを感じないってわけでもなかった。なにせここには天真さんがいるのだから。

当然沙那にとっては初対面。

どうせ今週の日曜日、花見の時に顔を合わせるので今紹介しようか
と思っただが。

その前に。

「ちよつとトイレ行ってくる」

「……ん」

自然な振る舞いで、怪しまれないように俺はトイレに向かう。

表情もポーカーフェイスで。

無の心持である。

「……ふう」

個室に入り、便座に座り、一息つく。

「……………さて」

俺はスマホを取り出した。

ラインのアプリを起動し、天真さんとのトーク画面で俺は今の心境
を吐露した。

『なんで俺の妹ネコミミメイドになつてんの?』

『しるかばか』

『ですよね』

メッセージの口調が素になってしまったが、この時の俺はちよつと
それどころではなかった。

『お前の趣味でさせてるわけじゃなかったんだな』

『当たり前でしょ』

あいにく、妹にそんな恰好を強制するような狂った趣味は持ち合わ
せていない。

というか、よく天真さんあの格好の妹から逃げなかったな。

『天真さんのさっきの言葉の意味がよくわかった』

『お前の妹、いつもはあんなんじゃないのか』

『いつもはあんなんじゃなかったと思うけど……』

果たして、実はわが妹にはコスプレの癖があったのかもしれない。
今まで俺には隠してたというだけで。

似合ってるし、個人の趣味なので別に特にどうとも思わないんだ

が。

そうなる何故今更という話になってくる。

あれで何も無いなんてことはないだろう。

明らかに異常事態だ。

『私は帰った方がいいか?』

『うーん。かもしれない』

『分かった。じゃあ、タイミングを見計らって離脱する』

こういうときはしつかり気を遣ってくれる天真さんすこ。

『そうしてくれると助かります』

『り』

あまり長い時間トイレに入っていると当然怪しまれるので、そこま
で話したところで俺はトイレを出た。

沙那は、俺の部屋で天真さんの方をじっと見つめながら座ってい
た。

その視線にどんな感情をこめているのか想像するのは怖いのでや
めておく。

とにかく、事態がややこしくなる前に天真さんを離脱させよう。

「ねえ、兄さん」

「なんだ?」

「この人、誰?」

あふん。

……ヤバイ。

先手を打たれてしまった。

「……電話でも言っただろ。ただの友達だ」

「……本当に?」

「本当だ」

「……………」

変わらず向けられる疑惑の目。

しかし、事実天真さんはただの友達という関係性に過ぎないのだから他に答えようがない。

「じゃ、私はこれで」

「うん。ありがとね、天真さん」

天真さんも、自分がいると話がこんがらがるだけだと改めて感じたのかもしれない。

話の流れを無視して暇を申し出たので、俺も快く答える。

沙那の視線を受けながらも、手をひらひらと振って部屋を出ていく天真さん。

流石授業中教師ににらまれながら寝れるだけあるな。

玄関が閉まる音がして、妹と二人きりになる。

「……あの人、兄さんの……彼女？」

「違う」

天真さんが居なくなった途端。

ストレートに聞かれたので、ストレートに即答する。

天真さんが居る場ではいくら何でも聞くのははばかれたのだから。

「でも………すごい、美人さん……だった」

「美人だからって下心で接するとは限らないだろ」

実際は結構な下心をもって彼女を部屋に歓迎しているのだが。

それにしたって、猫みたいにごろごろしてる天真さんを愛でる気持ちだけだ。

変なことをしようとかいう気持ちは……思い付きはするけど、実行するつもりは当然ない。

「……」

傍から見たら普段通りの無表情。

けれど、兄の俺から見たらそうじゃない。

「そんなジト目で見るなよ。照れるだろ」

「……」

「俺が高校生になって早々、部屋に女子を連れ込んでるのが気に食わないのか？」

「……べ……つに」

ラブコメの素直になれないヒロインみたいな凶星の反応に、逆にどうすべきか迷うが。

無表情キャラのくせに分かりやすいんだか分かりにくいんだかはつきりしてほしいものだ。

とりあえず、今の沙那の心境はなんとなくだが理解できる。

単純に、嫉妬の感情だろう。

沙那がもしたただの同級生とかだったら思い上がりも甚だしいが、沙那はブラコンだし、俺はシスコンだ。

伊達に十年以上も同じ屋根の下で暮らしてないのだから、このくらの機微は把握できる。

例えば、もし逆の立場だったら。

沙那が一人暮らしを始めて、俺の知らないうちにどこの馬の骨とも分からぬ男を部屋に連れ込んでいたとしたら。

俺の心境は察するに難くない。

相手の男をどのバッドエンドに追い込んでやるかを考えることだろう。

まあ、それは冗談にしても。

まともそうな馬の骨だったら俺もそこまで目くじらを立てることはないかもしれない。

ショックを受けるかもしれないが、ショックを与えることはしないはずだ。

当の本人が合意の上で付き合ってるのであれば、俺がとやかく言う筋合いはない。

嫉妬はするし、悲しい気持ちにはなる。

けれど、それだけだ。

妹の交際相手が女性をもてあそぶゴミみたいなやつだったらぶつ●すが、そうでないなら何も問題はない。

自分の気持ちの整理だけして、それで終わりだ。

今回の話はそこまで大きな問題ではないが、同じような話だ。

沙那の嫉妬の感情は正直俺にはどうしようもない。

理想論的な解決方法は俺が女性との関わりを一切断つことだが、そんなことができるわけもなく。

結局、沙那が精神的に兄離れするしかないのだ。

であれば、俺がすべき計らいは沙那が兄離れできるよう、適切に距離を取ることはあるが。

「沙那、こっちこい」

「……………」

俺が手招きすると、沙那が無表情なりに訝しげな顔をして近づいてきた。

「ほいむぎゅー」

「——!？」

無警戒に近づいてきた沙那を思いつきり抱きしめる。

突然の奇行の被害に遭った妹は、何が起こっているか分からないといった顔でされるがまま。

「愛い奴よのおお主は」

「なに、して…………!？」

「俺の成分が足りなくなっただから来たんだろ。だから補充してやるよ」

「き、きもちわるい…………!」

言いつつも、顔を真っ赤にしながら振りほどくようなことはしない。いやでもごめん。

確かに今のセリフは我ながらキモすぎるわ。

反省。

官能小説の主人公みたいな発言をしてしまったが、抱擁は緩めない。むしろ、沙那がジツとしているのをいいことに俺は妹の頭をなで始めた。

「やめ…………やめ、て」

「はいはい…………今日はこの後どうするつもりなんだ？」

「え…………？」

「今から家に帰るのは遅すぎる。ここに泊まってくつもりで来たんじゃないのか？」

「……」

「凶星か」

黙りこくってしまいう妹に愛おしさを感じる。

念のため言っておくが、嫌らしい気持ちは全く湧いてない。

もし今胸に抱いているのが白羽さんとかだったら間違いないく嫌らしい気持ち100パーセントになるだろうが、今はゼロだ。

だとしても、普通の兄妹間ではやらないようなことをしてる自覚はある。

我ながら妹に甘いし、自分自身妹に甘えさせてもらってる部分もあるだろう。

「まあ、でも、学生であるうちはいいだろ」

「……？」

独り言ちた言い訳に、沙那が上目遣いでこちらを見上げてくる。

ぐう可愛すぎて吐血しそうだが、冷静さを保つように努める。

「いや、何でもない。それで今日はどうするんだ？」

「……泊まってく」

「そうか。了解」

沙那からしてみれば、天真さんのことについては誤魔化された気がするかもしれない。

しかし、身の潔白のしようがないのだから、こちらとしてもそれ以外に方法がないのだ。

話を露骨にうやむやにされて、沙那は納得いかない顔をしているが、今は許してくれるように祈るしかない。

「ところで、わが妹よ」

「……なに」

「そのパンパンのリュックサック、何が入ってるんだ？」

沙那のサラサラとした黒髪を撫でながら尋ねる。

妹は思い出すように宙を見つめてゆっくり答えた。

「着替え……勉強道具に……あと、盤と駒」

「マジか……よくそれも持ってこようと思ったな」

「……さしたい」

昔から使ってきた愛用の将棋盤と駒。

安っぽい代物でボロボロだが、俺と沙那にとっては思い出の品だ。

「長くなりそうだし、先に風呂入れるわ」

「ん」

ようやくと、沙那を解放し俺は立ちあがる。

長くなりそう、というのは対局時間のことだ。

俺も沙那も大体将棋の棋力が同じくらいのため、一時間以上はかかるだろう。

「ふう……」

とりあえず、何とかなった。

もとよりそこまで心配してはいなかったが、妹の機嫌が直らない可能性もあったからな。

ヤンデレ化もしてなかったようで何より。

と、安心して部屋を出ようとしたところで。

後ろから声がかかった。

「兄さん」

「ん？ どうし……うおっ」

振り向くと、妹がすぐ目の前にいた。

ややうつむきながら、立っている。

「兄さん」

「は、はい」

謎の威圧感。

不穏な気配。

思わず、後ろに半歩下がってしまう。

「どうして……逃げるの？」

「いや、別に逃げてなんていな——」

「えい」

妹が、倒れこむようにして俺に密着する。

同時に、腹部に違和感。

「兄さん、いま……私……言った、よね」

「は？」

「……『さしたい』って」

「な……」

下を見ると。

沙那が手にもつ包丁が、俺の腹部に深々と刺さっていた。

視認すると、灼熱の感覚が身を襲う。

言葉では到底表現しきれない激痛が、刺傷部分から脳に伝わる。

「兄さん、知ってる？」

「――」

「『やんでれ』はね……」

――愛する人の話なんて、聞かないんだよ。

麗しい声で囁かれ、しかし言葉は痛みによって遮られ、意味を理解するには至らない。

時が経つにつれ訪れるのは、暗闇と感覚の喪失。

足の力が抜け、立っていられなくなった俺はその場に崩れ落ちた。
だんだんと。

意識が遠のいていき。

妹の三日月のような笑みを目にしたのを最後に、俺の視界は闇に染まった。

——なんてことはもちろんなく。

俺は何事もなかったかのように起き上がった。

妹も持っていたおもちゃの包丁を床に置き、俺が起き上がるのに手を貸してくれる。

「80点だな」

「……なぜ」

俺が身体を起こしながら言うと、妹は不満げに零す。

思ったよりも点が高くなかったのだろう。

「道具のチョイスは完璧だ。場が落ち着いて俺が安心しかけた時に仕掛けたのもいい。だが、許せない点が一個」

俺は深呼吸して、言った。

「リアルすぎて心臓に悪いわアホ!!」

「……ドツキリ、大成功？」

妹が目を輝かせて聞いてくるが、俺の心臓はいまだにバクバクいていた。

途中まで割とマジの展開かと思ってた。

腹におもちや包丁が刺さった時点で感知的に違うことは気づいたが、危うくショックで失神するところだった。

「……怖かった？」

「ヤンデレネタはできればやめてくれ。トラウマになりかねない」

「……てへぺろ」

無表情に拳を頭にコツツンする妹にため息が出る。

今の流れは、俺と沙那の間で日常化しているやり取りの一つだ。

お互いホラーものが好きだから、隙あらば兄は妹を、妹は兄を驚かせようとするドツキリ試合。

仕掛ける方は相手を傷つけない範囲で最大限の恐怖を相手に与えるよう策を練り、仕掛けられた方は感想を述べる。

意味が分からんやり取りだが、これも昔からの話だ。

最初に仕掛けてきたのは妹だった気がするが……そもそも沙那が以外にも仕掛け人としての役回りを好んでいるので、被害者はもっぱら俺だ。

もちろんやられっぱなしではなく、たまに機をうかがって俺も仕掛けるがそこはポーカーフェイスのわが妹。

まったく成功しない。

まだ俺と沙那が小学生くらいのころむきになって本気を出したことも一回あるが、恐怖を与えすぎてもう少して警察沙汰になるところだったのでそれ以来本気を出すのは控えている。

「あのときの……意趣返し。やっつとできた」

「まだ根に持ってるのかよ……」

沙那のドッキリは毎回毎回創意工夫が凄いが、今回ののはタチが悪い。

流れが流れだったし、妹もヤンデレのツボを理解しきって演じていた。

今までのの中では最大級のドッキリだろう。

『『おしいれかくし』のときの私に比べれば……何でもない……でしょ？』

「……いや、あのとときはすまんかったってホント」

当時はやっていた都市伝説の一つを実行して沙那へのドッキリを仕掛けたのだが、ちよつとした手違いで俺が気を失ってしまい、沙那は俺が本当に呪われたと思って大泣きしたらしい。

結局すぐに意識を取り戻したが、その時沙那は家の電話で警察と救急車を呼ぼうとしていた。

両親もたまたまいなかったので、かなり危ないところだった。

「しかし、お前ヤンデレネタ使ってくるなんて……もしかして自分がヤンデレ妹っぽいことしてる自覚あるのか？」

「……べつに。そこまで……兄さんのこと、好きじゃない」

髪の前つちよをいじりながら答える妹。

その姿はヤンデレというよりただのツンデレだ。

「なんにせよ、いつも通りで安心したよ」

「兄さんも……いつも通りの驚きっぷりで……何より」

呆れつつも、俺は改めて部屋を出ようとする。

しかし、沙那が再び声を掛けた。

「あ……そうだ、兄さん」

「……今度はなんだ？」

「これ、母さんと私が作った……お守り。上げる」

「は？」

妹が差し出してきたのは、フェルトと何かで作った人形だった。カバンや筆箱などに括り付けられるように紐も付いている。

「あ、ああ。ありがとう。でも何で急に？」

「さあ……わからない。母さんが、突然言い出したから……」

「……そうか」

お守り、というと先日の悪霊騒動で白羽さんからもらったものが思い浮かぶが。

母さんの意図が分かりかねるが……流石に関係はないか。

「じゃあ、風呂入れてくるから適当にくつろいで待っていてくれ」

「はい」

考え事を振り払い、俺は今度こそ部屋を出る。

もらったお守りをポケットに入れ、俺は風呂場に向かった。

第二十四話

風呂を入れ部屋に戻って。

まだ二人とも夕食を食べてなかったの、買い置きしてあった材料で適当に二人分の飯を作って食べ。

諸々を済ませてから沙那と将棋盤を挟んで向かい合った。

ちなみに相変わらず沙那の恰好は猫耳メイドのままである。

どこのハ○ワンダ○バーだ。

「こうして指すのもなんか久しぶりな気がするな」

「実際は、そこまで久しぶりじゃ……ないけど」

小気味いい音を出しながら駒を駒箱から出して、並べながら話す。

こつちに引越してきてからまだ一か月も経っていない。

家から持ってきた詰め将棋本や棋書などは暇なときに読んでいたが、こうして面と向かって指す機会は全くなかった。

家にいる時は沙那と毎日指していたので、その分余計にブランクがあるように感じられるのだろう。

「振り駒……する」

「ん」

歩を五枚とって、沙那がジャラジャラと駒を振る。

バラツと盤の上に投げると、歩が二枚に、と金が三枚。

俺の先手だ。

「お願いします」

「お願いします」

兄妹間で指すときも、丁寧にあいさつをする。

改めて考えると不思議な習慣だが、親しき仲にも礼儀ありっていうし。

何もおかしいことではない。

7六歩。

角道を開けて、俺は妹との久しぶりの対局に臨んだ。

…
…
…
…

「……負けました」

ずっと静かだった部屋に、ポツリとこぼれる。
動いたのは、俺の口ではなかった。

「……あそこ、素直に……王手飛車？」

「それもあるし、単に5五角でもやばかった気がする」

沙那が悔しががる様子も見せず、感想戦を始めたので、俺もそれに返す。

脳内の将棋盤も用いながら、互いに反省点を指摘する。

戦型は俺が四間飛車で、沙那は右玉。

今回に関しては、中盤まで割と沙那優勢だったが、終盤で沙那がミスし、俺の勝利。

沙那には申し訳ないが、勝った時の感想戦ほど悦に浸れる時間はないだろう。

内容が多少酷かったとしても、勝ちも勝ちだ。

抑えようとしつつも、嬉しさでやや饒舌になりながら俺は喋る。

「だから、やっぱりその後の叩きが余計だったかな」

「ん……」

「あとは、まあ……このぐらいか」

「……ん、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

十分ほどの感想戦を終えて、一息つく。

大分接戦だったので、それなりに疲労した。

「というか、集中するために正座で指してたので足のしびれがヤバい。」

「兄さん……明後日のお花見……あの人も……来るの？」

俺が足のしびれと格闘しながら、体勢を変えようとしていると、沙那が言った。

「ああ。来るぞ」

「……ふうん」

「ちなみに、あと三人くらい来る」

「……は？」

「なお、全員女子のもよ——おい、おい！ やめろ！ 痺れた足を殴るな！」

バシツバシツ、と痺れた脚にはまあまあ効く威力で殴られる。

無表情で一定のリズムで攻撃してくるので、サイコパス感が凄い。

「……バカなの？」

「な、なにが？」

「school daysな学生時代……送りたいの？」

「いや、待て。自分でも正直びっくりしてるんだ」

「私の方が……びっくりしてる」

ホラーすぎる発言に恐々とするも、花見当日にはバレることだし隠しても無駄だろう。

「……はあ」

「落ち着いたか」

「とりあえず、母さんには……兄さんが不純異性交遊にハマってたって……伝えとく」

「勘弁してくれ……」

あながち完全なでまかせというわけでもないのに、反論もしづらい。

変な誤解も生みたくないし、天真さんたちのことは母さんにはあまり知られたくないことではあった。

まあ、沙那の性格上、こうなることも予想はしていた。

今日来るのは想定外だったが、早いうちに事情を話しておいて損はないだろう。

ぽろつと余計なことを言った感は否めないが、口に出してしまったものは仕方ない。

というか、沙那が多少つつけんどんな態度だったとしてもあの四人であれば普通に馴染めるんじゃないだろうか。

サターニャさんは行動が予測できないからアレだけど、ヴィーネさんと白羽さんの二人は構ってくれると思う。

そもそも人類という枠組みに入っている生物であれば、顔面偏差値

ハーバード、萌え偏差値MITの我が妹を邪見に扱う者などありえない。

心配する必要は皆無ということだ。

「明日はどうしようか」

沙那が来なければ適当に家でダラダラして過ごそうかと思っただが。

せっかく来てくれたのであれば、明後日が花見とはいえ明日もどこかに出かけてもいいかもしれない。

しかし、沙那は首を振って、

「特に用事もないし……家で、ゆっくり……過ごす」

「そうか」

外で遊ぶと基本的に金がかかるので、俺としてはありがたい。

一人暮らししている俺の懐事情に気を遣っているわけでもなさそうだし。

明日になって気が変わったら、またその時に考えればいいだろう。

「今日はもう風呂入って寝るか」

「どっちが先……入る？」

「いつも通りじゃんけんでもいいだろ」

「ん……分かった」

沙那がパーで、俺がチョキ。

俺が一番風呂だ。

「じゃ、お先」

心なし無表情をどこか疲れたような顔にしている沙那を置いて、洗面所に向かった。

… … … … …

40度のお湯にゆっくりと身を浸し、大きなため息を吐いた。

入れたバスボムの炭酸が太ももをくすぐるのがとても気持ちいい。

柑橘系の匂いが溶けたお湯を両手ですくって、顔を洗う。

ぷはっと顔を振るって水を払い、また一息ついた。

「……何も考えずに入浴を楽しめたらよかったんだが」

問題はまだ一つ残っている。

沙那という時はあまり触れていなかった、というか触れられなかったので今風呂に入っている間に結論を出しておきたいことだ。

「なんであいつ猫耳メイドになってんだ……?」

バスボムが完全に溶け白くなった濁り湯が、俺が零した問いに揺れる。

端的に感想を言わせてもらえば、クツツツツツツツツツツツツツ可愛かった。

「え、こんな生き物いいの? 神様嫉妬しない?」って思った。

この娘に○されるなら本望かもってちよつと思つたもん。

実際、可愛すぎてつい抱き着いちゃつたしね。

普段なら流石にあそこまで露骨な愛情表現はしない。

あ、なんか思い出したらまた愛しさ爆発しそうになってきた。

「いやほんとほべほべほおほあほほほいふぼろほお!!」

妹に万が一聞かれるとまずいので、お湯の中で一しきり発狂して気持ちを鎮める。

ついでに素数も数えとくか。

2、3、5、7、さなたんかわいい、11、13、17、ヴィーネさんペロペロ、19、23、29、31、おっπ、37、……

「……ふう。これでよし」

ところどころ超越数とか完全数とか円周率混じつたけどまあいいや。

そろそろ本題に戻ろう。

何故、俺の妹は猫耳メイドのコスプレをしていたか。

結構な疑問である。

とりあえず沙那の今日の一日の行動を整理してみよう。

今日は金曜日で平日だから、朝は普通に学校に行ったはずだ。

で、放課後。沙那が言うには学校から直で駅に向かい、俺のアパートまで来たらしい。

沙那は方向感覚も特別悪いわけでもないし、スマホという利器がある以上、すんなり来れたことだろう。

まあまあ時間はかかっただろうから、あの荷物では大変だったに違いないが。

何にせよ学校が終わって突発的に思いついてやってきたわけでもなく、割と計画的な来訪だったようだ。

俺のアパートにやってきて、あの服装で出迎えようとして。

そしたら見知らぬ金髪の美少女が帰ってきたのだから、心底驚いたことだろう。

まあ、それは天真さんも一緒だろうけど。

「動機に関してはサプライズ以外の動機が思いつかん」

『久しぶりに会う兄を驚かそうと思って』。

そんな可愛らしい動機であればよいのだが……

(こじつけが過ぎるよなあ……)

それにサプライズという動機では、もう一つの疑問を考えるうえで、も差支えがある。

どこで、いつ、あの服装を手に入れたのか？

この問いに対する答えは、三つ考えられる。

家にあるやつを持ってきたか、学校からここに来る途中で買ったか。

あるいは、誰かからもらったか。

順に検討していこう。

最初に、家にあるやつを持ってきた可能性について。

朝は制服でいつも通りに登校。

学校指定のカバンには教科書などの勉強道具。

サブバッグの中は、さぞカオスなことだっただろう。

将棋盤と駒、宿泊用の着替え。

それから、女子である沙那ならジャージも入っただけでおかしくはない。

体育の授業がなくても、掃除とかで使うだろうし。

これらに加えて、あの生地の分厚いロングスカートのメイド服と猫耳。

容量的にはギリギリ入るかな、と言ったところだ。

物理的に可能とはいえしかし。

さつき部屋の中であいつのリュックサックを見た時、あれ以上物は入らなそうに見えた。

仮に入ったとしても、中から何か特定の物を取り出そうとするのは相当難しい状態になるだろう。

一度将棋盤やらなにやらを取り出さないとはいけなくなるはずだ。

その何が問題になるかと言えば、他のクラスメイトの目である。

中身が透けないビニール袋とかに入れば隠せるとはいえ、万が一のことはある。

まして、折り畳みの将棋盤なんて目立つものも入っているのだ。

着替えのタイミングで注目される危険は十分あると言えよう。

トイレとかの個室に入ればなんとかなるかもしれないが、それにしただって傍から見れば不自然に見える。

このようなリスク、事情を考慮したうえで。

果たして沙那はサプライズのために猫耳メイド服を家から持ってきた可能性が高いといえるか。

0ではないが、サプライズが目的だとしてしまうとやはり納得することはできない。

動機として弱すぎるからだ。

リスクに見合っていない。

他のクラスメイトにバレれば間違いなく引かれることだろう。

メイド服をわざわざ学校に持ってくるうまい言い訳も思いつかない。

だから、家から持ってきたという可能性はいったん置いておく。

次に検討していくのは学校からこっちに来るまでの間に購入した可能性。

きつと、ド○キのような店で沙那は購入したのだろう。

多分、あのおもちやの包丁と一緒に。

「解せないのは、この方法はコストがかかるってところか」

おもちゃの包丁であれば、まあそれほど値段はしないだろう。安っぽい、触ればおもちゃとすぐに分かるようなものだったし。

下手したら百均でも売っているような代物だ。

だが、メイド服は違う。

間違いなく数千円はするはずだ。

たった一回のサプライズに使用するためには、いくら何でも高い。確かに驚いたし、その奇跡的^{マジック}相性に魅了もされた。

けど、俺を一時的に魅了するためだけに、沙那は無駄遣いをするようなタイプではない。

金銭感覚は普通にまともだし、メイド服を買う際に「高い」という印象はきちんと持ったはずだ。

文字通り、割に合わない。

では最後に、誰かからもらった可能性。

これは何というか、否定はできないけどあくまで可能性に過ぎない気がする。

コスプレ好きな友人が沙那にたまたまいて学校でメイド服を譲り受けたとかだったら、友人からしたらなぜわざわざ学校で渡さないといけないのかってなるし。

何にせよ考えにくい。

結論。

動機がマジで謎。

そもそもコスプレをする人の心理、というものが良く分からないからな。

自分はしないし、周りの人でもコスプレを好んでする人もいない。

コスプレをして兄を出迎えようとする妹の心理など推測のしようがない気がする。

『ぐひゅっ、沙那たん猫耳姿も可愛いおww』とか言っただけだったんだらうか。

別にそんなことしなくてもいくらでも愛でられるのだが……。

「……………ん、いや、待てよ」

ふと、一つの考えが浮かび上がる。

そもそも沙那は、俺に見せるためにメイド服を買ったのか？

家に帰った時のことを思い出す。

玄関のドアを開けて、沙那が出迎えて。

どんな反応。

どんな顔をしていたか。

俺が言うのもなんだけど、俺を見て嬉しそうにはしていた気がする。

しかしすぐにいつも通りになって、そのまま天真さんの話になって。

で、それから特にメイド服の話になることなく今に至る。

普通だったら。

俺に見せるためにメイド服を着ていたんだとしたら。

どこかのタイミングで感想を求めたりしてくるものじゃなかろうか。

わざわざ、手間をかけて持ってきたのだからなおさらの話。

むしろ、雰囲気的には「触れちゃいけないのかな」くらいに思ってしまった。

「……………」

……これは一つの推理なのだが。

天真さんの反応を思い出してみてほしい。

俺がトイレの中で天真さんとラインでトークした時、『お前の趣味でさせてるわけじゃなかったんだな』と、彼女は何気なく言っていた。もったもんな心配だろう。

世間一般的に猫耳メイド服を自分の妹ないし自分に近しい関係の人間に着せることは、どんなにオブラートに包んでも「紳士的」という表現を使わざるを得ない。

ストリートに言うなら、変態的。

俺風に言うなら、「よろしく同志よ！」

つまりだ。

「あいつ、あの服俺のアパートに置いてく気じゃね……？」

その意図するところは、天真さんが模範的に示してくれた。

彼女はきつとドン引きしたことだろう。

妹に、あんな格好をさせて興奮している俺（兄）の姿を想像して。

女子として色々アレな部分がある彼女でさえそうなら、いわんや他の女子をや。

実際に着ている人間がいなくても、俺の部屋に入って、あんな服を見たらなんと思うか。

俺が余程うまい言い訳をしない限り、結構な風評ダメージを食らうことだろう。

隠すにしても、あのサイズだと地味に隠し場所に困る。

一回きりの消耗品としてではなく。

彼女にとつて虫除けてきな意味で、あのメイド服を購入したのではないか。

嫉妬深い我が妹が、兄の部屋に不用意に入った女子を恐れおののかせるために。

その女子に、「この男は猫耳メイド趣味の、変態野郎である」、と知らしめるために。

「筋が通っていないくもなから怖いんだよなあ……」

しかし、そうだとしたらわざわざ着用せずに、それこそ俺にバレないように部屋に隠しておけばよかったのではないか。

「せっかくだから着てみたくなかったか……？　ありえるな」

どうせこの狭い部屋に住んでればすぐに見つかる。

なら、手に入れたついでに着て兄を出迎えよう。

しかし、最初に現れたのは見知らぬ女。

メイド服のことなど一旦どうでもよくなった。

そんなところだろうか。

「……本当にこの推理が合ってたとしたら、ちよつと怖いな」

いやまあ考えすぎかもしれないが。

これ以上沙那の猫耳メイドの動機は思いつかないし、ひとまずはそういう結論にしておこう。

「そろそろ出るか」

色々考え事をしてしまったが、それほど時間は経っていない。

余り沙那を待たせても悪いので、思考を区切り俺は風呂を出ることにした。

第二十五話

土曜日。

学校がある日と同じ時間帯に起床して、私はいつも通りの朝を迎える。

顔を洗ったり、朝ご飯を食べたり、身だしなみを整えたり、部屋の掃除をしたり。

ルーティーンを一通り終えて、私は今日のこれからの予定を確認した。

「まず、ガヴの部屋に行ってガヴを起こして、ガヴの部屋を掃除して、ガヴに綺麗な部屋でちゃんと朝ご飯を食べさせて、それからガヴに……」

今もきつと床の上でごろ寝しているであろう天使の姿を思い浮かべながら、私は悩む。

怠惰を貫こうとする自分の友人をどのようにして説得するか、頭の中で駄々をこねまくるガヴルールをいかになだめるか。

私は考えていた。

「私一人じゃ無理そうだったら佐倉君にも手伝ってもらって……いえ、ダメよ。佐倉君に迷惑はかけられないわ」

頼りになる友人のことを思い出すが、甘えてはいけない。

あの駄天使の世話は、私が責任をもってしなくてはならないのだ。

天真ⅡガヴルールⅡホワイトの駄天は、前兆に気付いて引き止められなかった私のせいでもあるのだから。

ガヴのために多めに作ったおかずをタッパーに入れて、おにぎりをラップで包んで、後は水筒にあっただかいお茶を入れて。

せつかくなのでいつもガヴが迷惑をかけてしまっている隣人の分のおかずも用意した。

「男子はもつと濃いめの味つけの方が好きなのかな……ガヴにもヘルシーすぎるって文句言われたし」

今日のところは時間が無くてできないけど、そのうちガヴが満足で

きるような味付けを研究したい。

今日も天気が良い。

気温に関して言えば、昨日よりも温かい朝だ。

むしろ、いつもより多い荷物を抱えていくのであれば暑いくらいかもしれない。

「それじゃ、行ってきます」

うららかな日差しの中、私はガヴのアパートへと向かった。

…
…
…
…

えー、今日はですね。

今の時刻は午前七時を回ったところなんですけどね。

ちよつと、実況をさせていただけこうかとね、思うんですよ。

何の実況かですって？

いやそんなもの決まっておりますよ。

朝チュンの時間帯に実況することなど、一つしかないでしょう。

「スー……スー……」

カメラが手元にあれば、シャツターがぶつ壊れるくらい高速で写真を撮っていたことでしょう、我が妹の寝顔です！

見てくださいこの顔！

この美少女っぷり！

全国の妹愛好家どもが見れば嫉妬と羨望と憎悪で発狂しそうな、俺の視界！

なんと、俺の妹は愛らしくも俺のベッドに同衾しているのです。

それもまあ致し方ないでしょう。

まさか、家から自分の布団を持ってくるわけにもいきませんまい。

この部屋にもお生憎様、寝具は一つしかないのですから、この状況は必然ともいえるでしょう。

俺の枕に顔の半分をうずめ、俺の寝巻の袖をちよこんと握り、温もりを求めるようにもぞもぞと動きながら寝顔をさらす妹の姿。

讚えましょう。

崇めましょう。

今私が享受しているのは、まさしく至高。

ああ、賛美、賛美、賛美。

桃源郷に、我は至れり。

探し求めていたものは、すでにあつたのだ。

「アーメン……」

「ん……兄さん、おはよう」

と、気づいたら2時間くらい妹の寝顔を鑑賞していた。

実家にいるときは別に毎日一緒に寝ているわけではなかったから、今日は割とレアなケースだ。

7200秒の記憶を、俺は忘れない。

あと、流石に沙那もメイド服をパジャマとして使用するつもりはなかったようだ。

風呂を上がった時点で普通の寝やすそうな格好になっていた。

「おはよう、沙那。今日も可愛いぞー」

「……頭ぐりぐり……しないで」

妹の寝ぐせの付いた髪をさらにぐしゃぐしゃとかき回しながら、俺はベッドから起きる。

高校生で一人暮らしだと、休日であっても早起きできるから健康に良い。

昨日夜更かししたわけじゃないので、沙那も俺も快眠できた。

素晴らしい朝である。

「朝飯、昨日の夜の残り野菜炒めになるけど、大丈夫か？」

「うん……文句なし」

顔を洗いに行く前に沙那に聞くと、いつもより二割くらい音量を落とした寝ぼけ声で沙那は返事をした。

朝の分の米は予約設定で既に炊き上がっているはずなので、後は適当におかずをぶっかけて食うだけである。

みそ汁はインスタントなので悪しからず。

洗面所に行き、顔を洗い、寝起きのなままった体を伸ばしたりポキポキ鳴らしたりして。

菌も磨いてからトイレを済ませて。

朝食の準備にとりかかった。

冷蔵庫にキャベツ、にんじん、ピーマン、もやしと野菜が一通りあるのを確認してから適当に取り出して適当に切る。

フライパンに油をひいて野菜を炒め、斜め切りにしたソーセージも加え、塩コショウをぶちまければ……

「二丁上がり……大皿も一応買っておいて正解だったな」

一人暮らしを始めてまだ一週間程度しか経っていないのでまだまだどこちない部分もあるが、このくらい簡単な料理であれば大分手慣れしてきた。

フライパンから大皿に移し、部屋に戻って小テーブルに配膳する。

昨日の夕食の余りもチンして、いよいよ朝食の完成だ。

「できたぞ、沙那」

「ん、了解……」

俺が朝食の準備をしている間に沙那も洗顔などを終えていた。

ぼんやりと宙を見つめて髪を指で梳いている妹に声を掛けて、一緒に食卓に着く。

「いただきます」

沙那は割り箸で、俺はマイ箸を手に取り、朝食を食べ始めた。

しばらく無言でもぐもぐ過ごしていると、ふと話題を思いついたので早速振ってみることにした。

「そっういや沙那って帰宅部だったよな」

「……………うん」

ゆっくり野菜炒めを咀嚼してから、沙那が返事をする。

話し方と同じくらい、沙那の食べ方はスローペースだ。

きっと、よく味わって食べている証拠だろう。

「どうして…………？」

「いや、高校生になったら沙那はどっか部活入ったりすんのかなって」

沙那の趣味についてはある程度兄として知っているつもりだが、部活の趣向については正直分からない。

沙那が何部っぽいかな、と聞かれたら少し答えに詰まるだろう。運動部って感じでもないし、何かしらの文化活動に勤しんでいる印象もない。

将棋を指したりホラー映画を良く観たりはしているが、部活として取り組むほど熱心なわけでもない。

昨日部活のことについて色々考えたこともあって、少し気になったのだ。

「特に……ない………けど」

「けど？」

「マネージャー、みたいなのは……やってみたい、かも」
マネージャー。

なるほどそういう部活との関わり方もあるか。

「何のマネージャー？」

「……どうしようか、迷ってる」

「スポーツ、何か好きなやつあったっけ」

「一応、バスケットボールが……好き」

バスケットか。

体育の授業と、小学校のころ昼休みとかに遊びでやってたくらいだから、詳しいことは正直よく分からない。

というか、何がきっかけでバスケットを好きになったんだろうか。

聞いてみると、

「あの独特な……スピード感が……いい」

と返ってきた。

確かに、バスケットの魅力の一つは試合のテンポの良さだろう。

目まぐるしく変わる形勢と、キレッキレの選手の動き。

沙那は自分がプレイするよりも、間近で観戦を楽しみたいタイプらしい。

「兄さんは、卓球部？」

「んー、まーだ悩み中かな」

「他に……候補があるの？」

もやしを箸で束にしてザクリ、と頬張る。

どうでもいいけど、もやしの咀嚼音って地味に擬音にしにくいよね。

「将棋部、も悪くないかなと思ってる」

「ふーん……」

昨日、卓球部と一緒に見学をしようと思っていたのが将棋部だった。

卓球部とは違い、舞天高校の将棋部は特に実績は残していないようで、ガチ勢というよりかはエンジョイ勢が集まった部のようだ。

「……将棋部は……女子、いないんじゃないの？」

「部活にそういう出会いは求めるつもりねえよ。あと、念のため言っておくけど天真さんたちとは偶然知り合っただからな？」

高校に入った兄がナンパ野郎になったなどと思われているのか、妹がツツコミを入れてくるので反論する。

彼女たちと出会えたのはたまたま運が良かったからであり、俺が不純な動機を以て接触したからではないのだ。

「……すけべ」

「いや、だから違うって……」

蔑むような目線で見るのはやめてほしい。

例えば白羽さんからそういう目で見られるんだったら性癖の一つでも目覚めそうなのだが、実の妹からそういう目で見られると結構真面目に傷つく。

「……ん？」

ポケットに入れていたスマホに、ラインが届く音が鳴る。

妹の疑いの目線から逃れるために、食事中だがこれ幸いとスマホを確認する。

『佐倉君、おはよう☀ 朝早くごめんね。もう起きてるかな？』

うっひょー！

ヴィーネさんからじゃないですか。

すぐさま返信しなくては。

『おはようヴィーネさん。起きてるよ』

女子とこういうラインができるって、ほんと最近の俺幸運すぎない？

もしかしてそろそろ死ぬんじゃないだろうか。

外出する時は身の回りの安全に気を付けないとな。

すぐに既読が付く様子がなかったので、スマホをポケットにしまい顔を上げると。

無表情の妹と目が合った。

「……………また、女の子から？」

「……………はい」

「ヴィーネさんって、ハーフの人？」

「人のスマホ画面覗き込むのはマナーがなってないぞ、妹よ」

「食事中にスマホ……………よくない」

勝手にヴィーネさんとのトークを覗き込んでいた妹に苦言を呈すも、普通にブーメランである。

「ふーん。ふーん……………ふーん？」

「沙那。無表情で見つめてくるのはやめてくれ。怖い」

「じゃあ、笑顔の方が……………いい？」

それはそれで怖いから勘弁してほしい……………。

沙那は昨日の天真さんの時とは違い、それ以上特に何かを追求してくることはなく、俺たち二人はそのまま静かに朝食をとった。